
真・恋姫無双

二度目の人生も波瀾万丈

頭隠して尻も隠す

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 二度目の人生も波瀾万丈

【Nコード】

N5136Y

【作者名】

頭隠して尻も隠す

【あらすじ】

ハンター×ハンターの世界でキメラアントに討伐に参加させられた主人公。最後には後ろから刺されて死亡してしまう。でも、気が付いたら今度は別の世界に転生。今度こそ穏やかに暮らそうと思っても、それは叶わなかった。激動の時代に生まれた主人公は一体どうなるのか？この小説は作者の独断と偏見で作られているのでかなりのご都合主義やキャラの崩壊なども有りますので不快に思う方は見ない事をお勧めします

第一話 二度目の人生（前書き）

一応パワーバランスは考えています。H×Hの腕力最強がウボオーだとするなら、恋姫の世界では呂布となります。キルアでさえ16トンの腕力があるので念を使うととんでもない事になってしまいあれなので、恋姫の世界に合わせたいと思います。それでも無理が出てくると思うのでご了承ください。明らかに不自然なところがあるかもしれませんが気にしないと言う方は読んでみてください

第一話 二度目の人生

自分の意識が覚醒してくる。此処どこ？ …あたりを見渡そうとするが首が動かない、オレは一体…

「おい、泣いてくれ！息子よ」

誰かが叫んでいる。とりあえず、話を聞いてみる事にする。此処がどこだかくらいわかるだろう。

……あれ？声が出ない。もう一度 やはりでない。もう自棄だ怒鳴るぐらいのつもりで

「おぎゃあああ、おぎゃあああ、あああ（えゝなんで泣き声！？）」

「おおよつやく泣いたぞ、良くやったな紫苑！元気な男の子だ。」

「はい、あなた。名前はもう決めているのかしら？」

「ああ！性は黄、名を恩、字は子苑、真名を璃人と名付けようと思っ。どうだろうか？」

「字に私の真名が入っているわね。それに男の子だったら璃人、女の子だったら璃々、そう決めてましたもんね。私は良いと思います」

「それは良かった。よし、今日からお前は黄恩子苑こうおんしえん、真名は璃人りひなだ。元気に育てよ」そう言ってオレの事持ち上げるおじさん。

「あうあうあああうああ（オレの名前違うんですけど）」言葉にならない。なんで？

「ハツハハ、気に入ったか？そんなに大きな声で泣くとは」

なんかおじさんに抱っこされているんだけど、オレってそんなに小さくないんだけど……あれ？やったら手が小さいんだけど……少し首が動かせるようになったから自分の体を見える……あれ？おかしいな？……うそ!？

「あうあううううああ!……（オレの体縮んでるんですけど!……!）」

「もう、あなた、そこまでにしてください!璃人も泣いてるでしょ

う

「おおつとすまないな、ついうれしくて」

「ホントしょうがない人ですね。さ、璃人お母さんと一緒にお寝んねしましょうね」なんか・お姉さんが言っているが、正直聞こえてこない。自分の現状に精一杯だからだ。だけど、体は眠くなる、ああ、起きた時には元に戻っていますように

そう言っ意識がおちて行った。

自分の新しい名前を授かってから5年。第二の人生にも慣れてきた。

第二の人生と言っているが実はオレはもともとは違う世界で暮らしていた。クルタという一族に生まれ、旅をしながら暮らしていたが、8歳のころ幻影旅団という集団に襲われ一族は二人を残して全滅。オレともう一人の少年、クラピカは小さかったこともあり、大人たちに助けられなんとか生き残った。その後クラピカと行動を共にしようとも思ったが、あいつは復讐にとらわれ過ぎていて、相容れないとわかったので、オレは盗まれた一族の緋の目を探す事を目的とした。緋の目はクルター族にしかない特殊な目で、世界で最も美し

物の1つに数えられる。だからオレはハンターになることが緋の目探しの一番の近道だと思った。その世界では一種の何でも屋、ハンターという仕事がある。ハンターになるには試験に合格しなければならぬが、16歳でなんとかハンターになれて、その後念を学び数年の修行。戦闘力も付いたので本格的に緋の目を探すことにした。一応ほとんどの緋の目は集められたのだが、途中キメラアントというやつらが、国を攻めてきた時にオレもハンターとして討伐に参加させられた。

その討伐の最中にゴンとキルアに会い意気投合、すぐに仲良くなれた。話しているとクラピカの知り合いらしく驚いたが、クラピカが旅団を殺したという事を聞いてなんとも言えない感じがした。旅団を殺すことは別に気にしないがあいつがその事に耐えられないだろうと思った。復讐にとらわれていたが、あいつはもともと優しいやつだから、人を殺した後、後悔に苛まれるのだろう。クルタの皆はそんな事望んでいなかっただろうに

キメラアントの討伐はなかなか辛い。元来臆病な性格なので戦闘する際はほとんど逃げて誰かが討伐するのを待っていたが、何故か敵との遭遇率が異常に高く、戦闘になってしまふ。命には代えられないので緋の目を使って戦闘するのだが、いったん緋の目が発動すると好戦的になり余計に戦闘が増えてしまふ。王討伐の際には戦闘力のせいもあって強制的に参加させられたが、親衛隊のやつらが強い。何とか退けられたが今度はゴンが暴走。どうやら、自分の大切な人が殺され操られているのを見て治してもらおうとしたが、それは叶わず、悔しさからオーラを極限まで出し暴走。ゴンとキルアの師であるピスケが言っていたが、ゴンは善悪に頓着がないためどち

らにも染まり易いということだ。今ゴンは自分の無力さと後悔から闇に染まった。キルアと共にゴンを抑えようとするがとまらない。キルアも友達を攻撃できないらしく、オレが全力で行くしかない。

緋の目を発動し能力を最大限発揮なんとか互角にやり合うも体力が限界に来る。仕方なく捨て身で攻撃しなんとかゴンの正気を取り戻す事に成功。だが、その後、後ろから来ていた親衛隊のやつらに後ろから刺されそのまま息を引き取った。最後にゴンとキルアに気にするなど言えたのが良かったな。

それで死んだと思ったならなぜか赤ん坊の状態で生まれ変わり、しかも、名前が黄子苑となってしまった。しかも、この世界には真名とというのがあらしく、とても神聖な名前で勝手に呼んだら殺されてもおかしくないらしい。

現状把握は終わった。けど今の自分には一つ問題がある。

そう、なぜか、緋の目が発動する。肉体はクルタ族の肉体ではないのに、昔の感覚でやってみたらできてしまった。オレとしてはこれはあまり嬉しくない。なぜなら、この益州と呼ばれる地域では、赤目は不幸を呼ぶとされている。そんなもん迷信だろうと自分で思っただけでも周りはそうはいかない。その話を聞いてから人前で緋の目を発動することはなくなつた。これがバシて処刑にでもなつたら目も当てられない。バレないように周りを気にしながら生きるのはいくらも疲れる。だけど、生きるためには仕方がない。

名前が変わってから12年が経った。今でもなんとか目の事はバレずに暮せていたのだが、最近ちょっと危なくなってきた。昔発動した時に見ていた人がいたらしく、昨今の情勢も有って、噂になりつつある。今日もここに来る前にあからさまに不快な目で見られた。だから、城や街にいるのは居づらく、最近はこの森で鍛錬に勤しんでいる。やはりこの世界でも争いがあるらしく、物騒な世界らしい。元いた世界に比べれば、銃器がない分こちらの方が楽だが、治安があまり良くないため、各村が盗賊に襲われるなんて言うのがざらだ。基本的に自分が臆病な事は自覚しているので、逃げればいいのだが、逃げられないようになった時、戦える事に越したことはないので鍛えようと思っている。だから今オレは近くの森に来て基礎訓練を行っている

「ハア、ハア、ハア」ゴンとキルアとクジラ島に行った時、あの二人の身体能力には驚いた。キルアの方は御家柄のせいと言うものもあるが、ゴンは完全な天然ものなのだ。筋力はキルアの家で鍛えたりらしいのだが、それ以外はほぼ森の中での生活で身に付いたらしい。キルアの話ではハンター試験で無自覚で絶を使っていたほど、気配を消せるらしい。ほぼ動物ではないだろうか？と思っても仕方がないだろう。

だから、今森の中で修行している。森の中を駆け回るだけでも相当な訓練になる。地面は整地されてないためデコボコでその上を走るのだからなかなか辛い。前の体ならどうと言う事も無いが、今の体では息が切れる。2時間ほど走ったら限界が来た。

「フゝ、やっぱりここら辺が限界かな。念の修行ももう少しやりたいけど基礎体力がなきゃ話にならないからな」近くの川で顔を洗い少し休憩する

「でも、やっぱりゴンはすげえよな。今くらいの歳にはもう森を知り尽くしていたんだもん。それに野生動物とも仲良かったっぽいし、すげえな。オレなんか熊見た時なんて速攻で逃げだしたもん。いゝ。いやゝあの時はマジで危なかった、昔の体と違って頑丈じゃないから追いつかれたら死ぬとこだったよ。それにしても、念はできると便利だな。絶ができるだけで体力回復に役立つし、動物からだって逃げれる」

精孔を閉じてオーラを消す。この状態でいれば体力回復も早いだろう。肉体は違えど感覚は同じなので、オーラ量はまだまだだがそれなりに念が使える

「一度やっているから問題ないな。体の経験は残っていないが感覚の経験は残っているようだ。これなら問題ないけど…今のオレの系統って何だろうか？まあそれに関してはもう少し錬ができるように

なっってからだな。それに暗くなってきたしそろそろ帰るか」

自分の系統に興味を抱きながらも、追々やっていけば良いだろうと思いい城に戻るのだった

城に到着。なぜ城かと言うと家の母上が劉璋という武将の部下で一つの城を任されている。この世界では男性よりも女性の方が強いらしく城主は父上ではなく母上である。

しかし、今は母上は妊娠中、だから、代理として父上が城主をしている。父上は文官なので強くはないが書類整理が早く文官として優秀だ

「父上ただいま戻りました。」

「おお、璃人が、紫苑が心配するからあまり遠くに行くでないぞ。」

「すみません。すこし森に行ってみたくて。 ∴ 母上の方は大丈夫

「なのですか？」

「ああ、もう少しで生まれそうだと、医者が言っておった。お前にとっては初めての弟か妹になるな。兄としてしっかりしろよ。……それと、お前の目の事なんだが……」父上が辛そうに言う

「はい」

「どうやら最近噂になっていてな、お前は昔から隠しているのだが、最近盗賊とか、天災とか多いだろ？そのせいでお前の目の事を知っているやつが色々言っただけでな……」

「はい……。街に降りた時もやはり変な目で見られました。さすがに武力行使はされてませんが、最近はいつもとそうである。奇異の目や何か憎しみを持った目で見られる事もある。大人が3人くらい来た時は本気で逃げた。ホント怖かった」

「すまないな。お前のせいじゃないのだが、私がもつとしっかりしていれば……」父上の後悔した顔が止まらない。父上や母上が悪いわけではないし、自分自身なぜ緋の目を持って生まれ変わったのかも謎である。

「いえ、父上が悪いわけではありませんので。」

それでは失礼し

ます。母上の様子も見ておきたいので」

「ああ、紫苑も会いたがっていたからな。言っ来てい。ゴホ、ゴホ」
咳の仕方が変だったが、気のせいだと思いい父上に話しかける

「大丈夫ですか？父上も政務で忙しいでしょうから、体調には気を付けてください」

「ああ、大丈夫だ。お前にも手伝ってもらっているし、だいいぶ樂にはなつたんだ。風邪だろうから気にするな。それより早く紫苑のもとに行つてやれ」

そう言われて、なら大丈夫かなと思いい部屋を出る。昔なら気づいただろうが、何ぶんこの世界に來てからなまつてしまつているので父親の微妙な違いに気づかなかつた。気づいていれば変わつたかもしれない…咳した父の手に血が付いている事に気づけば

母上の部屋に向かう途中色々な視線を向けられた。オレの事をわかつてくれる人は憐れみを、わからない人は蔑みの目で見られる。思ふ事は色々あるがそれをしてしまつては父上達に迷惑がかかる。そこは抑えて母上のもとに向かつた。

コンコン

「母上、失礼してもよろしいですか？」

「あら、璃人帰って来たの？入って良いわよ」「母上の明るい声が聞こえた。体調は良さそうだ」

「失礼します。」

「そんなに畏まらないで良いわよ、親子なんだから」

「はい。 …… 体は大丈夫ですか？」

「ええ、陣痛もそこまでひどいものではないし、それにあなたで一度経験してるから、問題ないわ」

「・・・お手数をかけました」自分の生まれた頃を思い出してちょっとだけ恥ずかしくなる。あの頃の記憶はさっさと消したいものである

「可笑しな子ね、子供が親に迷惑を掛けるなんて当然のことよ。ましてや、赤ん坊のころなんてみんなそうなのよ。この子も早く出たってわがまま言ってるわ。」

「八八、言葉がわかるんですか？他になんて言ってるんですか？私の弟か妹は」

「そうね、お兄ちゃん遊んでかしら？璃人もお兄さんになるのだからしっかりしないとね。妹を守るのはお兄ちゃんの役目よ」

「それ父上にも言われました。…というか、妹なんですか？」

「ただの勘よ。なんとなくそういう気がするの、この子は女の子だつて。」

「すごいですね、エスパーですか？」

「えすぱー？」

「あ、気になさらないください。それより名前は決めてあるのですか？」

「璃人は時々変な事言っつわよね。」

名前なら決めて

あるわ。性を黄、名を紋、真名を璃々にしようと思うの。どうかしらっ。」

「璃々ですか、オレと同じ字が入っていますね」

「ええ、あなたが生まれる前にあの人と決めていたのよ。男の子だったら璃人、女の子だったら璃々って」

「これで弟が生まれてきたら大変ですね」

「大丈夫よ私の勘は結構当たるから。それにたとえ男の子が生まれてきたとしても私たちの家族ですもの、大切に育てるわ」

「母親の鑑です事」

「あら、家族と言ったでしょ？あなただって大切にしているわ。ちよっと私達に堅苦しいのがあれだけ」

「なぜか、こうなってしまうんですよ。直そうと思っではいるんですけどなかなか」

「まあ12歳でそこまではつきりと話せるほうが可哀しいのだけどね。息子が優秀というのも困りものだわ」

「不幸を呼ぶって言われてるんですけどね……」ちょっと顔を引きつらせながら言う

「……璃人、あなたの目のことは申し訳ないと思っているわ。でもね璃人……他の誰が何と言っても私とあの人にとってあなたは大切な息子よ。だから、もうそんな事は言わないで」紫苑が辛そうな顔をして言う

「……すみません。それでは長くいても母上の体調に悪いので、これで、失礼します。」

「ええ、また明日も来て頂戴。待ってるわ」最後に笑顔で言ってくれたがどこか無理した笑顔だった。

はいと言って部屋を出る。まだ寝るには早い時間なのだがあまり城内をうろついても不快なだけなのでサッサと部屋に戻って寝る事にした。

-
-
-
-
-
-
-

翌日

何より城内が騒がしい

「どうしたんですか？何かあったんですか？」少し騒がしかったので部屋を出て辺りにいた人に聞いてみる

「ああ若様、だ、旦那様が…」酷く慌てているようだ

「父上に何かあったのですか?!」そう言つと旦那様の部屋に言うてくださいと言われ、走って向かった。

廊下全力で走る。途中人にぶつかりそうになつたが、今は気にせず父上のもとに急ぐ

…着いた!

「父上!」勢いよくドアを開け中に入る

「おお、璃人か？すまないな、うるさくしてしまって」声に張りが
ない、というか今にも死にそうだ。部屋には紫苑もいて寢床で横に
なっている父の手を握っている。しかもその顔からは涙が流れている

「あなた」

「すまないな、紫苑。お前に負担を掛けたくはないのだが、どうや
らもう限界らしい」

「そんな事言わないで！あなた。まだ新しくできる子に会ってない
でしょう！」

「ああ、それだけが悔やまれる。娘になるか息子になるかは見たか
ったな　璃人がいるから娘が良いな、紫苑に似て美人になるだろ
う」

「なら、頑張ってください。私も頑張りますから！」

「おい　おい、無理は　するなよ。子供に…何か・合ったら…大・
変だろ？」

「でも！」

「これも運命だ。^{さだめ}それに医者 が言うには いつ死んで も可笑しく
ないらしい。逆に良く 持った方 だと言わ…れてし まった
よ」

「そんな…」紫苑の涙は止まらない

「璃人、こつち に来てくれる・か？」

「はい。」そう言って父の顔が見えるところに行く

「私は もう ダメだから、お前が…紫苑や…新しい…家族
を 守って…欲しい」

「 オレには…まだ無理です。母上達を守れるような力は…」

「お前が 悩んでいたのは…知っている。すまなかったな、その目
にして…しまつて。でも、お前が優しい子だという 事も知ってい
る。それに お前は優秀だ。だから、お前なら…守れるさ」この目

は父上達のせいではないのだが、父上を後悔させたまま死なせたくはない

「……頑張ってみます。あなたの息子として！」今自分にできる精一杯の言葉を送る

「ああ、その言葉が聞ければ満足だ。紫苑すまないが 先に行く、私の事を忘れて幸せに なって・く・れ」その言葉を最後に母上の手を握っていた手がダランと落ちた。その動作が死んでしまったというのを鮮明に物語っている

「あなた！あなたあああ！！！！！！！」母上の鳴き声が室内に響き渡るのだった。

…しばらく経って、母上がなんとか持ち直す

「母上」

「大丈夫よ璃人。あの人が愛した女は簡単に崩れるほど軟じゃないわ。ただ今日だけは」そう言ってオレの胸に抱きつく。まだ子供なのでオレの方が小さいのだが今日の母上は自分よりも小さく感じた。このまま静かに終われば良かったのだが

「失礼するよ」変なオヤジが入って来た。確かあいつは…

「韓玄！何しに来たの！」

「随分だな黄忠、夫が死んで気が立っているのはわかるが、人に当たるのは良くないぞ」

「出って行きなさい！あなたの顔なんて見たくないわ！」

母上がなぜここまでこの人を嫌うのかと言うと何かと父さんにイチヤモンをつけてきたからだ。優秀だった母上はもともとこいつが治めていたこの城を劉璋から任された。その事に腹を立て色々が悪さをしようとしたのだが、母上の方が全てにおいて上なので何もできず、母上より少し劣る父上は色々と罵っていた。自分の仕事をわざと押し付けるなど、やる事は三下なのだが、そのせいで父上の疲労がたまり病気になったとも考えられる。直接ではないにしろ間接的に父上追いつめた人物だ

「用事がすんだら、帰るとするさ。オレがここに来たのはそのガキにようがある」

「璃人に何する気！？」

「おっと誤解するなよ。これは劉璋様の命令だ。そのガキは益州

では不幸を呼ぶとされる赤目の持ち主だそうだな」

「何をでたらめな事を」

「証拠はある。おいガキそのバカが死んでどう思った？オレは最高だ、何せオレが色々と仕事を回して過労死させようとしたんだからな。どうだ？オレが憎いか？」

「責様！！」母上が襲いかかろうとするが

「これが証拠だ」

「！！」母上がこちらを見てしまった

「聞いたぜ、そのガキは感情が高ぶると赤目になるんだってな。その風貌に赤目、不幸を呼ぶガキとは良く言ったものだ。お前の旦那もこいつのせいで死んだんじゃないのか？ちなみにさっき言った事はこいつの目を確かめるために言ったウソだ、クッククク」全くウソじゃない事を笑い方が証明している

「それでオレに何の用ですか？」頭の中はキレているが、それを出さずに無表情で答える

「ち、気味の悪いガキだぜ。お前は益州から出て行け。本当は処刑されるはずだが、嚴顔のやつが劉璋様に言いやがったせいでそれは無しだ。だが益州からは出て行け。良かったな殺されなくて。まあでも益州だったらどこも変わりはないがな。それと黃忠、拒否は認められんぞ！お前が庇いだてした場合は一家そろって追放だそう。劉璋様はお前を評価してるようだからガキだけ見捨てれば助かるぞ」

「韓玄！」

「おつとオレに当たるなよ。これはこのガキをこんな風に産んだお前の責任だな。調子に乗ってオレの上に立とうとするからこうなるんだ。これからは弁えるんだな」

「それはお主の方じゃな」

「桔梗！」 「嚴顔！ どういう事だ！？」

「お主の不正が劉璋様の耳に入った。色々悪い事をやっておつたな。お前はもうお終いじゃ。誰かある！この者をひっ捕らえよ！」
そう言っつて部下達が入ってきて韓玄は敢え無く御用となった

「ツク、だがそのガキが追放になるのは変わらん！ザマあ見ろ！ハ

「ッハハハ」縄で縛られながらも、最後に吐き捨てて出て行った。

「最後まで下種なやつだったのう。紫苑大丈夫か？」

「ありがとう桔梗。でも」「視線がオレの方に向く

「子苑のことは済まなかった。お前の功績など色々言ってみたが処刑を逃れるので精一杯だった、すまん」敵顔さんは悪くないのだ。むしろ命の恩人でさえある

「謝らないで桔梗、あなたには感謝しているわ」

「そうです。敵顔さん感謝する事はあっても非難するなどと言つ事はありません。おかげで生きられるのですから。」

「子苑」「こちらを辛そうな目で見つめる

「母上もすみません。オレのせいで苦勞を父上が亡くなられたばかりだというのに。」

「良いのよ。もともと私のせいなんだから。ごめんなさいね、あな

たの目をそんな風に産んでしまつて…」

「それこそ気にしないでください。この目は意外と気に入っている
ので。それに子供の目を正しく産めるかなんて天の人にしかわかり
ませんよ」

「そうですね。でも、そうだとしたら、私は天に弓を弾くしかないわ。
息子を不幸にする天なんて…」

「あまりそういう事は言わない方が良いでしょう。今の時代帝は天子
様ですから、勘違いされたら大変です」

「そうですね。それじゃ、そろそろ準備をしなければね」

「え〜と何の？」

「決まっているじゃない。私はあなたが追放される事を良しとしな
いわ、なら私が出て行くしかないでしょう？」
「さも当然のように言
うが」

「…母上お待ちください。益州からはオレ一人で出ます」

「「!!」」 璃人以外の二人が目を見開く

「ど、どつして?」

「はい、今母上は妊娠中の身です。長期の移動は体に障ります」

「でも」

「母上、父上との約束でもありません。仮に母上と共に此処を出たとしてもオレのせいでもどこにも士官できません。それに出産後は何かと忙しいでしょう?まず武官としては雇ってもらえないでしょう」

「ならせめて桔梗の所に。お願いよ桔梗、璃人を」

「すまん。それもできんのじゃ。韓玄のやつが劉璋様に色々言ったせいで、わしの所でも預かれなんだ。紫苑と親しいわしのところにおれば、いずれ戻ってきてしまうだろうと わしが匿った場合は今度わしの治めている巴郡の民に迷惑がかかってしまう。許せ紫苑、子苑」悔しそうに言う桔梗

「いえ、オレ一人と民を考えれば当然の結果です。お気になさら

ず。」

「璃人…」涙を流しながらこちらを見る母上

「母上だから、オレが家族を守る最善を選ばせてください。母上や産まれてくる子を守る最善を。」

「う…めん なさい」泣き崩れる紫苑

「いえ、母上も元気な赤ちゃんを産んでくださいね」「そう言って部屋を後にする。部屋からは母上の泣き声が聞こえるが、厳顔さんに任せて自分の部屋に戻っていった。

第2話 旅立ちとあわわ

母上の部屋を出てから身支度をし町を出る準備をする。幸い父上の仕事を手伝いながら貯めたお金があるのでしばらくの間はなんとかなるし、前の世界での経験から山で暮らせば問題ないだろうとも思っている

「よし！行くか」そう言っつて部屋を出ようとすると敵顔さんがいた。

「まあ待て子苑。こいつを持って行け」そう言っつて一つの弓とお金の入った袋、さらに包帯が渡される

「なぜ包帯を？」

「わしが気づかぬと思っつたか？子苑、韓玄がいなくなるまでずつと拳を握っつておつたら、床に血が落ちていたぞ」父がバカにされて我慢ならなかつつたがこちらがキレたら状況が更に悪化するので我慢していた。その時、目一杯ちからを入れていたため手から血が出ていた。敵顔さんはそれに気づいて包帯を持っつて来てくれたようだ。

「ありがとつございます。じゃあ、これは何ですか？」貰つた包帯を巻きながら弓について聞いてみる

「お前の両親がお前のために用意したものだ。お前の鍛錬を見て作つたらしい。金の方はわしと紫苑からじゃ。今紫苑は眠ってしまつてな、代わりにわしが渡しに来た。受け取れ」

「ありがとうございます。今のままでは少し大きいですが、これが扱えるように頑張ります。爺顔さん、母上をお願いします。」母上の事は心配であるがオレが此処にいても状況は好転しないので爺顔さんに任せる事にする

「自分の心配より親の心配か？お前も変わった小童じゃの」安
心せい、紫苑の事はわしに任せて精一杯生きる。お前ならいずれ一
角の将になるやもしれん」

眉を少しひそめ困った顔をする爺顔さんだが、同時に励ましてく
ているようでもあった。

「ハハ、オレは臆病ですからそんな者にはなれませんよ。自分の事
で手一杯で、他人まで考えられませんか。…では、行きます。
生きていたらまた会いましょう」

「バカな事を言うな。絶対に生きて会うのじゃぞ。その時はわしの
真名をお前に授けよう」最初の言葉に怒ったようだが、最後は笑顔
で言ってくれる

「ハハ、じゃ頑張りますね。では」そう言って出口の方に歩いて行く

「達者でな」巖顔さんもこちらを見ながら別れを告げる。12年間暮らした場所を出るのは、名残惜しいけど、仕方ないかなと思いい城下を出るのだった。

今は益州を出るため歩いている。前の世界でも8歳で世界を廻っていたのでどうという事はないのだが、仕事がないのが問題だ。この時代は国が衰退していて武官など以外仕事先がなかなかない。とりあえず、落ち着いて考える事が必要なので益州を出て荊州に入り山の中で休憩をとる事にした。

・
・
・
・
・

山は食材の宝庫で生きることには困らない。しかも運の良い事に誰も使っていないような小屋があるので、ここでなんとか生活できる。なるべく金は使わず、動物や木の実を食べて行けば当分の間は大丈夫だろう。幸い川も近くにあるので水浴びもできるし。・・・まずは食糧調達しなければ

・
・
・
野ウサギと木の実をゲット。ついでにゴンを見習って釣りもしてみる。絶で気配を消しながら魚がかかるのを待つ。

「おお、掛ったあ！」

一気に引き上げる。前の世界にいたような巨大生物ではないが、なかなかおいしそうな魚だ。とりあえず、あと数匹釣ろう。

しばらく経って食料も取り終えたので、鍛錬の時間に入る

「まあ基本の四大行をきつちりやらないとな」そう言いながらも纏と練をひたすらやる事にした。当然基礎体力をつけるために近くに有った岩を担ぎながら走る。昼からずっとやっていたためかなりの疲労感である。だが昔の感覚が戻りつつあるので良しとする。さすがにオーラの総量はまだまだだが。

夜に食事をとってさっさと寝る準備を整える。この世界に来て初めての一人旅の夜なので、少し不安もあり、明日からどうしようかと考えながら、火を消し自家製の寝床に入った。

森で集めた落ち葉の上に寝ていると何やら音がする。

ガサゴソ……ガサ ……あう

何か人の声が聞こえた

「円」

今はまだ基礎能力が足りないから仕方ないので緋の目を使って円を発動する。これにより半径15メートルほどの円ができたが、持続時間が10秒と持たない。ちなみに前の世界でのMAXは半径200メートルである。逃げる事に最大限特化したため円の範囲を伸ばす事に努めた。それも緋の目があったてのことだが…

「これは人か？それも随分と小さいな」小屋の前に広げた円に入っただ者を捕らえた。どうやら人らしく、どうしてこんな所にいるのか気になる、小屋を出てみる。そこで見たのは

「なんで幼女が此処にいる」思わず口に出してしまった。しかも、その言葉に気づいてこちらを見る幼女、若干涙目である

「あわわ、うっうっ、どなた でしゅ か。噛んじゃった」なんか
カミカミ口調の幼女が尋ねてきた。しかもべロが痛そうである

「ん〜浮浪者？もしくは旅人。で、そちらはなぜこのような所に？
危ないですよ」

「あの、あの、薬草を取りに うぐ 朱里ちゃんと…ふ…ず…ず…水
鏡先生と来たら…うんぐ 逸れちゃって、そ、それで、森を出よう
としたら迷ってしまった 「事情はわかったが、話すたびに泣き
そうになるのはやめてもらえないだろうか。なんかこちらが泣かせ
てるみたいで嫌だ。」

「ああ、事情はわかりましたのでとりあえずは泣き止んで下さい。
オレで良ければ明日には森を出るところまでなら案内できるので」

「あわわ」

「その口調はわざとですか？」

「す、すみません。男の人に 慣れて いないもので」

「そうは言っても、オレはまだ子供ですし。迷ってしまったあなたが一人で行くのは危険ですよ。森の中には危険な動物もいますから今夜はここで休んで行きませんか？」

「あわわ、あ、ありがとうございます。す。また噛んじゃった」

「その調子で舌を噛んで行ったらその内、切れるかもしれませんね」

「うううううう」

「ああ、泣かないでください。オレが泣かしたみたいじゃないですか」
「実際泣かしたのだけど…」

「ぐすん はい。今晚、お世話になります。」

「どうぞ、オレは小屋の外にいて何かあったら言ってください」

「あのあの、それは悪いですう。わ、私が外」

「寝れるんですか？この危険な森の中で一人外で無防備に」

「あわわ、怖いでしゅ…またやっちゃった。」

「だから、オレが外にいますよ。幸い逃げるのは得意なんで仮に狼に襲われたとしても逃げれます。その場合はあなたを置いて逃げますが…」

「置いて行っちゃうんですか！？あわわ、どうしよう。」本当に焦り出す幼女

「小屋からでなければ問題ないでしょう。まあオレは戻ってくるかわからないので、あなたは一人で森を出る羽目になります…」

「あのあの一緒にいてもらえませんか？」

「でも、男性は苦手なんでしょう？男性と言えるほどの歳じゃないけど、オレも男ですよ」

「大丈夫でしゅ。…痛い…あなたからは悪い感じがしませんから」

「まだ子供ですからね。むしろ今の段階で悪い感じがしたらオレの将来が心配ですよ」

「あわわ、すみません。」そう言って焦り出す幼女。この幼女を、置いて行っても良いのだがさすがにそれは何か人として大事なものを失う気がしてやめた。

「とりあえず、自己紹介をしましょう。オレは性は黄、名を恩、字を子苑と言います。あなたは？」

「あわわ、わ、私は性を鳳、名を統、字を土元と言います。よろしくお願いします」

「よろしく。とりあえず、小屋に入りませんか。中に食べ物がありますし、食事してないのでしょう？」

「大丈夫　　ぐう　　夫」

「じゃなかったみたいですね。それじゃ、入りましょう」顔が赤くなった（実際は暗くて見えないので予想）鳳統さんを小屋に招く

「あうう、すみません。」鳳統さんもお腹が空いているらしく普通についてきてくれた。

- - - - -

翌朝

「起きてください。そろそろ出発しますよ」鳳統さんを起こす。昨日は離れて寝ようとしたが、オレが言った冗談を真に受けたのか、オレの服の裾を話してくれなかった。仕方ないので背中合わせで寝れば良いだろうと提案したが、器用に服をつかみそのままに寝てしまった。まあ、寝方なんてどうとでもなるので気にせず寝て朝になつて起きた。

「あ、う、あ……え!？」寝起きの鳳統さんがこちらを見てビクッリする

「あ、起きましたか？起きたんなら服を離してください」

「あ、すみません」すぐに手を離す

「それじゃ、朝ごはん食べたら行きますよ」

「え、こんなに朝早くですか？」外をみると太陽がまだ昇っていない。もう少しで日の出を迎えそうだ

「だって、森を出たは良いけど、探しに来たあなたの家族の人と行き違いになったら大変じゃないですか。だから先に降りるんです。それに朝の方が動物に出会いません」

「な、なるほど」そう言って感心し、朝ごはんを手早く済ませ下山の準備をする。

下山中

いったん山を降りる序にオレも町まで必要なものを買いに行こうと思う。手荷物はそこまでないが、お金とか武器とか置いておいて動物に荒らされたり、誰かが盗んで行くとも限らないので、一応持って来てはいる

「とりあえず、森さえできれば町までの方向はわかるんですよね？」

「はいです」

「じゃあさっさと降りましょつか？」

そう言つて山を下る。オレ一人ならすぐにも降りられるのだが、鳳統さんがいる以上ゆっくり下りなければならぬ。狼や熊などもいるので周りに注意しながら進んでいると、鳳統さんの方から話があった。

「あの、黄恩君はまだ子供なのになんで旅なんてしているんですか？」

「……まあ色々とあるんです」益州では赤目は憚れるけど、荊州ではどうかわからないので、緋の目の事は言わないでおく。当然それが理由で州を追放された事も

「……すみません」こちらの様子を察したのか鳳統さんの様子が暗くなる。気分を変えようと鳳統さんに話を振る

「鳳統さんはどうです？昨日先生とおっしゃってましたが、どこかの私塾で学ばれているんですか？」

「はい。水鏡先生という人のもとで色々な事を学んでいます。私は身寄りが無いもので、水鏡先生にお世話になつて居るんです。だから、先生の役に立てるように頑張っています」

「 申し訳ありません。 」

「 いえ、気になさらないでください。こちらも言い辛い事を聞いてしまったみたいなので 」

「 そのことなら、お気になさらず。大したことではないんですよ。まあ謂わば修業みたいなものです。 」

「 修業ですか？私と同じですね 」

そうですねとお互いの過去を気にしないようにした。しばらく、歩いて開けた道に出る

「 ちょっと、止まってください 」

「 なんですか？ 」

「 これを見てください。熊の足跡ですね。しかもできてからそれほど経っていない。近くに熊がいるかもしれないので気をつけて進み

ましよう」

「あわわ、気をつけます」そう言って鳳統さんはオレの服をつかんで歩く。さり気無く逃がさないようにしてゐるあたりなかなかやる幼女である。まあそう簡単に会わないだろうと歩いて行くと

「わあ〜おう、なんて絶妙なタイミング」

「たいみんぐ？つてそれより、黄恩君、早く逃げないと！」鳳統さんが慌てだす。なぜなら30メートルぐらい先に熊が見える。鳳統さんが叫んだ事で、熊がこちらに気づいたようだ

「だあ〜叫ばないでくださいよ！やり過ぎせたかもしれないのに！こつなつたらあなたを置いて」

「あわわ、助けてください」泣きながらしがみつくと鳳統。こちらの冗談を本気と捉えたらしい

「冗談ですから、離してください。オレも逃げたいのは山々なんで

すよ。マジ怖いんですけど…」

「まじ?」

「本気と言う事ですよ　　うわああ来た!」熊がこちらに向かって来た

「あわわ」パニクリだす鳳統さん。そのおかげで服を離してくれた。今なら逃げれるが、さすがにできないので、後ろに背負っていた弓を取り出す。

「下がっててください。これではずしても恨まないでくださいね?」そう言われても腰をぬかして動けない鳳統。

チツと舌打ちしながら弓を構える自分の背丈と同じくらい大きいので弦を弾く力がかなり必要だ。普通の子供ならまず弾けないが

「練」一瞬にしてオーラを練りあげる。本当なら周で武器を強化して飛ばしたいところだがまだ無理だ。

「鳳統済まないが下がってくれ、邪魔だ」いつもとは違う雰囲気。鳳統が吞まれながらも、見てしまった…璃人の赤い目を。普段髪に隠れて見えないが、振り返った時にはっきりと見えてしまった。

璃人は自分の力だけじゃ弓が十分に弾けない事がわかり緋の目を発動。オーラの絶対値があがったので弓を弾く十分な力になった。

鳳統も一瞬緋の目に魅入ったが、なんとか正気を取り戻し後ろに下がる

「……」精神を集中させ狙いを定める。紫苑から教えを受けているが実戦はこれが初めて。だから言われた事を忠実に守る

『良い？弓は当てようと思って放つものではないの。当たる事は決まっただけ。大事なのは点で見るのではなく線で見ると。そこに乗せられれば100回やっただけ外さないわ。』

（狙うは頭。足や胴体に当たっても今のオレの威力じゃ殺せないかもしれない。なら、一発で仕留められる頭を狙う。距離は6メートルくらいが限界か。一気にオーラを放って足止めして、そこを射る）

…… 15メートル

…… 10メートル

8メートル

… 6メートル

「フ！」

おし、ひるんだ。まだ今のオレじゃ強力なオーラを飛ばせないから、殺す事はできないけど、足止めくらいはできた。あとは…

「ハ！」熊の眉間に描かれた線の軌道に矢を乗せる。

放たれた矢は一直線に熊の額に飛んで行く

「おし！」見事熊の額に命中し熊は悲鳴を上げる事なく絶命。緋の目を解除し熊の様子を確かめる

「やっぱり死んでるな。だけど折角の食料をここに置いておくのは勿体ないから、持って行こう。鍛錬にも成るし。」そう言って熊を持ちあげる

「鳳統さん悪いんですけど、弓だけ持ってもらえませんか？熊を背負ったせいで持てなくて」

「…」反応のない鳳統さん

「あの～もしもし」顔の前で手を振ってみるが反応なし。仕方ないのでほっぺをつついてみる

「お、柔らかくて面白いな。つくん」面白がって遊んでいると

「あつ！？あわわ、何するんでしゅか！」

「いや、声を掛けても反応しなかったので、つついてました」

「ビックリしてただけです！」

「まあそんな事はどうでもいいので、この弓持ってもらえませんか？そこまで重くはないと思うので」

「良いですけど　ってなんで熊を背負っているんですか！？」

「いや、食料になるし、町に行くなら売れるかな」と思いまして」

「確かにそうなんですけど　　というより熊を抱えられるなら、私を担いで逃げた方が…」

「確かにそれもできましたけど、あなたが恐怖のあまりしがみ付いて、逃げるタイミングを失ったんですよ。それに逃げる最中に騒がれても面倒なので、ここで対応するのが一番最善だと思っただけです」

「あうあう、ごめんなさい。それと、さっきも言っていましたけど、たいみんぐ？ってなんですか？」

「ああ、好機とか時期みたいな意味です。勉強が足りませんよ、私塾生殿。」そんな言葉この時代がないので当たり前であるが、からかってみる

「あわわ、頑張ります。」

「それじゃー行きましようか？」

「はいでしゅ」「今のは痛そうだな。」

.....下山終了

「ここが出口ですね。今度はこっちが案内してもらおう番ですね。よろしく願います」

「はい、任せてください」

鳳統さんの後に付いてしばらく歩くと町が見えた。意外と近いな

その後は鳳統さんとは別れて熊を売りに行く。弓はなんとか持っている

「おじさん、この熊いくらで売れる？」

「おお、坊主、運よく死体でも見つけたか？ん、熊は意外と珍しいからな、これくらいでどうだ？」

物の相場なんてわからないので、なんとも言えないが熊1頭がこの値段だと森にいる熊全員狩ったって大した金にならない。完全に舐められている

「おじ　　ちょっと待ちなさい　　さん？」知らない女性が話に入ってきた

「なんだい、あんた？今はこの坊主と商売してるんだ。邪魔しないでくれねえか？」

「それを待ちなさいと言っているんです。あなた、子供だと思って騙すつもりですね？そんな値段で熊が取引されてるなんて聞いたことありません」

「ぐッ。何なんだあんた！人の商売の邪魔しやがって」

「そんなの商売とは言いません。あなたの事は商人の人達に言っておきます。この地で商売ができるとは思わない方が良いでしょう」

「覚えてる!」そう言って商品をまとめて逃げ出すおじさん。

「全く仕方ありませんね」

「あの〜」

「はい?」

「ありがとうございます。おかげで騙されずに済みました。」

「いいえ、あなたにはお礼がありますから」

「お礼ですか?」

「はい。… 雛里、こちらに来なさい」

「はい、水鏡先生」そこには先程別れた鳳統と新たな幼女がいた。

「ああ、あなたが水鏡先生ですか。私は黄子苑です。よろしくお願

いします。」

「私は司馬徽、字を徳操、号を水鏡と言います。基本水鏡と呼ばれているのでそちらで呼んでください。あなたには雛里がお世話になりました。」

「いえ、オレもあなたに助けてもらったのでお互い様です」

「でも、その必要はなさそうでしたね。あなたはちゃんとわかっていたようですし」

「相場なんかはわかりませんが、あの値段だったら、森の熊を全滅させても足りないな」と思っただけです。その後値切られたかもしれません。そう考えれば、助けられたのと同じです」

「そうですか。でも、私のかわいい弟子を助けていただいたのにこれだけで済ますのは忍びないので、私が良い店を紹介しましょう。」

「なら、お言葉に甘えて」そう言って水鏡について行く。ダブル幼女もついてきたので、鳳統の方に弓を預けた。普通に持ってくれて良い子だと思った

熊を担いだ少年と二人の少女（片方は武器持ち）に先頭に行く女性。なんか変なパーティーができた。これで、カメラアクト討伐にでも行ったら3秒持たないだろうな

その後水鏡の紹介してくれた商人のもとで熊を売ってお金に変えて帰ろうとしたところ

「ちょっと良いかしら？」

またしても水鏡に止められるのだった

第3話 能力確認とはわわ

熊をお金に替えたので、とりあえず、山に戻り修業でもしようかな
と思っていたところに水鏡先生が話しかけてきた

「一体何のご用でしょうか？鳳統さんを助けた事なら、この一件で
済みましたので気にしないでください。」

実はサツサと帰りたいたと思っている。熊での一件でもそうだがこの
先修業しておかないと本当に命の危険があるという事をまざまざと
感じた。

「いえその事ではありません。あなたは今、修業の旅をなさってい
るのですよね？」

「まあ一応」

「では、学問の方も修めてみませんか？」

「一体なぜ？」

「先程の会話から察するにあなたは鍛えれば優れた人物になるはず

です。うちの弟子二人に負けなくらい」

「学業はあまり得意ではありません。それに鳳統さんから聞きまして、ただ、あなたの私塾って女学生専門なのでしょう？男のオレが入るのはおかしくありませんか？」

「確かに、そうですが、あれは男女で共同生活する際に問題行動があると困るから、決めた規則です。こちらで判断し問題なしと判断されれば男子でも入塾は可能なのです。今の所いませんですけど」

「オレは問題ないという事ですか？」

「はい。雜里にも聞きましたが、あなたは信用に足る人間だと判断しました。」

「…でも止めておきます。別に人の上に立ちたいわけではないので、学問はあまり必要ではありません。それに、今、生きて行くのに必要なのは知力ではなく体力です。最終的には、体力だけでなく知力もという形にはしたいですが、今は体力です。でないと」
「水鏡先生の後ろで待っていた二人。しかも、周りを気にしていなかったのか、後ろから来てる人に気づいていない。」

「キャ！」 接近してきた男たちが二人を捕まえて逃げようとする。

当然水鏡も追いかけてよとすが追いつかない。しかし、

「おじさん、人攫いは立派な犯罪だよ。 さっきのでそのまま、町を出て行けばよかったのに、自分で罪を重くしちゃったね。

悪いけど二人は返してもらおうよ」

二人を捕まえて逃げようとしたオツサンに忍び寄り背後から首筋に一閃。オツサンは一瞬で気を失い地面に倒れる。キルア直伝だがあいつが本気でやったら、首が飛ぶんだろうなと思いつつも、そんなスプラッタな光景を目の前の幼女達に見せるのは忍びないので、気絶程度で済ませる

「お二人とも周りに注意を配れないのは危険ですよ。いついかなる時も自分の周囲には気を配るものです。オレがいなかったらその人に攫われて大変な目に合ってしまったよ」

「っし、しゅみません！助けてくれてありがとうございます」「幼女がぺこりと頭を下げる。二人とも同じように噛むとは、姉妹だろうか？似てはいないが……っは！まさか、水鏡塾は幼女を力ミカ三口調へと誘う魔境なのでは。なんて恐ろしい場所

そんなアホな事を考えながら、警備の人に先程のオツサン（最初にオレを騙そうとして逃げて行った商人）を渡し、礼を言われてから水鏡先生の所に戻る。

「今度は朱里まで助けにいたっていて、本当にありがとうございます」

「まあ、良いんですけど。ああいう人は、最後まで恨みますから、徹底的にやるのが一番なんです。下手に注意とかして恥をかかせるたりすると後々必ず仕返しにきます。経験上、これからも狙ってきますね。まあ、それはここの太守様に任せますけど…」

「経験上って 前にもこういう事が？というよりいつからひとり旅してるんですか？」

水鏡の質問にしまったと思いなんとかごまかす案を考える。実は前世で何回か経験してるんですよアハハ八八とは言えないし、一体どうするべきか…

「答え辛い質問なら無理して答えなくても良いですよ。それより先程の話ですが、やっぱりお願いできませんか？もしまたあの輩に狙われたら私では対処できないと思うので」

「用心棒扱いですか？うーん自分の修業もしたいのですが」

「家の庭は広いので修業する場所としては申し分ないですよ。昔は人数がいたので結構広いです。それに朱里や雛里に護身用程度の武術を教えるもらうと助かるんですが…」

「ちゃっかり仕事内容増えてませんか？…まあ、泊る宿が確保できたと思えば幸いか。 先程撤回して申し訳ないですがお世話にならさせてもらいます。」

璃人は、基本的に臆病だが、善人であるためこういふ頼み方をされると断れないのが弱点でもある。ハンター協会に強制でやらされた時はネテロ会長に勝てなかったというのもあるが、仕方ないかなと割り切った部分があるのも否定できない。ただ、前世とは違い今世では自分に危険が及ぶようなら逃げようと思っている

「荷物は持つてきているので問題ないです。水鏡塾に案内してくれませんか？」

「はい、それではこちらです。」二人の幼女と手をつなぎながら歩き出す。 …！？

「…なぜにお二方は人の手を握っていらっしゃるのでしょうか？」

「あわわ、ダメでしょうか？先程の事で怖くて動けないんです。」
涙目で見るのはやめて欲しい

「はわわ、私も怖くて」同じように涙目。しかも周囲からの視線が痛い。こちらが泣かしてるように見えるのだろうか？

「ダメじゃないですけど、その口調どうにかありませんか？あと鳳統さんオレの武器を持ってください」

「あわわ、了解でし」

「慌てなくて良いですよ。それとあなたの名前を聞いてませんでしたね。オレは黄子苑と言います。これから、なにかとお世話になると思いますのでどうぞよろしくお願いします」

「はわわ、こちらこそお願いしましゅ。わ、私は性は諸葛、名を亮、字を孔明と言います。」

「あなたもそんなに慌てなくて良いですよ。それと水鏡塾に案内してもらえませんか？いつの間にか先生がいなくなってしまったので……」

辺りを見ると水鏡先生がいない。完全に置いて行かれたようだ。それに案内する二人が、かなり頼りない。このさき本当に大丈夫だろうか？……先の不安な人生である

.....

幼女に引き連れられて水鏡塾に到着

自分の部屋が用意されそこに荷物を置いた。その後鍛錬でもしようと思っただが、水鏡先生が授業を受けてみない？というので受ける事にする。

「今日は孫子について学びましょう。では 兵とは国の大事なり。死生の地、存亡の道、察せざるべからざるなり。故にこれを経るに五事を以てし、これを校ぶるに計を以てして、其の状を索む。」

そう言っただけで講義が始まる。孫子とは昔の学者さんらしく、いろんな書物を残しているらしい。その中でも兵法に関する者が多いらしく、今の時代でも多く学ばれているようだ。

「子苑これについて意見はありますか？」先生はオレを字で呼ぶようになった。これから一緒に生活していくのだから気遣いをしない方が良さそうだという事らしい。

「別にありませんよ。無駄な戦争をしない、大いに結構。戦いはなるべくしたくありませんから。それに戦で命を落とすのは兵なのだから、大事にしないと国が成り立たなくなる。偉い人こそ知って欲しい言葉ですね。」

「その通りです。そのための五事があるわけですが……」そうしてまた講義に戻る。ぶっちゃけオレにはあまり関係ない。国を治めよ

うとは思わないし、その器もない。母上や父上を見て思ったがかなり大変そうでおれとしてはのんびり過ごしたいのもものすごく遠慮したいところだ。…おっと適当に聞き流してたらいつの間にか戦術の話しに行ってしまった。

「昔の善く戦う者は先ず勝つべからざるを為して、以て敵の勝つべきを待つ。子苑君、これについてはどう思いますか？」はわわが聞いてくる。オレは二人の事ははわわ先輩とあわわ先輩と読んでいる。二人の口調が直るまで呼び続ける気だ。

「どう思っても何も、当たり前的事だと思っただけですけど。攻める事を考える前に、守る事を考える。仮に単騎で突っ込むというなら守りなど考えなくても良いでしょうが、町を治めたりするお偉いさん方はそんなことはできません。相手の城を落したは良いけど、自分の城が落ちてましたと言ったら笑話にもならないじゃないですか？まずは攻められても大丈夫なように守備を強化するのは当然です。それにこれは街の発展にも繋がりますし」

「発展ですか？」今度はあわわが尋ねてくる

「発展してる町とはどういうものだと思いますか？あわわ先輩」

「その呼び方止めてください！」

「口調が直ったら考えます。そんな事よりも」

「直つても考えてくれるだけなんですネ……。人がたくさんいて活気のあるところだと思います」

「そうですね。ではどうすれば人が集まるのでしょうか？」

「当然安全な場所ですね。その土地が安全であれば人は集まります」

「そう、だから、まず守備を固めなきゃいけないんです。戦はお金を使います。でも、お金はただ待っているだけでは集まりません。ではどうしたら？」

「町の人に税を納めてもらうしか…」

「そうですね。後は有力な商人や豪族なんかからも寄付金として集める事になります。しかし、人の人数が少なければ集める税は一人当たりかなりの負担になるわけです。これでは民から不満が残ります。つか内から潰れて行くでしょう。だから人を集めて税率を変えるしがあります。そして人が集まる所とは安全な場所です」

「だから守備が必要だと」

「はい。それに国の守りが強固であればある程他から攻められることは少なくなります。これは無駄な戦を回避するのに大きく役立ちます。」

「でも、守備を強化するのにもお金が必要じゃないですか？」

「それは」

「「そ、それは……」

「わかりません」

二人が全く同じ感じでコケる。やっぱり姉妹ではないのだろうか？

「オレが言ったのはあくまで孫子の話ができたらと言う点で言った
までです。理想論は言うだけならタダですから。それを実現できる
ものが為せばいいだけです。一応考えはありますけどね？」

「どんな考えですか!？」

「教えません」

「な、何ですか!？」

「なんでも教えてもらえるなんて思ったら大間違いですよ?わから
ないから考える、是ぞ学ぶ者の本懐ではありませんか?私塾生殿」

わざとらしく、口をつり上げて言う。実際考えがあるわけではない。
あるにはあるけど実行ができないだけ。キメラアント討伐の際にネ
フェルピトーが使った超巨大な円とで感知し超長距離の一斉射撃。
どちらも念の習得とかなりの才能が必要なため実行は不可能である。
次点で町の各所に長距離砲(投石機)を設置が考えられるがこれは
お金がかかりすぎる。自分で作ればなんとでもなるのだけど

「うっ、頑張ります。」

その後は先生の授業に戻りあわわとはわわが質問を繰り返すという内容だった。この二人賢すぎないか？と思ったのも仕方がない。

講義が終わったので、今度は自分の鍛錬に入る。庭に出て軽くランニングから入る。なぜかこの家には重りが置いてあって今はそれを背負いながら走っている。だいたい10キロくらい。この世界のレベルがどれほどかは知らないが、今の所オレのアドバンテージは念が使えると言う事。母上や巖顔さんの話だと気と言うものを使える者もいるらしいが（巖顔さんは使えた。）念ではないという判断。しかし、念抜きで岩を砕く巖顔さんや木を貫通するほど矢を放つ母上をみると楽観視できない。

あちらの世界では、確かキルア達の腕力は異常だった。ゴン曰く16トンは有るとの事。家に入るには4トンの門をクリアしないと帰れないらしい。どんな家だよ！と突っ込んだのはしょうがない事だ。しかし、この世界ではそこまでの腕力がなくても簡単に人を吹き飛ばす。一度巖顔さんの訓練を見たがオーラを纏っていない拳で人が飛んでいた。下手すれば硬を使わないといけない。

推測してみるに、あちらにはインチキな魔物がたくさんいる分、それに比例して元々の人間の能力も高かったのではないだろうかと考える。そのぶんこちらの世界では、それなりの腕力が有れば人が飛んだりするのだろう。となると、ネテロ会長のような人間がいるわ

けはないので、音を超えるような拳は放てないだろう。鍛錬でここまで伸びるかわからないが基礎を固めたら念に重点を置いた方がいいだろう。

・
・
・

今やっているのは堅の修業。堅を十分伸ばすには普通のやつは1ヶ月はかかる。前の世界では念を覚えた頃からやっていたので、ゴンやキルアよりは長くできたが、あいつらの成長を見た時は本気で羨んだ。まあ今は置いておいて堅の修業である。しかし、何もしていないのもあれなので少し発展形に行きたい

「水鏡先生、この一角畑に変えても良いですか？」

「良いけど大変よ、なかなか広いし一人じゃ大変じゃない？」

「まあこれも修業と言う事で。」そう言って縦横20メートルくらいの土地を耕す事にする。この時代は前にいた世界と違って発展してないが、スコップの様な物や鍬のような物もあるので体力さえ続けば問題ない。

「周」鍬をオーラで纏う。通常応用技と言われるものはオーラの消費が激しくきついものだが、だからこそやる意味がある。堅の持続法と周をする事に大した違いはない。

「さて行きますか」鋤を両手に持って耕し始めた。

畑を耕し一ヶ月

堅を維持する時間が少しずつだが伸びてきた。さすがに庭の畑は三日くらいで終わってしまったので、今は町のはずれにある畑を耕している。ここは誰も使っていないので十分広いしなかなかの鍛錬になる。最初は周だけでやっていたが、今では堅もしながら作業ができるようになった。この分なら二年くらいやれば一日戦っても平気だろう。

それでそろそろ自分の系統を調べようと思う。

「子苑君、何してるんですか？」はわわ先輩が聞いてくる。後ろにあわわ先輩もいて二人で勉強していたらしく、桶に水を入れて運んでいるのを見て、気になって追って来たようだ。ん〜どうしようかな。・・・まあ別に見せても問題ないだろう。この世界にも気があるということなので、その練習という事にしておけば問題ない。

「気の修業ですよ。ずっと昔に文献で呼んだ自分の気の種類の見分け方があるので、今試してみようと思っただけです。」実際そんな文献はこの世界にはないのだが、問題あるまい。

「子苑君気を使えるんですか！？あわわ、すごいです」

「まあ、人並み程度ですけどね。」

「それで、どうやって調べるんですか？」はわわ先輩はその方法の方が気になるらしい

「まあこの樽の水の上に葉っぱを乗つけて」

「乗つけて？」

「祈ります」

「祈るんですか!？」

「はい、神様にお祈りしてその時の葉っぱの様子を見るんです。はわわ先輩少しやってみてください」

「はわわ、がんばりましゅ」そう言ってお祈りを始める。内心気づいても良いんじゃないかと思っただが（祈るのと気は関係ない事に気づくはず）面白そうなのでそのまま放置。あわわ先輩も固唾をのんで見守っている。

……

「どうですか？何か変化がありましたか？」

「はわわ、何も変化がありません。お祈りが足りなかったんでしょうか？」本気になって考えるあわわ先輩

「朱里ちゃんももう少し頑張ってみようよ。もしかしたら何か起こるかもしれないよ」

「そうだね雛里ちゃん、頑張ってみるね」またお祈りを始めるはわわ先輩。しかも今度は何か言っている。呪文でも唱えているのだろうか？

「まあ、そんなでできたら苦労なんてしないんですけどね。」

「……子苑君！！また嘘ついたんですね！？そうやって」

「いや、普通に気づくと思ひまして。気の識別法なのに気を使わないからわかると思うんですけど……」

「うづうづ」顔を膨らましながらも抗議するはわわ先輩

「その顔はやめてください。なんか物凄く罪悪感が……。わかりました、ちゃんと教えますよ。ただこれは気の使えない者にはできないと思うのであわわ先輩とはわわ先輩は見ていてください」

しぶしぶ引き下がる二人。どうやら、抗議する事よりもこっちの事の方が気になるらしい。

「行きます」そう言って樽の前で練をする璃人。樽の中を凝視する二人……何も起こらない

「あの子苑君にも変わってないんですけど」また騙された

のかと思いい聞いてみるはわわ。

「二人とも樽の水を少し舐めてみてください」そう言われて指を入れて舐めてみる二人。

「はわわ、雛里ちゃんこの水すつごく甘いよ！」

「あわわ、朱里ちゃんホントだね！」交互に指を入れて舐めている二人。鍛錬の成果もあってかなり味に変化があるようだ。この世界でも変化系か、やっぱり変わらなかったか

「味が変わるのは変化系の証拠ですね。気の形や性質なんかを変えるのに特化した系統ですね」

「他にもあるんですか？」

「ええ、強化、放出、操作、具現化、変化、特質この六つに分かれます。ちなみに変化系に多い性格として気まぐれで嘘つきというのが多いようです。これはキルア達が知り合いから聞いたらしい。」

「「あつてる！」」

「思っても口に出さないください。自覚してるから良いんですけど…。お二人は強化系ですかね？」

「どつ言ったものですか？」

「基本、体とかを強化するんですけど、二人には似合いませんね」

「じゃあなんで私や雛里ちゃんが強化系だと思ったんですか？」

「強化系に多い性格だからです」

「ちなみに？」

「単純一途！」

「合ってるけど嬉しくない……」

「まあ、あなた達は軍師志望ですから操作系の方が良いのでしょうか」

「ちなみに？」

「理屈やでマイペ 我が道を行く人が多いらしいです。軍師なら単純な方より理屈屋で物事を客観的に見れる人が良いですね」

「ううう」「単純一途なところがどうも気になるらしい。」

「まああくまでもそう言う人が多いと言っただけで全員に充てはまる訳ではないですけど」

「でも子苑君のは合ってるし、私達も合ってる。かなり精度が高いんじゃない……」

「御二人はまだ強化系かどうか分からないじゃないですか。だから、

なんとも言えませんよ」

「うう、確かめてみたいです…」

「まあ気が使えないと無理なので諦めてください。」

「うううう」

落ち込む二人を慰めるのは面倒なので、気晴らしに将棋でもしませんか？と誘うと意外にも乗って来た。この世界には将棋がなかったのだが（似たようなものはある）、あつちの世界でジャポンを訪れた時に出会ったもので世界大会があるらしく、割と有名ならしい。まあチャンピオンは王に殺されたらしいが。それで、なんとなく作ってみようと思い、斬り倒した木から将棋盤を作り、駒も用意した。字に関しては水鏡先生に書いてもらった。オレは字はあまりうまくないから…

最初は不思議がりながらも字を書いてくれた先生だが、こちらでルールを説明したら試しにやってみようという事になりやってみた。結果は数局やったら負けた。結構自信があつたのに…

その後、勉強になるからと言ってあわわとはわわも参加。この二人もかなり賢いので数局やったら負けた。オレも一応上達しているの
で、最近の勝率は悪くないが、またすぐに負けるだろう。

「それじゃ、今日はどっちがやりますか？あわわ先輩ですか、はわ

わ先輩ですか？」

「わ、私がやりましゅ！」

「朱里ちゃん頑張つて！」どうやらはわわ先輩がやるようだ。この人はかなり強いので勝率はギリ六割と言う所。

お互い駒を並べて始める。先手ははわわ先輩。

「今回の賭けは何にします？」

「私が勝つたら今度うどんを作ってください！」

以前、作ってあげたのが意外と好評だった。実は前の世界でハンター試験を受けた時に美食家ハンターを目指すメンチと知り合った。オレも旅をしている頃、いろんな土地を回ったので、いろんな食材を知っている。ジャポンで食べた寿司は美味しかった。メンチも行って見たかつたらしく、ハンター試験終了後、晴れて合格したオレ達はジャポンで食い倒れツアーを開催した。というより連行された、道案内として。

そこでメンチはいろいろと料理を覚えたようだが、なぜかオレにも覚えさせようとして、ジャポン食限定だが合格認定を貰った。それでこの世界に来て久しぶりに作るうと思いついてみた。幸いラーメンが有ったので小麦と醤油はあつたし、カツオも採りに行けば良いのでどうにかあった。意外とカツオ節にするのが手間だったがなんとかなるものだ。その内寿司でも握ろうかと思っている。メンチに合格を言われるまで握り続けた。普通何年も修業するらしいが、メンチの容赦ない鉄拳がオレを成長させてくれた。

それで、できたものを試しに振る舞ったら、こうして作るように頼まれる。鯉節が有ればいいのだが、切れていると作るのが面倒なので嫌だ。

「じゃあオレが勝ったらそのはわわ口調禁止と言っことで」

「はわわ、そ、それは無理です。」

「なら勝てばいいだけです。では先手どうぞ」「ここに璃人VSはわわの戦いが始まった。

第4話 はわわの思いと璃人の思い

はわわ先輩との知力を振り絞った戦い、お互いが先を読み相手の先を取ろうとする読み合い合戦。 なかなかの名勝負だった。だが一歩及ばなかったようだな、はわわ先輩

「やりました！詰みです。これで私の勝ちですね子苑君」

「参りました。」一歩及ばなかったのはどうやらこっちのようだったらしい。残念だがカツオを捕りに行かなくてはならなくなった。商人の人仕入れてくれないかな。そんな事を思いつつ、皆で検討をしていると水鏡先生が入って来た。

「あら？将棋をやったのね。それに朱里が勝ったみたいね。

…子苑あなた手を抜いたわね？ 朱里あなたは勝負に勝って戦いに負けているわね」

「え！？」オレも？という状態で先生の次の言葉を待つ

「子苑は子苑らしい戦い方をしてるわね。極力犠牲を出さずに相手に勝とうとしている。朱里、盤上をよく見て見なさい。」

「私の方が被害が大きい。」

「そうね、朱里の採った策は盤面上では正しいわ。勝負と言うことならあなたの勝ちね。でも、仮にこれが戦だったとして、あなたの国はこの先どうなるかしら？確かに勝利したのだから相手の領地を

奪えるけど、自国の兵の損失がでかいわ。これでは国は回らない。」

「だから、勝負に勝って戦いに負けたんですね」はわわ先輩が噛み締めるようにつぶやく

「それでもはわわ先輩の勝ちですよ。これはあくまでも遊戯です。実際の戦を想定したわけじゃありませんので、勝ち先輩の物です」こちらとしては潔く負けを認めサツサとカツオを仕入れに行きたいでもはわわ先輩がどうやら納得がいかないらしい。

「先輩が何と言おうと負けは負けですので、ちょっと材料を仕入れきます。二、三日は戻らないと思うので、その間待っていてください」

「あら、子苑はお出かけ？」

「はい、あわわ先輩との約束でうどんを作る事になったのでカツオを仕入れに行くんですよ。」

「あら、それはちょうど良かったわ、さっき買い物に行ったら偶然カツオを売っていたのよ。子苑が作ってくれたカツオ節も切れちゃったから買ってきたの。」

「おお、何という偶然。ありがとうございます先生。早速仕込んできますので…」水鏡先生からカツオを受け取り台所に向かう璃人。

「朱里、やっぱり自分の採った策を気にしているの？」先程から黙っていた朱里に水鏡が話しかける

「はい」

「まあ朱里が実際の戦に出たとしてこの策をやるとは思えないけど、どうして気になるのかしら？」

「わ、私、子苑君に勝てると思って少し強引に行っただけです。最終的に王将を取れば良いと思って…」

「まあ遊戯の中だから仕方ないと言えば仕方ないんだけど」

「でも、朱里ちゃんはその事が嫌だったんだよね？」黙って聞いていた雛里が口を紡ぐ

「うん。私は将来、国を平和にするような人のもとで働きたい。そして、平和な世の中にしていきたい。でも、子苑君にはそれができないって、無理だよって言われたような気がする。この勝負も子苑君なら無理すれば戦えた。でも、私の勝ちたいって願望が見透かされたみたいで、すぐに降りるような指し方になった。」

「子苑がそこまで考えて指していた訳ではないでしょうが、あの子は周りの空気に聡い子だから、なんとなく朱里の思惑がわかってしまったのね。あの子なら余計な被害が出る前に投降するでしょうから」

「そうですね。だからこそ悔しい。自分が目指している形は子苑君の方が近かった。」

「でも、朱里ちゃん、負けちゃったらもつと大変な事になるかもしれないよ」「この時代、敗者は勝者に従うしかない。負けた者が何を言っても何にもならないのである」

「確かにそうですね。でも、子苑は相手が朱里だったから、素直に負けただんだと思うわ。本人は否定するでしょうけど」

「どういうことですか!？」

「子苑は戦いがあまり好きではないのはわかるわね？」

「はい。」

「あの子ができるだけ戦わない事を目指している。本人曰く臆病らしいけど　あの子は無駄に戦うのが好きじゃないのよ。でも、ただ逃げるわけじゃない。戦うべき時は戦うし、そのために鍛えてもいる。でも、戦わなくて良かったらあの子は真っ先に下るわね。自分よりもうまく領民を導いてくれる人がいるとわかったら。」

「それが私ですか？」

「そうですね。今回あなたは勝利を優先し勝利した。仮に子苑が抗っていたら、どうなったかしら？」

「良くて共倒れですね。」

「そう、だから、子苑は王将を前に出して一人で戦う方法を選んだ。飯に負けても被害が自分に行くようにして。あなたが冷静ならわかったと思うけど普段の子苑ならこんな闘い方はしないわ。子苑がこうしたのは自分より領民を守る事を優先したのよ。憶測でしかないけど…。それに自分が負けても自分よりうまくやれる人が相手だったから簡単に諦めたのよ」

「なんか、良い感じでお話してますが、そんな大層な話じゃないですよ？」後ろから現れた璃人。

「子苑君！」見事なシンクロ

「あら、子苑、女性の話を盗み聞きなんて紳士のすることじゃなくてよ」

「それに関しては申し訳ないんですけど、夕飯の支度ができたんで呼びに来たんですよ。鯉節のあまりで作ったカツオのたたきですね。鯉節の方はまだ時間がかかりますので、はわわ先輩もう少し待ってくださいね。」

「子苑君それより、大層な話じゃないって言ったけど それって」

「ああ、その話ですか？オレは基本的にさっきの将棋のような状況になったら即逃げます。領地を明け渡し、サッサとしばを巻いて逃げだします。当然相手は選びますが…」

「逃げちゃうんですか！？」あわわ先輩が割って入ってくる

「当然です。他人よりも自分の方が大事ですから。それに、あれは仮の話で実際オレが領地を治める事はありませんので、そもそもありえませんが、仮に有ったとして、あんなった場合、相手が余程の外道じゃない限り明け渡しますね。オレよりはうまくやってくれそうなんで。」

「今回の私でもですか？」

「まあ今回ははわわ先輩にしては強引かなと思いましたが、それでもまともにやり合っても被害が大きくなるのならオレは負けを認めて逃げます。はわわ先輩も勝ちたかったから無理したわけですし、相手がいなくなったらそもそも争う必要はないです。まあ仮定の話なんで聞き流してください」

「……」

「それじゃー晩御飯を「子苑君！」食べ　はい？何ですかはわわ先輩」

「子苑君は今の世界をどう思いますか？」

「なかなか難しい質問ですね。ひと事で言えば酷い　ですかね」

「それが、わかっててなんでそんな事を言うんですか！もし私が酷い人だったら民の人はもつと苦しむんですよ！？」

「だから、仮定の話ですって」

「誤魔化さないでください！」朱里の今までに見たこと無い気迫に少し気押されるも、向こうの世界で生きてきた璃人には大したことはなかった。

「どうしたんですか？急に…いつものはわわ先輩らしくないですよ？」

「……」

「・・・ハア、わかりましたよ。オレは基本善人じゃないんですよ。目の前へで助けを求められれば、可能であるなら助けますが、自分の命を犠牲にしてまで助ける気はありません。オレは英雄ではないんで」

「でも助けられる力があるなら、助けてあげるべきですよ！」

「本気で言ってるんですか？はわわ先輩」

「もちろんです！」

「じゃあ、諸葛亮、お前は力ある者は常に弱き者を守らなければいけないと言っただな？では聞こう、弱き者とは誰だ？」急に話し方が変わり驚く朱里だが、なんとか答える

「力無き民達です」

「では、力無き民達は常に守られ続け、強き武人は常に守り続けな

きやいけないというのだな。戦いたくないやつがいたとしても、力があると言っただけで戦場に立てというんだな？守られるやつは何もしないのか！？」

「そ、それは・・・」

「なら、なぜ力ある領主は力無き領民を守らないのだろうか。オレは、守ってはもらえなかったよ」そう言って璃人は部屋を後にした。戸惑う朱里たちはその背中を見ていることしかできなかった。

.....

朱里視点

「……」璃人の言った最後の言葉の意味を考える朱里、でも何も思いつかない。

「ねえ、朱里ちゃん」親友の雛里が話しかけてくる

「何？雛里ちゃん？」

「子苑君の言った最後の言葉だけど、」

「な、何かわかるの、雛里ちゃん！？」

「たぶんだけど・・・目の事じゃないかな。」

「目？」

「うん。私が森で朱里ちゃん達と逸れちゃったこと覚えてる？」

「当然だよ、心配したもの。それで、子苑君が助けしてくれたんだよね？」

「う、うん。でもね、あの時は言わなかったけど、子苑君が担いでいた熊がいたよね、あれって子苑君が倒したんだよ」

「ええ！？死体を見つけたんじゃないの！？」

「うん。山を下りる時、私達の前に現れて、急に襲って来たの」

「だ、大丈夫だったの、雛里ちゃん！！」

「うん、子苑君が守ってくれたから。」

「子苑君ってそんなに強いんだ。すごいね。」子供が熊を倒したと聞いて驚く朱里。でも、商人をやつつけた時もすごかったんで当然かなと思ってしまう

「確かにすごいけど、あれはきつとギリギリだったと思う」

「え、でも、あの商人さんをやつつけた時、簡単に倒しちゃったから、それくらいできるんじゃないの？」

「それは違うわ朱里。確かに子苑の動きはあの子の年代では飛びぬけているけど、武官の大人ほどじゃないわ。まだ筋力が足りないか

ら大人相手では厳しいでしょうね。そして、あれ程の大きさの熊を倒すのは訓練された兵士でも辛いわ。一歩間違えば死ぬという状況で戦わなければいけないもの。その点あなた達を助けた時は相手が大人だったと言え訓練も受けてない一商人、それにあなた達を抱えた状態だから後ろから攻撃すれば簡単に倒せたはずよ。事実子苑はやって見せたわ。」

「で、でも」

「それにね、朱里ちゃん、子苑君、熊と戦う前まで震えてたし、怖いって言った。逃げる事もできたらしいけど…」

「さっきの言葉が確かなら、子苑君は雛里ちゃんを抱えて逃げたんだよね？」先程言った璃人の逃げる発言が朱里の頭に残っている。

「うん、できたらしいけど、私が怖くて震えてしがみついちゃったせいで逃げる機会を失ったって言った。口では私を置いて逃げるみたいな事言ってたけど、ずっと熊の方を見て考えているようだった。その時ね」

「その時どうしたの？」

「子苑君の雰囲気が変わったの。さっきみたいに急に。それでね、私が怖くて尻もちついちゃって足手まといになっちゃったんだけど、後ろに下がれてこっち向いて言ってくれたの。あの時手を離れたから逃げれたはずなのに」

「…」さっき言っていた事が実際にはウソだと言う事がわかり暗

くなる朱里

「それで、その時見ちゃったの」

「な、何を？」

「子苑君の目が赤くなってた。」

「赤く？見間違いじゃなくて」

「ううん、それはないと思う。私とその目がきれいで魅入っちゃったくらいだから。」

「それで？」

「外しても恨まないでねって言って熊に弓を構えたの。まだそこま
で自信がなかったんじゃないかな。それで、熊が接近してきてすぐ
近くまで迫ったけど、子苑君が弓で射抜いたの。あれはかつこよか
つたよ」顔を赤くして言う雛里

「それで子苑は熊を抱えていたのね？どうして子供が抱えていたの
かと思っただけど…それにしても赤い目ね」

「先生何か知っているんですか？」

「ええ、確証はないけど子苑はおそらく、益州の生まれね」

「どうしてですか？」

「益州では古くから風習があって赤目の子は不幸を呼ぶとされてい

るの」

「じゃ、じゃあ、子苑君が一人で旅をしてるのは」

「益州を追い出されたのね。」

「あわわ、そう言えば子苑君初めて会った時どうして山にいらのって聞いたら、放浪？いや旅かかって答えてました。その後修業って言ってたから気にしなかつたんですけど」

「それじゃ、子苑君が言った守ってもらえなかつたと言つのは……」

「そう言う事でしょうね。これであの子があの子の年で一人旅をしているのかがわかつたわ。」

「わ、私」

「行って来なさい。おそらく庭で鍛錬でもしてると思つから。雛里もついて行ってあげなさい」

「はい、行ってきます。」「バタバタと走って出て行き璃人のもとに向かう二人であった。」

.....

璃人視点

別に言う必要はなかったけど言っちゃったな。どうしよう？はわわ先輩がどう思おうと勝手なのに、それを否定するみたいな言い方して、オレ何様だよ」

絶賛反省中の璃人。偉そうなこと言った割には気が弱いやつである。

「子苑君！」「少し息を切らしながら走って来た二人

「何か用ですか？はわわ先輩とあわわ先輩」

「あ、あの、さっきはごめんなさい！」「いきなり頭を下げる朱里

「何の真似ですか？さっきはオレも否定するようなことを言ったからあれですけど、はわわ先輩がどう考えようと先輩の自由ですよ？謝るということは、自分が間違っていると思っただんですか？」

「全部じゃないけど、間違っていると思いました。子苑君の言う通り、戦わなくても良い人を戦場に送りだすのはおかしい事だし、弱いと思っているから守られているだけじゃ国は良くなっていかない。守るのも守られるのもお互いの事を考えないとただの支配と変わらないと思いました。弱いから守られる、強いから戦う、これって逆に言えばそれ以外何もするなって事になっちゃいますもんね。それでは何も変わらない」

「そこまで考えて言った訳ではないですけど、どんな人にも選ぶ権利って言うのがあると思うんです。だから良い国にとって言うのは選

べる環境を作つてやることだと思ひます。まああれもこれもやりた
いなんて言つわがまな人が出てきてしまふかもしれないけどね。
それでも言われた事に従う生き方よりは良いと思ふんです。」

「確かにそうですね。言われた通りの事しかやれないなら、何のた
めに生まれて来たのかわからなくなつてしまいますから。」

「あわわ先輩、哲学ですね。人はなぜ生まれてきたのか？人類の
永遠の議題ですね。ちなみにあわわ先輩はどうしてだと思ひます？」

「あわわ、そ、それは 愛するためとかでしょうか？」

「愛ですか？随分と乙女な解答ですね。まあ十分乙女なんですけど
ね。」 雛里が照れているのがかなり和む

「子苑君は何でだと思ひますか？」

「ん、聞かれると難しいですね、はわわ先輩。当たり前障りのない回
答としては死ぬためじゃないですか？」

「死ぬためですか？」

「はい。原因があるから結果がある。始まりがあつて終わりがある。
生まれたからにはいつかは死ぬ。これはすべて同じ事だと思ふん
ですよ。だから、生まれたからには、どうやって死ぬのかそれを考
えるのが大事なんだと思ひます」

「どうやって死ぬのか それは選択するってことですね。」

「はい。自分の死に方、いや生き方でしょうか、これは自分で決めるんです。後悔のないように　オレはそうやって生きたいと思っています」空を見上げながら璃人が答える。その光景はどこか悲しいものがあると朱里と雛里は思った。

「それじゃー、益州を出てきたのも自分で選んだ事ですか？」朱里の発言に一瞬ビックリするが、雛里を見て意味がわかった。

「あ、気づいちゃいましたか？あわわ先輩に見られちゃったから遅かれ早かれバレるとは思ってたんですけど、意外と早いですね。まあそうですね、自分で選択したというのは今回は少し違いますが、益州を出た事に後悔はないですよ」

「子苑君が不幸の子って呼ばれるからですか？」

「それは違いますよあわわ先輩。基本臆病なオレでも守りたい人がいるんです。それに約束でもありましたし、だからオレは益州を出たんです。逃げたわけじゃない」璃人の言葉が本物だと言う事がわかるくらいしつかりと聞こえた。

「子苑君、真名を交換しませんか？本当は助けてもらった時から交換したかったですけど」

「はわわ、私もお願いしましゅ」

「急にどうしたんですか？先輩方。まあ構いませんけど」

「私の真名は雛里です」

「私は朱里です」

「まあお二人の真名は知っているんですけどね。オレの真名は璃人って言います。改めてお願いしますね先輩方」

「あわわ、よろしくでしゅ」

「はわわ、お願いしましゅ」

「それじゃ〜晩御飯にしましょうか。」

「はい」「そう言って二人と台所に行き、水鏡先生とも真名を交換し、みんなで話しをしながら食事を食べた。その後は各々風呂に入り就寝し、翌朝を迎える。」

そこには璃人の姿はなく、璃人の手荷物と武器もなくなっており、手紙が残されているだけだった。

第5話 とあるお嬢様との出会い

水鏡塾を旅立って 逃走 して二年ばかりの月日が流れた。今年で14歳、後一年すれば元服である。それで今何をしているかと言うと、類い稀な戦闘力を生かして軍で…働く訳はない。

今は涼州のとある城で料理人として働いている。水鏡塾を出た後荊州を西側に北上し涼州に入った。1年ほど山の中で家を建てて暮らし念能力や基礎体力、弓の鍛錬もした。発に関しては、前の世界とは違うものにしようと思ったけど、なぜかできず能力は変わらなかった。

変化系の能力が二つと緋の目を発動した時のみ使える能力が三つ。キルア曰く、変化系の能力はピスケよりも使えない、ただの容量の無駄使いと言われてしまった。だってしょうがないじゃん！メンチがめっちゃ怖くてこの能力にしないと、後が大変だったんだよ！メンチはと念の修業も一緒でお互いすぐに覚えたのだが、オレが変化系の能力者である事がわかるやいなや、ほぼ強制的にこの能力にされた。断ったら、メンチ愛用の包丁が薄皮一枚のところ投げられるので断れない。

オレの能力はオーラを調味料に変える力と簡易的な冷蔵庫。戦闘には全く使えないし、かつこ悪くて名前さえつけていない。二個目に関しては具現化系に近いが効果が大了たことないので容量をあまり食わず、一個目に関しても同様だ。旅の最中に森や山で生活する事もあり、料理にうるさいメンチにすぐに取り出せる調味料と冷蔵庫が欲しいということで作らされたものだ。この世界では別の物にしようと思ったができない。今ではメンチの呪いだとさえ思っている。死者の念は強力だからな（メンチは死んでない）

そんな悲しい現実には直面したが、逆にこれを利用してこの世界で生きて行けば良いと言う事になり、今ではお城で働いている。この城主様はともいい人で日々平穩に暮らしていける。この前初めて会ったのだけど、本当に城主か？と思ってしまったのは仕方がない。

回想

「おい、新入り！こっちの皿洗つとけ！それが終わったらそっちのやつだ。早くしろよ、今は昼時で客の入れ時なんだ！もたもたするなよ！」

「はい、おやつさん！」せっせと皿洗いをする。オレがこの町に来て職を探してた時に偶然見つけた料理屋。なんでも、人が辞めてしまつて足りないらしく、ならオレがという事で採用された。ここでオレの仕事は基本朝の仕込みと皿洗い、それとウエイター。メンチに鍛えられてしまつた雑用技術をいかになく発揮している。けどオレが早くやればやるほど仕事が増えて行くのはどう言う事だろうか？

皿洗いも終え今度は店内で注文を取る。そこまで大きい店ではないのだがお客でにぎわっているため、注文を取る必要があるのだ。今の時代、紙なんてもんは高価なので使えないし鉛筆やペンなどもないので覚えるしかない。そして、意外にその能力が高かつたためにこうして注文を取る作業をやらされている。

「お客さん。ご注文をどうぞ」小さなお客さんのようで、普通の服を着ているが明らかに似合っていない。それどころかお姫様のような感じさえする

「へうへうおすすめは何ですか？」なぜか周りをキョロキョロしながら注文を言う。誰か探してるのか？それとも、追われてもいるのだろうか？おそらく後者だと判断した。この子はどこぞの豪族の令嬢で、一般市民にまぎれて家出でもしてきたのだろう。きつと嫌な所にも嫁がされるが我慢できなかったんだろうな。

と勝手にお姫様認定してしまった、女の子から再度質問が有った

「へうへうあのおすすめを…」

「ああ、すみませんお客様。おすすめは、麻婆豆腐ですね。特にこの豆腐はおいしいです。」ご注文なさいますか？」

「は、はい、じゃあーそれで」

「畏まりました。少々お待ちください」注文をおやっさんに言いに行き、料理ができるまで他の注文を取っている。料理ができたので先程のお嬢さんに渡し、また店内を回っていると騒ぎが起きた

「おい！ここの店長出て来い！料理に髪の毛が入っているぞ！この店は客に髪の毛を食わせるところなのかあん！？」どこの世界にもいるクレーマー、しかしこの世界のクレーマーはかなり性質が悪く、金を巻き上げようとする

「あの、申し訳ありません！しかし…それは何かの勘違いではないでしょうか？」おやつさんが丁寧な口調で対応する。あっちも文句あんのか？みたいなこと言っているが、あれは絶対におやつさんのではない。それもそうだろう何せおやつさんは

「この通り髪の毛がありませんので」頭に巻いていた布を取り、頭を見せる。まだ30代くらいであろうおやつさんの頭には何も生えてはいなかった。なぜか悲しい空気になる。おやつさんあんた男や！

「じゃあ、その店員の髪の毛だろ！この黒髪！」

「オレ黒髪じゃないんですけど…」イチヤモンをつけられたので布を取り髪を見せる。母親譲りの紫の髪を

「…うるせえ！客が髪が入っているって言うてんだ、お前らは素直に言う事聞いとけば良いんだよ！」

「なにそれ？かつこ悪。その黒髪あんたのでしょ？自分で入れて文句言ってるなんて頭おかしんじゃないの？それとも何、その頭は飾り？そうだったとしたら悪かったわね、考える事が出来ない頭じゃそこまで考えが回らないわね」入口の方から入ってきたメガネっ娘が言いたい事だけ言って中に入って言った。当然、言われた方は激怒する。

「おい、その女！いきなり話に入ってきて言いたい事言いやがっ

て、おめえには関係ねえだろ！」

「そうね、関係ないわ。でも、あんたみたいなやつを見るとイライラするのよ、サツサと出て行ってくれる？目障りだわ」火に油を注ぐような事を チャレンジジャーだな。見て見ぬ振りができないタイプか、勇ましいけど、あれだと

「もう許さねえ！おい、女！ぶっ殺してやる」やめて、刀傷沙汰は片付けるのがめんどくさい。机とかに血がこびり付いたら拭くの大変なんだぞ！やるなら外でやって！

「フン、口で勝てないからって手を出す気？顔だけじゃなくて根性まで腐っているのね？」

「詠ちゃん！危ないよ！」先程のご令嬢がメガネっ娘に飛び付いた。どうやら知り合いらしい

「月、こんな所にいたのね！あれほど勝手に出歩くなって言ったのに、月に何かあったらどうするのよ！」心配してご令嬢に注意するようだが、このタイミングだと…

「ごめんね、詠ちゃん。このお店一度行ってみたくて、人の事無視して話してんじゃねえ！」・・へう」ご令嬢が怖がって、メガネっ娘に飛び付く。というかお姫様、あなた話の仲裁に来たんじゃなかったのですか？余計悪化しますけど

「ちょっと、月を怖がらせないでよ！」

「知るか、人の事を無視して話してるてめえらが悪りい！……お、良く見るとそつちのお嬢さんえらく可愛いじゃねえか？…それにおめえもなかなかの別嬪さんじゃねえか？おめえらがオレ様の相手をしてくれるんなら、許してやっても良いぜ、エっへへへ」

「誰が、あなたなんかの相手をするもんですか！あなたの相手をするくらいなら死んだ方がましよ！」

「なら力づくでやってやるよ！」二人に襲いかかろうとするおっさん

「お客様、お止めください。お代は結構なので、ここら辺でおやっさんが止めに入るが」

「うるせえ！」おやっさんを蹴飛ばし、腰に指してた剣を抜く

「お代は結構じゃねえんだよ！ここにある金全部寄せさせて言うてんだ！ついでにこの嬢ちゃん達も頂いて行く！」

「そ、そんな！」

「逆らうやつはぶつ殺す！」剣を振り回してるから、周りの人も近付けない。というか近付いてない。自分たちには関係のない事だと割り切っているのだろう。まあオレもそう思っていたが問題が発生した。あいつが金を持って行ってしまつと今日のオレの給料が無くなるのでそれは勘弁したい。しかし、剣を持っているやつ相手にするのは怖い。

「止めてください。：わかりました、私があなたの相手をします。だから、他の人達に手を出さないでください。」

「月！」

「大丈夫だよ、詠ちゃん。ちょっと行って話してくるだけだからまあそんなはずないでしょうけど」

「そんなはずないわ。絶対ひどいことされるわ！」

「あんだよ、心外だぜ？気持ちよくしてやるよ！エへへへ」本当に気持ち悪い笑い方をするおっさん。なんか、キメラアントの女王並にキモイ。あれは虫人間だからまだ許せるが、このおっさんは一応人間のはず。あんなオツサンに犯されたら生きていけないだろう。南無、来世で強く生きますように」

「ちよつとそこのあんだ、月を助けて！」

「無理ですね。めっちゃ怖いんですもん。あの人剣なんて持つちゃってます。それにあの顔あれはヤバい人の顔です、主に人間と言う種族に含めるかどうかと言う問題で。あのお嬢さんには失礼ですが、来世で強く生きれる事を願っています」

「あんだ月を見捨てる気？ここの店のために月は」

「それをあなたが言いますか？あなたがあんな風に言わなければもつと穏便に済ませられたかもしれないのに」

「そうかもしれないけど、あんなやつ見逃せつて言っの!？」

「自分で対処できないならそうするしかないでしょう。でないとお友達がああいう目に会います。」お姫様が連れて行かれようとする

「お願い、月を助けて！」泣きそうになりながら懇願する。まあ今回はあのお嬢さんも気の毒だし、何よりこの店のために、ひいてはオレの給料のために頑張ってくれているわけだし、ここは助けるべきか

「これ一回きりですよ。すごく怖いんですから。 やっべマジ行きたくねえんですけど」

「助けてくれるなら早くして！月が連れて行かれちゃう」

「口で言うだけの人は楽でいいですね！後でお礼をもらいますから」「何でもいいから早くして！」その言葉を聞いて駆け出す。相手の男は、お嬢さんに気を取られて、こちらに気づいていない。なので近くに有ったレンゲを手に持ち全力で投げつける。この距離ではずす程ノーコンではないので、見事男の顔面に直撃する。その間にお嬢さんを奪い取り男と距離を取る。ついでに剣はこちらで回収。鼻に当たったらしく鼻血を出しながら転げまわっている。見た目だけでかなりひ弱なやつだ。(璃人は自分で投げつけたレンゲの威力を自覚していない。レンゲをみればわかるが、砕けている。)

手に持った剣をおっさんの顔の横に突き刺しオッサンの動きを止める。お嬢さんはまだ、片手で抱いている。離そうとも思ったが、男

がお嬢さんを狙うとも限らないので一応手の届くところにいて欲しい
かったからで 他意はない

「まだ、暴れますか？そうなるとこの剣が勝手におじさんの方に倒れる
コトニナルケド・・・」

「・・・いえ、すみません。」最後の方がカタコトになってしま
った。これは内心かなりビビっているからである（周りから見れば
脅してるようにしか見えない）

・
・
・

問題を起こした男は縄で縛られ、駆けつけた警備の人に連行されて
行った。つうかおせーよ！こんだけ騒ぎになって何で気づかねんだ
よ！おかげでビビっちまったじゃねえか！（心の中では強気な璃人）

「それでは兵士さんお願いしますね」強気なのはあくまで心の中だ
けだった。

店の片付けも終わったところで、休憩に入ろうとしたら、おやつさ
んに声を掛けられた

「おい、新入り。お前もう上がって良いぞ。それと、明日から来な
くていい」

「ええ！？クビですか？」

「んや、なんでも城の料理人の要請がお前に有ってな、お呼びだそ

うだ。さつき兵士の人が来てそう言ってた。」

「なんで、城からなんですか？」

「オレが知るかよ。じゃあな、お前は結構見どころが有ったんだが残念だぜ」

「ちょっと、なんかオレが死ぬみたいな風に言わないでくださいよ。むしろ城で働けるんなら栄転です。もつと祝ってください」

「はいはい、おめでとさん」

「適當すぎる。もういいです、お世話になりました。」

「おお、たまには遊びに来いよ」

おやっさんとの別れも済まし荷物を持って城に向かう。そうするとなぜか王座に案内される。

嘘オレなんか悪い事したっけ？ま、まさか、勝手におやっさんの秘蔵酒を使った事がバレて・・・いや、ないな。たかがおやっさんで城主に呼ばれるなんてありえない。

どうでもいい事を考えていると入室の許可が出て入室する。

やっべ、緊張してきた。無礼を働いたら死刑とか言われたらどうしよう、逃げる準備だけしておこう。

部屋に入ってすぐ辺りを見渡す。両側に小さな窓がありそこから出

られそうだ。何かされたら速攻で逃げよう。此処は最上階だけどうまく屋根に降りれば大丈夫なはず。いざとなったら堅でガードすればいい。

「ちょっとあんた！何さつきからキョロキョロしてんのよ。」オレの行動があやしく思えたらしい

「すみません。急に城なんて所に呼ばれちゃったもので、緊張しちゃ… あ、メガネっ娘さん！お城の人だったんですね？これでこちらが呼ばれた理由がわかりました。それに 家出したお姫様もこの人だったんですね。」

「誰がメガネっ娘よ！ボクには賈？ 文和って立派な名前があるんだからね！」

「へうへ、家出って何の事ですか？私は董卓、字を仲頼といいます。先程助けていただいてありがとうございます。」お姫様だと思っていた人は、なんと、城主様だったらしくかなりヤバイ。無礼を働いてしまったから、死刑なんて事も

「いえ、お気になさらず。では、私はこれで！」サツと振り返り来た道を戻ろうとする

「ちょっと、どこ行く気？こっちは話があるって言うてのよ！」

「えーっと、どういったご用件でしょうか？もしかして、無礼を働いたから死刑とかですか？」

「月がそんな事するわけないでしょ！約束した通り、お礼をしたいのよ。あんた料理人なんでしょ？だったら城で働けばいいわ。そこいらの店で働くよりは給金も良いはずよ。どう？」

「え、ホントですか？なんだ、てっきり殺されちゃうのかと思って焦りましたよ。本気で逃げようと思ったじゃないですか。あく良かった。」

「だからさつき、辺りを見回していたのね。呆れた、ここは城の上階よ？窓から出たって死ぬじゃない。」

「そこはなんとか、屋根に降りればいかな〜と申しまして。」

「ハア〜仮に降りられても、城から逃げた時点で追われるわよ。あんた軍相手に逃げ切る気？」

「いや〜ある程度逃げてしまえばもう追ってこないかな〜と思いついて。一庶民を追いまわす暇なんてないでしょうに」

「まあそうだけど。 … あんた月を助けた時と全然違うわね。」

「基本的にこつちが本当のオレですね。あの時のオレはどうかしてたんです。」

「…まあいいわ。それでこの城で働くことで良いかしら？月もお礼

したいって言ってるし」

「はい、よろしく願いします。それで厨房の方はどちらに？」

「後で案内させるわ。それよりもあんたの名前聞いてないんだけど？」

「あ、忘れてましたね、オレの名前は黄恩子苑です。よろしく願いしますね」

「こちらこそお願いしますね黄恩さん」

「子苑で結構ですよ。それと城主様にさん付けされるのもあれなので呼び捨てで構いませんよ。」

「じゃあ子苑君と呼びますね。歳も近そうですね。よかったら話し相手になってください」

「仕事外でよろしければ。」

「ちょっと月に言われたんだからもっと嬉しそうにしないでね！月に話しかけて貰えるだけでもすごい事なんだから」

「詠ちゃん言いすぎだよ。子苑君気にしないで話しかけてくださいね？」

「はい、努力します。賈？さんがいない時にでもそうさせてもらいますね」

「それは無理ね。僕と月はいつも一緒だから」胸を張って言うてるがそれはかなり退く。こんな状況だからお姫様も逃げ出したくなつたのだらう。うう、なんて不憫なこみ上げてくる涙を必死にこらえながら賈？の自慢話が始まつた。へうへう恥ずかしいよ詠ちゃんと何度も聞こえたがメガネっ娘の暴走は止まらなかつた。

- - - - - 回想終了

「璃人君今日の料理はなんですか？」

あれからお姫様はよく厨房に現れるようになった。最初は厨房の人が恐縮していたのだが、持ち前の人柄の良さで、今ではすっかり馴染んでいる。それにオレの料理が気に入ってくれたらしく、姫様専属の料理人になってしまった。たびたび話し相手にもなっているのだが、こんな所メガネっ娘に見られたら面倒な事になる。

「姫さん、ここまで来なくてもこちらから持つて行きますよ。」真名はしばらくしてから交換したが、オレは大概姫さんと呼んでいる。最初のイメージが定着してしまつて、ずっとそれからだ。へうへうとか言つて、最初は照れていたが今ではもうすっかり慣れたご様子

「でも、そうすると、璃人君とお話できないでしょ？詠ちゃんももう少し璃人君と仲良くすればいいのに」

「あれは、オレの事が嫌いと言うより姫さんとの時間を取られるのが嫌なだけですよ。愛されてますね、姫さん？」

「へうへい変な事言わないでください！詠ちゃんも小さい頃から一緒にいるから、ちよつと心配性なだけなんです。」

「あれをちよつとと言える姫さんをマジで尊敬します。」

「まじ？確か本気って意味だったよね？なんで時々璃人君は変な言葉を使うの？」

「ハハ、故郷の方言ですよ。クセが出ちゃうのは仕方ないじゃないですか」ウソは言っていない。もとの世界を故郷と言ってるだけ

「そう言えば、璃人君の故郷ってどこでしたっけ？」

「益州ですね。それで、料理修業の旅に出て今はここにいるわけです」

「ふん、いつか行ってみたいな。その時は案内してくださいね？」

「オレもそんなに詳しいわけじゃないし、案内するような場所はありませんよ。森とかばっかですから。」

「いいんです、璃人君の育った所を見てみたいだけです。それにそこには璃人君の出してくれるような料理がいっぱいあるんですよ？私今までにこんなにおいしい料理食べた事なかったから楽しみです」

姫さんの満面の笑みを見たら、ないとは言えない。以前どうしてこんなに料理ができるのかと聞かれてとっさに故郷で学んだと言って

しまった。これも嘘ではないのだが、益州の事ではないので、そこに行ってもこれと同じ料理があるとは到底思えない。いつかバレてしまつがその時はその時だろう。

「まあいつかですね。オレも帰れるかわからないんで。はい、今日は寿司ですね。その醤油につけて食べてください」

「お寿司ですね、私これ大好きなんです！お魚はこの涼州では鮮度が良くないからあまりおいしくないんですけど、璃人くんが作るとなぜかおいしいんですよ」

当然念を使っているからである。璃人の念の能力『不思議な冷蔵庫』ミステリアス（最近命名）はただ食材を保管するだけじゃなく、鮮度も最高の状態に保つ事が出来る。この能力を作ってからメンチが結婚するか本気で悩んだほどである（丁重に断ったら割と本気で殴られた）

その念能力のおかげで良い魚があまりない涼州でもこうして鮮度のいい料理を出す事が出来る。璃人が今作れる料理は基本和食。魚が欠かせないのでこの能力はかなり良い。キルアには戦闘では役立たずと言われたけど…。後作れるのはカレーとシチューだけ。なぜか洋風な物はこの二つしか作れない。他の物を作ろうとするとかなり不器用になる。これについてはメンチが頭を悩ませていた。

「それじゃー今日は食材を仕入れてくるんで山に行つてきますね。夕ご飯は皆で食べれる物にしたいので鍋なんてどうでしょうか？イノシシが取れたら猪鍋ですね。」

「お鍋ですか？確か璃人君の故郷の料理なんですよ？皆で食べれ

るならそれが良いです。みんなで食べた方がおいしいですもんね。
…それだったら、私もついて行って良いですか？」

「ダメですね」月の懇願をバツサリと切る

「へう〜」

「オレがそんなことしたら賈？さんに殺されちゃうじゃないですか？それに姫さんをあまり危険な所に行かせるわけにはいきませんし」

「だったら詠ちゃんが了承したら良いんですね？」

「いや、その、人の話を 詠ちゃん 行っちゃったよ。随分とアグレッシブだな。賈？さんもオレが来てから姫さんが変わったって言うし、ハア〜」

このまま置いて行こうとも考えたが、下手に一人で来られても拙いので待つ事にする。どうせ賈？さんがそんなこと許すわけないだろう。

「許可もらいました！」にこやかな笑みを浮かべる姫さん。めっちらや可愛い

「なん…だと!？」

「詠ちゃんにお願いしたら許してくれました。私が泣きそうになると詠ちゃん甘くなるんです！」この姫様なかなか策士！賈？さんもきつと断腸の思いだったのだろう

「でも、せめて護衛の人とか……」

「璃人君がいるから大丈夫だよ。詠ちゃんも認めてるし」一度だけどれくらい強いのかという事で戦わされた事がある。無駄な事は嫌いなので猪相手だったが、一発で仕留めた弓術に賈？が舌を巻いた。本気で武官にしようとしたが、それをやったら本気で逃げると言ったので諦めてくれた。姫さんが言ってくれたというのも大きいが

「じゃあ、あまり傍から離れないでくださいね？野生の獣は危険ですから」

「うん。よろしくね、璃人君」こんな笑顔をされたら断れないだろ

第6話 約束と旅立ち

今は山の中にいる。城下で食材をそろえても良いのだが、やっぱり猪は新鮮な方がうまい。血抜きに時間がかかるが、それさえクリアしてしまえば美味しい物が食べられる。ついでに鍛錬も兼ねているので一石二鳥だ。

「姫さん、大丈夫ですか？」

「はい、平気です。でも、随分と山奥まできましたね。」

「動物は普段は人に近付かないのでこうした山の奥にいます。それに、これを見てください」地面に有る動物の足跡を指す

「猪の跡ですね。地面の草の具合から見てもさっきここを通ったのでしょう。ほら、オレ達が進んできた跡と似てるじゃないですか」

「ホントだ。璃人君詳しいんだね」

「まあ慣れですね」そんな感じで話しながらも、実は円を展開していたりする。以前よりも拡大した円の大きさは半径50メートル。前の世界のMAXにはまだ及ばないが日々進歩している。

・
・
・
掛った！

「姫さん、ちょっと静かにしてくださいね？この先に猪がいるんで」
「う、うん」どうして分かったのか気になっているようだが、璃人の言う事を聞いて静かにする。一方、璃人の方は弓を構え、猪が視界に入るのを待つ。……来た！

「疾！」力強く弾いた弦を離す。弓と矢は周で強化しているためかなりの威力と速さを誇る。一瞬で猪に突き刺さり、命を奪う。月の方もその洗練された弓術に目を奪われていた。

「終わりましたよ、姫さん。川によって血抜きをして、山菜を採ったら帰りましょう」

「う、うん。やっぱり璃人君の弓はすごいね、私のだとあんな風にならないもん。（へうへう璃人君の弓を射る姿がこよかったよ）」

「むしろ、姫さんがこれ出来たら引きますけどね。姫さんの仕事は別に有るんですから気にしないで良いと思いますよ。それより川の方に行くんで気をつけてくださいね。滑って川にでも落ちたら大変ですから」

「へうへう、私そんなドジじゃありません！それでも弓術と馬術は褒められるんです。華雄さんも褒めてくれたんですよ。」

「ああ、華雄さん、華雄さんね。オレあの人苦手なんですよ。自分の事最強とか言ってますけど、張遼さんとか呂布さんに軽く負けるじゃないですか、その後ヤケ酒に来るんですけど、絡み方が本気でめんどくさいんです」

「へうへ、華雄さんは良い人なんですけど、ちょっと思い込みが激しい所がありました」「フォローしようとするができない月。」

「まあ武將に褒められるくらいじゃなきゃ、こんな山奥まで登ってきて平気な顔なんてできないですもんね。姫さんなかなか行動力ありますよね。へうへとか言ってると思像できないんですけど」

「へうへ、からかわないでください!」

「すみません、へうへ」と笑いながら川の方に降りて行き、月は怒りながらも後をついて行つた。基本二人の時はこんな感じでお互いに気を使っていない。出会ってからはその日に日が経つてないけど、かなり仲の良い二人であつた。それに嫉妬して賈?が怒るのはいつもの話

川で猪の血を抜いて臓器を洗い『不思議な冷蔵庫』^{ミステリアス}に入れる。月はなんでこんな所にそんな箱があるのか不思議に思ったが、璃人が故郷ではこういう手品ができるんですと言つた事を信じて気にしてない。月にはこのままできて欲しい。

「それじゃー帰りながら山菜でも摘んで行きましょうか。姫さんも手伝ってくださいます?」

「はい」

ガサガサ。草むらの方から物音がする

「姫さん、非常事態だ。オレの傍を離れないでくれ」音が聞こえた瞬間、円を発動し辺りを調べた。そして反応があった。20人以上の人の反応が…

「どうしたんですか？」

「おそらく山賊です。数が結構いますので、逃げる事をお勧めしますが。どうしますか？」

「そうしましょう。この先を行けば広い所に出られる筈です」

「一回しか来てない山の事を良く覚えてますね。さすがです」

「へう〜」照れている月を抱えて走る。賊の一団とは逆方向に逃げやり過ごしてから帰ろうとしたが、今日は運が悪いらしい。

「なんだ坊主。そんなに急いで、こっちになんか用か？へッへ〜」
逃げる事に注意が言っつて円を解除してしまったことが裏目にでた。
賊の一団はまだいた。しかも、明らかにこちらを狙っているような様子だ。

「ええつと、今から帰るところなんですよ。皆さま方も忙しいでしょうから、こちらに気にせず、どうぞ行ってください」

「まあそう連れねえ事言っつなよ坊主。お前とそこのお嬢さんにはちよつと聞きてえ事があつてよ〜」

「ええっと、残念ながらあなた達のような人たちに聞かれるような事はないと思うんですけど…」

「いや、知ってるはずだぜ。何せ、お前がオレの可愛い弟を捕まえたんだからな！そのせいで弟は」

「あの〜弟さんって料理屋で問題を起こしちゃった人ですか？」

「ああ、お前が倒した奴だよ。今頃弟は辛い目に有っている。この落とし前、どうつける気だ？」

「あれは、あの人の自業自得な気がするんですけど。って言うても聞いてくれないですよね〜」

「当たり前だ！」

「じゃあ、この子は関係ないんで見逃してもらえますか？」

「そりゃーだめだな。そこのお嬢さんはかなりの上物だからな、後でオレ達が可愛がってやるから安心して死んでけ！」前までの璃人ならこの状況なら迷わず逃げるが、さすがに月をおいて逃げる気はない。

「ハア〜そう言われちゃうとこっちも本気で行くしかありませんね。姫さんその壁を背にして一步も動かないでください。左右に気を配って誰か来たら叫んでください。すぐに助けます」

「で、でも、璃人君…」

「どの道やらなきや死んじやいますから。姫さんはそこでジッとしててください。それとこれを持っていてください」

「これって璃人君の弓…」

「大切なものなので失くさないでくださいね？」

震える月に弓を渡して敵を見る。ざっと50人、先程の倍以上。

「お別れは済んだか？じゃあもう良いよな？」

「あなたたちこそ良いんですか？手加減できませんよ？」

「フン。行け！」部下であろう二人組が襲いかかってくる。

「遅せえ！」襲って来た二人の剣を奪い切り捨てる。璃人はクラピカ同様クルタ二刀流が使える

「て、てめえ！」

「これから始まるのは一方的な虐殺だ。大事な姫を傷つけようとしたんだ。お前らに死ぬ以外の道はないと思え。」

「う、うるせえ！かかれ！相手は一人だ取り囲んでやっちまえ！」
おお！と集団でやってくる。しかし、一人一人がバラバラでただ向かってくるだけ。そんな奴に負けるような鍛錬はしてない

「疾！」掛け声とともに向かって来た男の首をはねる。動揺して後ろで止まっているやつも返しの剣で同様に刎ねた。相手もこちらの技量を察したのか今度は一斉にかかってくる。しかし、この程度の相手なら一斉にかかってくるに慣れてくれた方が楽なのだ。

「4、5人まとめてかかって来い。その方が楽でいい」先に向かって来た3人を斬り飛ばして言う

「なめんじゃねえ！」

「甘いな」かかってきたやつらを片っ端から斬り伏せる。さらに、斬り伏せて足場の邪魔になった者は蹴りあげて相手に飛ばす。相手がひるんだところをすかさず斬りつける。それを繰り返して、あっという間に相手が残り5人までになった。

「おい、弓だ。あいつはあそこから動かない。弓であいつを狙え！」
一斉に弓が飛んでくる。しかし、前の世界で弾丸を相手にしていた璃人からすればこんなの余裕で防げる。月が後ろにいたので避けずに全て斬り落とす。さすがに、剣の方が安物なので周を使ってももたず先の方から砕けた。

「よし、野郎は武器を失った。今だ一斉に」
「放てという前に

何か風を切るのを感じた。男がふと横を見ると自分の部下の顔に折れた剣が突き刺さっている。そう璃人が投げた剣が

「武器ならここにいくらでもあるぜ！」そう言って地面に転がっている剣を投げつけ部下たちの命を奪って行く

「残るはお前だけだ」

「ひいいい、た、助けてくれ」命乞いをしているが

「無理だな」一刀で切り捨てた。璃人は切り捨てた剣を捨て、月のもとに戻る

「ごめんな、怖い思いをさせちゃった」

「り、璃人君、そ、その目」

「ああ、これはオレがここにいる理由だ。オレの故郷の益州では赤目が不吉のものとされていてな、それで州を追い出されちゃった。気持ち悪いだろ？ …それに、この目になると性格が変わるんです。すみません、姫さんにこのような物を見せるつもりはなかったんですが 軽蔑してくれてかまいませんよ」緋の目を解除し急に口調が戻る

「そ、そんなことない！その目は綺麗だと思っし、軽蔑なんてしないよ！私は守るためにしてくれたんだもん！」その月の言葉が今は何よりもうれしい

「帰ろう、璃人君。そして美味しい料理を作って！」満面の笑みを浮かべながら手を差し出す月

「…フフ、姫の仰せのままに」ちよつと気障っぽく言ってみた。月も少し照れながらも二人で手をつないで帰った。

城に帰った後は鍋パーティー。呂布さんの食事が半端なく大きめの猪が軽く食べられてしまった。一応20人前で作ったはずなのに、あの人のお腹の中に10人前は持ってかれた。最初に確保しておいてよかった。

一料理人であるおれが將軍たちとの食事の場にいるのは月のせいである。どうせなら一緒に食べようというので了承した。オレの隣で食べる姫さんを見た賈馱さんの嫉妬の眼が怖かった。視線で人が殺せるなら、何回死んでいただろうか？

それに張遼さんの絡みもめんどくさい。オレの作った酒を気に入らなくやたら絡んでくる。必殺姫さんガードを使わなかったら、

ずっと絡まれ続けていただろう。

食事が終わって、賈馱さんの話が始まる

「ちょっと皆に聞いて欲しい事があるの」一料理人でしかないオレがいる状況で話していいのだろうか？

「都の何進から都に上がるよう言われたわ。朝廷は今いろいろ大変な事になっていて、私達の軍に目を付けた何進が私達を味方につけようとしている。断れば、即逆賊扱いになってしまう。私は月を守るからついて行くけど、この決定に不服で軍を出たいと言うものは止めないわ。」賈馱さんが辺りを見渡し、誰も抜けようとはしない。それだけ、月が慕われているのだろう。

「あの～使用人の方はどうなるので？」自分の処遇を聞くために質問する

「一応一緒に行く事になっているけど、そっちの方も個人に任せるわ。都に行けば危険な事も増えるかもしれない。軍人でない人の身を守ることは難しいかもしれない。下手にあちら側の機嫌を損ねるような事があれば、殺されたっておかしくないもの。」

「え～じゃあ、私は辞めさせてもらいます」

「ええ？」一番驚いたのは隣にいる月

「基本的に危ない所には行きたくないの、姫さん、すみません」

「う、うん。璃人君が決めた事だから」「悲しそうな顔をする月

「でも、姫さんが危なくなるような事があつたら必ず駆けつける。オレに何か出来るわけじゃないけれど、必ず駆けつける。だから、また会いましょう」

「うん。また会おうね」月の涙が、目に焼き付いて離れなかった。月を泣かせた事で賈馱さんがキレ出したがそんな事が気にならないくらい、月の涙は綺麗だった。

.....

仕事場の人や、知り合いの將軍たちと別れを済ませ、旅立つことにする。別れ際に再会を約束して月に神字が書かれている紐を渡した。

「月が危ないと感じたらオレにわかるようになっていいるから、どうしても困ってどうしようもない時はその紐に念じればオレが駆け付けるだから大事に持つといて欲しい。」そういうと月が少し顔を赤くして頷く。大切にするという月の言葉に安心して旅立って行った。

.....

涼州を出て今は？州の陳留の近くにいます。山で食料を調達し、それ

を近くの村で売り日々の生活の糧としている。涼州を出てから足を止めて生活するような事はなかったが、ここ陳留は比較的治安もよく、ここなら平和に暮らせるかなと

「思ってた時もありました、はい」

「何を急に言っただやがる！サツサと金目のもん出さねえとぶっ殺すぞ！」

「そうなんだな、その後ろに背負ってる弓を置いて行くんだな」

「そいつはなかなか高く売れそうですね、兄貴」ヒゲ、デブ、チビの三人に璃人は絡まれた

「ということ、さよなら」三人に目もくれず逃げる。

「待ちやがれ！」追ってくる三人だが、追いつかれるような脚力はない。グングン引き離すが、目の前に二人の女性がいた。嘘！？ここにいたら、あいつらに出くわしてしまうじゃないか！オレの知らない所ならいざ知らず、オレが逃げてきたせいでこの二人が襲われるのは忍びない

「なぜ、こんな所に御二人はいるんでしょうか？後ろから賊が追ってくるので早く逃げた方が良いでしょう」とりあえず、注意して見るが

「グう」頭に変な人形を乗せた子は寝たようだ。

「お疲れのようだし、死にたいみたいなんで、この子は置いて逃げ

ましようか？」メガネを掛けた女性に尋ねる

「コラ、風寝るな！それに、あなたのもとには星殿が向かった筈なのにどうしてここへ？」

「お知り合いですか？そんな人いませんでしたけど…ああ、追いつかれちゃったよ！」後ろから追って来た賊に追いつかれてしまった。

「お兄さん、風達の事は気にせず逃げてください。おそらく星ちゃんもそろそろ来ると思っているので大丈夫ですよ」

「ホントですか？では、お言葉に甘えて…」

「おいおい、こんな弱い子を置いて逃げてくなんてお前本当に男か？」

「これこれ、宝？、そんな事は言うてはいけませんよ。さ、お兄さんお気になさらず」

「じゃあ、さよなら」振り向いて逃げようとするが、人形を頭に乗せた子に服を掴まれた

「離してください。気にしなくても良いのでしょうか？」

「そこは、言葉の裏を呼んでもらいたいものです。女の子二人を見捨てるおつもりですか？」

「さっきからコツチを無視してんじゃねー！誰も逃がすわけないだ

ろうが！その男は金目の物を持ってそうだし、そつちの二人にはオレ達の相手をしてもらおうか。エッへへへ」なかなか汚い笑い方だが前に見たやつよりはマシだな。

「それじゃ。ごゆっくりどうぞ。あ、金目の物は持ってないんで、オレはこれで失礼しますね、では！ ……離してください」まだ先程の女の子に掴まれている

「お兄さんは、風達がこの人たちに酷い目にあわされても良いと言うんですか？お兄さん、人でなしですね。ああ、風達は、ここでひどい事をされて殺されてしまっんですね」

「そうですね、残念です。しかし、見ず知らずの人のために命を掛けるなんて真似はできませんので、すみません。それと、その芝居やめてください」若干イライラしながら言う

「すみませんお兄さん。助けてもらえないでしょうか？」こちらの意図がわかったのか先程の女の子が頭を下げてきた

「ハア、そこで引かずに押してくださいよ。そう言われたら助けられないじゃないですか。かなり怖いんですけど仕方ありませんね。よいしょっと」背負っていた荷物を下ろし構える。まあ実際の所、この程度の連中なら何の苦もなく倒せるが、この女の子の芝居がかった演技が少しイラっときたので、逃げるふりをしてみただけ

「武器を置いてしまつていいのか？こつちは三人だけ？降参した方が身のためだぜ？」ちよつと強めに言っているが若干腰が引けている。おそらく人を襲つた事のないもと農民だろう

「でも、退いたつて殺されちゃうなら、やるしかないじゃないですか？それにその剣拾いものでしょ？刃毀れがひどくてそんなもんじや切れませんか？」

「う、うるせ！チビ、デク、やつちまえ！」

「わかつたんだな」「へい兄貴」そういつて突っ込んでくるが

「足元がお留守ですよ？」突っ込んできたチビの足を払い空中に浮かせ

「そいや！」腹に蹴りをぶち込む。念は使っていないが、軽かつたためデブ方にぶつかった。ぶつかったデブはいきなりの事で反応できず地面に倒れる。そこを見逃さず追撃を掛ける

「とりあえず、寝てください」倒れたデブの顎を軽く蹴り意識を刈り取る。チビの方は先程の蹴りで気絶したようだ

「後はあなただけですな？」そういつてトドメを刺そうとするが

「待て待てえい！か弱き女性達を襲う賊ども、この常山の昇り竜。趙子龍がお相手いたす。覚悟せい！」ああ、これでオレの役目も終わりか、もっと早く出てきて欲しかったなと思ひながら一息つこう

とするが

「せい！」なぜか、こちらを襲って来た。

「何故に！？ウおおい」ギリギリでかわし態勢を整える

「ん？賊にはなかなかやるじゃないか。だがこれなら！」槍を払いから突きに移行。しかも、その突きが半端なく速い

「おお！あぶない ってば！」全ての突きをかわしたが若干掠つてしまい服が破けてしまう。ああ、替えの服少ないのに

「やはり、他の賊とは違うな。ならこちらも全力で「星ちゃん」なんだ風。危ないから下がっている。「そのお兄さんは賊ではありませんよ。」何？なら賊はどこへ？」

「あなたのせいで逃げられましたよ。その御仁が倒した二人を連れて」メガネを掛けた女性が割って入る

「……すまない。てつきり風達が襲われているものと勘違いして腰を抜かして倒れているやつを見たからそっちの方が襲われた方だと勘違いしてしまった」微妙な空気になってしまい、深々と頭を下げる星

「非難の目を向ける璃人

「うっ、すまぬ」そんな璃人の視線に耐えられず先ほどよりも深く頭を下げる

「良くはないですけど、勘違いなら仕方ありませんね。これからは“くれぐれ”も気をつけてください。」

「わかった。風達を助けてくれた御仁に刃を向けてしまうなど、この趙子龍一生の不覚。」

「お兄さんありがとうございます。風の名前は程立というのですよ。」

「私は戯志才と申します。私からも礼を言います。助けてくれてありがとうございます。」

「では私も改めて、私は趙子龍という。先程は本当に申し訳なかった。」

「オレは黄子苑と言います。ケガがなくて良かったです。」

「それにしてもお兄さんお強いですね。なぜ最初は逃げていたのですか？」程立の間延びした口調が気になるが、一応答える

「戦うのが嫌だからです。危ないじゃないですか」

「私も気になったが子苑殿はなかなか武を持っているのに、危ないとは？最初あなたが襲われている時に助けに入ろうと先回りをしました。あなたが逆方向へ逃げてしまったため、助けに行けなかった。稟や風の方向に逃げて焦りましたが、来てみればあなたが賊を圧倒している、だから襲っている人が賊だと思った訳ですが」

それほどの武を持ちながら一体なぜ？」

「買いかぶりですよ。オレは臆病な弱者ですね。今回はたまたまです。危ない事には関わらないようにしてるんです」

「謙遜しなくてもいい。貴殿は相当強いとお見受け出来る。どうか
な？一手私と打ち合ってもらえませぬか？」挑戦的な笑みを浮かべ
誘ってくる趙雲

「嫌ですよ。無駄な戦いなんてしたくないですし、勝てそうにもない
いで……」

「やってみないとわからんではないか？立派な弓も持っているよう
だし」

「あ、あれは基本狩りに使うものなので、戦いには使いません。」

「ム・ムム、仕方ないこの手は使いたくなかったが」「徐に雰
囲気が変わる

「無理やりしようとしても逃げますよ？足ならオレの方が早そう
ですし、二人を置いて行くわけにはいかないでしょう？」

「そんな事はせんよ。なあ、子苑殿賭けをしないか？勝ったら、私
秘伝のこのメンマを進呈しよう」メンマの瓶をどこから出したのか、
出してきて宣言する

「いいりません、なぜメンマなんですか？」

「ム、貴殿はメンマの良さがわかっていないようだな？いいかメンマと言うのは」
「メンマの事について熱く語るうとする趙雲。ああ、メンチと同じタイプだ。こういう人はめんどくさい事この上ない」

「程立さん、止めてもらえませんか？」

「無理ですね、ああなつた星ちゃんを止めるのは私では不可能なのですよ。凵ちゃんはどうぞです？」

「私も無理ですね」メガネをクイツと上げながら答える

「仕方ないですね ではこれを」璃人も徐にメンマと書かれた瓶を取り出す。璃人の場合は能力で取り出したのだが…

「んんん！？それは…」熱弁していた趙雲がいったん止まりこちらを凝視する。

「これはオレが作った特製メンマです。どうです、欲しいですか？」

「た、頼む！譲ってくれ！」

「なら、勝負は無しと言うことでもいいですか？」

「ムムム……それは…」

「じゃああげれませんね」

「…わかった、勝負は諦めよう」かなりの葛藤が有ったようだが勝負は諦めてくれた

「二言はないですね？」

「私の真名に誓って約束しよう。だから…」

「ではどうぞ」「そう言って瓶を渡し、趙雲がすごく嬉しそうな顔をする

「では、早速」「趙雲がメンマを食べようとするが

「子苑殿これは一体どういう事ですか？」趙雲の顔が少し怒っている

「何か問題でも？」

「問題？…なぜこれだけの大きさの瓶なのにこれぽちしかメンマが入っていないのだ！」趙雲が中身を見せ叫ぶ。中に入っていたのは数枚のメンマ

「そんなのオレが使ったからに決まってるじゃないですか。確認しなかったあなたが悪い。それにちゃんとメンマが入っているですから問題はないはずですよ？それとも撤回しますか？真名にまで誓った事を。まさか…」

「うう、て、撤回・・・などせん。確かに私の責任だ。ク、こんな
においしそうなメンマがこれだけしかないとは」

「まあ、それは試作品ですから、感想を聞かせてくれるとありがたい
ですけど」

「なんと！？こんなにおいしそうなのに、試作品とな。ならば、メ
ンマ愛好家としてしっかりと評価してしんぜよう」そう言ってメン
マを口に運ぶ…食べた瞬間、趙雲の動きが止まった

「美味しくなかったですか？」不安になって聞いてみたが反応がない

「もしもし」顔の前で手を振ってみるが反応がない

「気絶しているようですね。お兄さんのメンマがあまりにも美味し
かったのでしょうか」

「うそ、そんなで気絶する人がいるの？この人どうしよう・・・」

気絶した趙雲をどう扱っていいかわからなかった。

第7話 傍観しようと思ったけど出来ませんでした。

気絶した趙雲を無視して立ち去ろうとしたが

「お願いします。星ちゃんを運ぶのを手伝ってくれませんか？」先程の教訓から、変な芝居はせず、素直に頼んでくる程立

「近くの村までですよ？」しびしび了承し、背中に背負っていた弓を手で持ち趙雲を背負う。背的にはこちらの方が高いので、問題なく背負う事が出来た。途中星ちゃんの胸は気持ちいいですか？とバカな事を聞いてきた程立に

「ええ、危つく落としそうになるくらいには。おおっと・・・危ない」趙雲を落とすふりをする。前の世界でメンチにパシられたために、女性をおぶることぐらい問題ない。メンチなんか楽するために人の上にすぐ乗って来やがるし

璃人の様子に慌てて謝罪する程立。からかったつもりで、友人が落とされるのは申し訳ない。横でメガネをクイツと上げる戯志才は夕メ息をつくばかりであった。

しばらくして村に到着して趙雲を休ませる。ここらでお別れしようかと思っただが、

「この近くに賊がいるようです。当たりの村が最近襲われているようです」戯志才がどこからか情報を仕入れてきた

「それならここのお偉いさんに任せましょう。確か…」

「曹操殿ですね。この辺りを治めている方は。」

「ああ、その人です。ここら辺の村でも評判が良いのでおそらく賊を鎮圧してくれるでしょう。」決して自分でやるとは言わない

「そのようなことではイケませんぞ！か弱き民を守るため、私らと共に賊を征伐してやるうではありませぬか」いつの間にか起きていた趙雲が話に入ってくる

「そうですか、頑張ってください。それじゃ、オレはこれで」荷物を取って立ち去ろうとするが

「ム、お主は戦ってはくれんのか？」趙雲が少し不機嫌そうな顔で言う

「はい、先ほども言いましたが見ず知らずの人のために命を懸ける気なんてありませんよ。弱き民が守られて当然だと言うのなら、それを言ってる人が助ければ良い。強者が必ずしも弱者を助けなければならぬ理由なんてないんですけどね。オレは弱者側なので関係ありませんが」

「……まあ無理強いはずまい。しかし、貴殿と共に戦ってみたかったものだ」少し残念そうだが他の人と違い、無理強いして来なかったので趙雲の評価はウナギ登りだ

「では、頑張ってください。健闘を祈ります。」そう言ってその場

から去って行った。

・
・
・
・

程なくして趙雲一行は村で志願兵を募り、当たりの村でも募集した。相手の賊の人数は把握しきれないが、そこまで多くはないと予想される。星と軍師二人がいればなんとでもなるであろう人数だ。

「それにしても良かったのですか？今は一人でも戦える者が多い方が良いのでは？」稟が星に尋ねる

「ん？ああ、確かに、戦える者が多い方が良いが、あの御仁は戦う事があまり好きではなさそうだから、無理強いさせても仕方あるまい。たとえ賊とは言え、命の危険があるのだから、命を懸けるとは言えまい。それに強者が弱者を守る、あの御仁の言葉が今でも心に残っている。今までなら、何の疑問も持たなかったが、確かに変だな」

「守られる側が何もしないと言う事ですか」

「そうだな、風。先程も兵を募ったが結果は芳しくなかった。後で軍が来てくれるからオレ達はいいと言って集まらなかったな。」

「でも、それは仕方がないのではありませんか？戦うことが怖いと言う人もいるでしょうし、何より彼らは農民です。税金を納めているのですから軍に任せるのは当然でしょう」もっともな事を言う稟

「確かに、そうだが、我らが討伐を提案した時の村の様子はどうだった？皆が自分たちの事なのに関係ないと言わんばかりの顔をしていたぞ。……これがこの国の現状だ」

「そうですね、助けてもらふ事は当たり前、守ってもらふ事が当たり前、そう言った考えが広まっているのは確かです。」

「別にそれは悪いことではないと思う。だが民を守るのは軍であつて強者ではない。守りたいなら軍で働けばいい。それ以外のやつに求めるなと子苑殿には言われたような気がしたな」星が子苑の言葉を思い出すように言った。

「私は少し違いますね、お兄さんは選択するのが自由だと言つたような気がします。戦つのも守られるのもどちらを選ぶのも本人の意思だと言っているような気がしました。」

「そうですね？私には戦う事が怖いからあんな事を言つたように聞こえましたけど……ただ逃げてるだけじゃないですか？」

三者三様の意見

「確かにそう言う面もあるでしょうけど、風や稟ちゃんや星ちゃんと違って軍師ですからね。前線で戦う兵士よりは命の危険が少ないです。風もお兄さんに助けるように促した発言をしますが、あれは今考えれば酷いこと言つたと思います。いくらお兄さんが強いと言つても、命の危険がないわけではないのですから。口で言ってるだけの私達がどうこう言える事ではないと思つんですよ。星ちゃんならわかるでしょうけど」

「うう、確かにそうですね。私達の策は戦に勝つためのものではあるけれど、それを実行するのは最前線にいる兵士たち。成功したとしても、命が失われる可能性があるのだから、私達に比べれば大変な事です」稟も少し思う所が有ったのか考えているようである

「私としてはどっちもどっちな気がするがな。軍師がいなくては兵が活きず、軍師がいても兵がいなければ軍師が活きない。どちらが良いというよりもどちらも大事なだろう。まあ命の危険があるだけ兵士の方が優遇されてもおかしくないと思うがな。これは国の問題だから今考えてもどうしようもあるまい」

「そうですね、今は賊の事を考えましょう。…この先に賊が住みついている村があります。最近襲った村を占拠したのでしよう。数は多くて200ぐらいでしょうか？こちらの義勇兵は20人程。星殿やれますか？あなたへの負担がかなり大きくなってしまいますが」

「問題ない、私一人でも十分なくらいだ」所詮賊だろうと余裕を見せる星

「星ちゃん無理だけはしないでくださいね？今回は風達はほとんどやれる事がないので、遠めからの弓を指揮するくらいしかできませんから。」心配しそうな顔で星に念を押す風。

「心配するな風。たかが賊に後れをとるほどこの超子龍、軟弱にはできておらんぞ。風達は安心して待っていてくれればいい」

少し不安な風だがわかりました」と言っつてその場はおさめた。

賊の本拠地としている廃村。辺りには死体が転がっている。おそろく逃げ遅れた村人の死体そのままになっているのだろう。この光景を見て星達は唇を噛むのだった。義勇兵として志願した人達も手に力を込めている。その怒りを抑えて作戦会議に入る

「まずは、火矢で相手の動揺を誘い、相手が混乱して出てきたら一斉に弓で攻撃。討ちもらしを星さんが叩くと言つ事でもよろしいですか？」

「ああ、この趙子龍の槍で賊どもを成敗して見せよう」星が自信満々に言つが

「風、何か気になる点でもあるのですか？」風の様子がおかしいと稟が尋ねる

「村の出口はこちら側しかなく、向こうは岩で仕切られています。だから、こちら側に逃げてくるのは確実なんですけど、大人数が入口に押し寄せたとすると、いくら星ちゃんでも無理じゃないかと思つのですよ」

「何を言つ風。賊の1000や2000私一人で叩けるぞ」

「確かにそうですが、ここは平地ではなく、一本道になります。最初はいいでしょうが、追いつめられてた賊が突っ込んできたら、捌き切れないと思うのですよ」

「ん〜確かに風の言う通りかもしれない。星さんが途中で立ちふさがったとしても、突破される恐れがあるし、星さんが囲まれたら…」
最悪の状況を考える稟。

「稟、心配するな。私が賊に後れをとると思うのか？お前たちは、弓の指揮を頼むぞ。後は私に任せろ」そのまま歩いて行ってしまった星。二人の軍師も不安があるのだが、星が行ってしまったため作戦を実行するしかなかった。

・
・
・
・

火矢が村の中に放たれる。何十本もの火矢が村に飛び、辺りの建物を焼いて行く。それに焦った賊たちが、一斉に逃げだし、こちらの思惑通り一本道の方に逃げ出してきた。予想通りの展開なので稟が弓兵に指揮をする。弓自体は素人だが、相手は大人数で来てるのでどこに打つても当たるようになっていた。賊が次々と倒され、弓から逃れた賊を星が倒して行く。最初は風の予想通り順調だったが

「クソ、数が多くて動きがバラバラ、なかなかやり辛い。ハアアア！」近くにいた賊を斬り飛ばすが、一向に数が減らない。200と予想していたが明らかにそれを超えている。見誤ったと後悔しながらも賊を斬り飛ばして行く

「死体が邪魔で思うように動けん。それに、相手も何も考えずに突っ込んできている。これでは……」風が懸念していた事が実際に起ってしまった

「死ねや!!」先程通り過ぎた男が反転しこちらを襲って来た。普段なら余裕でかわせるが、今は死体で足を取られかわせない。とっさに槍で防いだが、今度は前方から、攻撃される。バランスを崩していたため防げない

「(クツ、これまでか)」と諦めかけたその時

「くわあ!」今まさにトドメを刺そうとしていた男の眉間に弓矢が刺さる

「なんだ? 一体どうしたんだ!？」賊たちが一斉に騒ぎ出した。その間も次々と射られていく賊。星の周りにいた賊は全て射られた

「(義勇兵達か? いや、この精度は義勇兵のものではない。なら、誰が? ……!)」考えた結果一人だけ思いついた。この状況でこれだけの矢を射れる者を。確かに彼は弓を持っていた。

「感謝しますぞ! これなら、存分に戦える!」態勢を立て直した星が賊に突っ込む。それを見ていた稟が叫ぶが星は止まらない。星は自分の眼前に見える敵をすべて倒して行く。当然こうなれば、後ろに賊が行ってしまうが、稟たちが賊に襲われることはなかった。星を通り過ぎた賊は全て心臓が眉間を射られ絶命していく

どうしてこのような状況になっているかわからない稟だが、これは好機と、星に当たらないように弓を射させる。一刻もしないうちに全ての賊が始末された。

- - - - -

賊の始末が終わり、死体は義勇兵に任せて、いったん先程の村に戻り、目的の人物を探す星達。まだどこかにいるだろうと思いつけずして探そうとしたが、意外にもあっさり見つかった。目的の人物はのん気に昼食を食べている。おそらく自分で用意したのだろう、使われた食器が重ねられていた

「子苑殿、先程の助力、誠に感謝する。おかげで命拾いした」星が頭を下げ、風や稟もそれに続く

「星殿から聞いておりましたが、本当にありがとうございます」

「お兄さん、星ちゃんを助けてくれてありがとうございますよ」

「まあどっかの誰かさんが無茶するのが山の上から見えてしまっています。見てしまったのなら、見過ごすのもあれかなと思ったままですよ。今回はたまたまです」

「おや、てつきり否定してくると思ったが」

「否定しても変わらないなら受け入れた方が楽ですからね。まあご無事なようで何よりです。なかなか勇ましい戦いぶりでしたね」ち

よつと皮肉っぽく言う

「うう、私としては大丈夫だと思っていたのですが、いやはや、まだまだ未熟でしたな。自分を過信するなど」「反省している星

「それでも十分すごかったんですけどね。平地で戦っていれば、倍いたとしても一人で勝てそうな武でしたよ。」

「それを言えば、貴殿こそ素晴らしい弓術をお持ちのようで。あれほどの弓の精度はなかなかお目にかかれない。それに山から見えたと言っておられたが、かなりの距離が有ったはず。それを感じさせない程の腕、感嘆の声しかでませんな」

「オレは趙雲さんと違って遠くからこつそり狙うのが得意なだけですよ」

なんかお互いを褒め合っているような空気になってしまい、あれなので、璃人は星達を昼食に誘った。星達もそれを了承し今は皆でそれを食べている。星達はその料理の腕前に感嘆し、結構なペースで消費していく。メンマが有れば最高なのに…と星がつぶやいたのが聞こえたが、スルーする事にする

食事を終えて、一息ついた時星が急に話を切り出す

「子苑殿、先程も言ったが、此度の件、誠に感謝する。あなたがいなければこうして皆とこのように食事など出来ていなかったかもしれない。こちらとしては返せる物が有れば良いのだが、いかなせんそれも無い。だから、私の真名を受け取ってはもらえないだろうか

？恩人に渡せる物など今はこれしかないのではな

「構いませんよ、そこまで気にしなくても。オレに被害が有ったわけではないので」

「そうだとしても、恩人に真名を預けないなど趙子龍一生の恥。此処は受け入れてもらえないだろうか？」

「そこまで言われたら断りませんが」

「なら、風の真名も受け取ってください。お兄さんには助けってもらった恩もありますし」

「そうですね、私もあなたに助けてもらった事ですし、私の真名も受け取ってください」風と稟が星に続く

「わかりました。」

「では、私は性を趙、名を雲、字を子龍、真名を星と申す。」

「風は、程立、真名を風と言つのですよ。」

「先程は偽名を名乗ってしまって申し訳ありません。私は性を郭、名を嘉、字を奉孝、真名を稟と申します。この度は本当にありがとうございました」

「オレは性を黄、名を恩、字を子苑、真名を璃人と言います。後皆

さん敬語みたいな口調はいいですよ。オレの方が年下みたいですよ」

「こちらにまで真名を許して良かったのか？それと、お主歳は幾つだ？」

「真名を許されたのに、返さないと礼儀に反しますし構いません。それと、歳は14です。あと少しで15になりますね。元服を迎えます」

「14！？お主その年でもう一人で旅してるのか？親は？」

「いますよ。父は病気で無くなりましたが、母が健在です。それに、14と言ってもあと1年で元服ですよ、そうなれば立派な大人ですよ。オレは人より少し早く旅に出ただけですよ」

「ちなみにお兄さんはいつから旅に出てるのですか？」

「12の時ですね。大陸料理修業の旅ですよ」

「「12！？」」星と稟が驚いたような顔をしながら繰り返す。風は声は上げなかったが、珍しく驚いた顔をした

「まあ基本平和な所を探してましたし、賊に見つかっても逃げ回っていたので大丈夫でした。おかげで逃げるのには自信がありますよ」とのん気な感じで言うてはいるが3人とも思う事があるのか、それ以上は聞かなかった。本人は料理修行と言っではいるが、明らかにそんな感じはない。聞かれたくないのだろうと察した3人は話

を変えることにした

「なかなかな人生を歩んでいるようだ。それじゃ、璃人、お主はこれからどこへ行くのだ？」

「ん〜とりあえず、陳留で料理人でもしようかなと思っていました。あそこは治安が良いって評判なので」

「私と稟ちゃんもいずれは行くこうと思ってます〜。曹操さんに仕えるのが稟ちゃんの夢でもありますし」

「風、私はそんなただ曹操様にお仕え出来たら良いなと思ってるだけで、そ、それ以上の事なんて・・・ああ、いけません！そこは、あ、あ、いやん」何か一人で妄想に入った

「璃人そつちにいるのは危ないからこつちに来た方が良い。それに子供には毒だ」

「?」良くはわからないが、こういう時は言われた通りにするのが正解な事を経験から知っているので素直に星の横に移動する。稟は妄想に拍車がかかり一人で自分の体を抱きしめながら悶えている。すると、いきなり顔を上に向け

「ブハア！」鼻血を噴出した。しかもかなりの勢いである

「...」あまりの事に言葉が出ない

「はい、稟ちゃん、トントンしましょうね。トーン、トーン」風が手慣れた手つきで稟を介護している

「稟は妄想が高まるとああやって鼻血を出す癖があつてな」

「一番まともな人だと思っていたのに…」

「ん？それはどういう事だ、まるで私や風がまともではないような発言だな」

「メンマで気絶する人なんていませんし、人形を頭にさせてる人も普通いません」

「クツ、あれはお主のメンマがあまりにも美味しすぎてだな」

「褒めてくれるのは嬉しいですけど、気絶するほどまでではないと思うんですよ。それを踏まえて、常識人は稟さんだけだと思いますけど、残念です。」がつくりと肩を落として見せる璃人。それを見て星がまだ抗議しようとする。途中からメンマの話になっていると言っわけのわからない展開、鼻血で倒れた人と頭に人形を乗せた人、そしてメンマについて熱く語る人。なんとも奇妙な光景が村の一角には有った。

.....

あのカオスの状況から場が落ち着き、今はそれぞれ出立の準備をす

る。

「それじゃ、ここで、お別れですね。お互い生きてればまた会えるでしょうけど、その時はよろしくお願ひします。お気をつけて」

「うむ、達者でな。父以外に私の真名を預けた男がそう簡単に死ぬとは思えんが気をつけるのだぞ」

「なんか、サラツと言ってますが、ホントに良いんですか？オレなんかん真名を預けちゃって」

「それは、問題ない。お主は私が今まで見てきた男の中では素晴らしいと思うぞ。若干臆病な所があるが、やる時はやるという所は好感が持てる。もう少し年が経てば婿にしたいくらいだ」

「星さん程の人がお嫁さんなら嬉しそうですけど、オレには勿体ないと思うので他の人を探してください。星さんなら引く手数多でしょうから」

「む？私は結構本気だぞ？嫁になっても良いと思えたのはお主が初めてだ。」若干挑発的な顔で言っているがその真意がわからないのでここは流す事にする

「まあ、お互い生きて会えたら考えましょう。まだオレはお子ちゃまなんで、年上の星さんの魅力はまだ伝わらないですよ」実際美人だと思つ。けど、今まで会ってきた人も美人さんばかりでよくわからない。この世界ではこれが普通なのだろうか？と思つてしまうくらいである。性格的には合いそうな気がしなくもないが

「おうおう、他の女たちがいる前でイチャつくなんて、おめえやるじゃね〜か」

「こらこら、宝？、お二人の邪魔をしてはいけませんよ。この後御二人は人には言えないような、あ〜んな事や、こ〜んな事をするのですから」

「あんな事やこんな事？・・・プッシュウウウ！！」稟が妄想で鼻血を飛ばした。死因はおそらく出血によるものだろう。将来それが原因で死ぬ気がする

「全く稟ちゃんは妄想が逞しいですね〜。ほら、ト〜ン、ト〜ン自分で妄想させといてなかなかひどい」

「それじゃ、お元気で」

「うむ、また会おう！」璃人は完全に二人を無視して別れて、その後星が稟を背負い別の道に歩いて行った。

第8話 オレもしかして

星さん達と別れて今は陳留に向かっている。此処でのんびり料理でもやって暮らせればいいかなと思っただけ

「兄ちゃん、金目の物を置いてきな」後ろから声をかけられた。今日はよく賊に会うなと思いつながら後ろを振り返ると

「あれ？」

「！？お、おめえは……」先程襲って来た賊がいた。チビとデブもいたがこちらを見た瞬間固まっている

「それで、またやりますか？」

「へっへへ……あばよ」余裕の笑みを見せたかと思っただら部下二人を置いて逃げた。あ、あのオレと似てるなと思ってしまった。部下の方も、待つてくたさい兄貴とて言いつて追いかけて行く。チビの方はまだ良いがデブの方は辛そうだ。ダイエツトしとけよ。

それで振り返って、陳留を目指そうとすると前の方から砂塵が見える。明らかに馬に乗った軍隊がこちらに向かって来たようだ。絶対にこのまま此処にいたら問題になるので脱兎のごとく逃げ出し近くの森の中に逃げ込んだ。山での生活はもう慣れたので、これで逃げ切れる。ほとぼりが冷めてから陳留に向かえば良いだろう。

・
・
・
軍隊が通り抜けるような音がしたのでこれで陳留を目指せる。でも、その前にのどが渴いたので近くの川で水を飲む事にする。これだけでかい山の中なら川くらい見つかるだろう

・
・
・
見つけた。水の音が聞こえたのでそれを頼りに探すと意外と簡単に見つかった。……で水分を補給。手で掬ってのどを潤す……うまい。もう一杯……飲もうとした時、手の中の水が濁っている事に気づき、泥でも混ぜちゃったかな？と思ひ、いったん捨てて綺麗な所を探そうとして辺りを見ると赤く濁っている……これ血じゃね？

・
・
・
オレ血飲んじやった？
……

「おええええ」口の中のものすべて吐き出す。まさか自分が飲んだ水に血が入っているとは思わなかった。

「クソっ、一体誰だよ！川の中に血なんて流してるやつは！おかげで飲んじやったかもしれないだろ！いや、でもさっき飲んだ時は血の味はしなかったから大丈夫なはず！でも……。ああもう！どこのどいつだ！」血の流れて来た方を見て相手が怖くなさそうなら、文句言ってやるうと思ひ川を上流の方に上っていくと

一人の女性が賊に襲われていた。しかも、襲っている者の中には、先程逃げた行ったやつがいる。あの女性が斬り殺した賊の血が流れしてきたのか……鬱だ。

完全に落ち込んでしまいなんかどうでも良くなってしまった。最初は飲んでないと思いつつもとしてけど、何か飲んでしまったような気がしてきた。そう思うと胃の中がかなり悪くなる。やべえ…吐きそう

窮地に追い込まれている女性をしり目に、一人落ち込んでいる璃人。そんな璃人に気づいた賊が向かってくる。

「兄貴！さっきのやつですぜ！この人数なら今度は勝てますぜ！」
チビが兄貴と呼ばれる髭に言う。

「バカ野郎！オレ達みたいな新人を手伝ってくれるわけねえだろ！まずは、あの女を生け捕って、お零れに預かるんだよ。あの野郎の事はとりあえずほっとけ！」先程の様子から大した賊ではないと思っていたが、どうやら新人だったようだ。璃人の無駄に良い聴覚はその会話を捕えてしまった。だが今はどうでもいい。いま重要なのは、人の血を飲んだのか、飲まなかったのか、その点に尽きる。他はどうでもいい。

まず考える…

血の味はしなかった、それに最初に川を見た時は赤くなっていなかったはず。二杯目に移ろうとした時に気づいた訳だが、この間もの数秒。川の流れから判断して一瞬で染まるほどの速さではない。考えられる結論は二つ。

一つ、すでに川に血が流れていたが、まだ璃人のもとには届いておらず、一杯目を汲んだ時にはまだ大丈夫だった。

二つ目、最初から血が流れていた事に気づかなかった。

……… ……いくらなんでもこれはないだろう。普通気づく、だから大丈夫！

「そうだよ、オレは飲んでない！」

「その少年、良ければ助太刀願えないだろうか？弓を持っていると言う事は、武があると見える。今の状況では少々きついため、手を貸してくれないか？私がやられたら次は君だぞ？」なんか近くで声が聞こえる

・
・
・
辺りを見渡すと賊に囲まれていた。そして話しかけてきた女性は先程襲われていた女性。こちらが考え事をしている間に、近付いてきたらしい。そのせいでこっちまで賊に囲まれているわけだが……

「あなたの所為で、オレは最悪の気分になったんですけど、この行き場のない気持ち、晴らさせてもらえますか？」

「?・・・何の事だかわからないが、ここを無事に抜ければ、私にできる事なら善処しよう。少年、何人ならいける?」

「約束ですよ。オレは速射がそこまで早くないので、近場の人は任せます。それ以外を受け持ちますんで」

「了解した。私はここの奴らを片付けよう」弓を置き剣を構える青髪さん

「任せましたよ?オレが死んだら、あなたの所為です」
「そちらこそ、ぬかるなよ少年。私の命はお前に懸かっているからな?」

璃人が弓を番え、青髪の女性が斬りかかった。

青髪サイド

私は、今賊に襲われている。最初は華琳様や姉者と賊の討伐に出たのだが、先に逃げられてしまい、空振りに終わった。その後陳留に帰還する事になったが、どうせ、外に出たのなら弓の鍛錬でもしようと思いい山で狩りをする華琳様に言っけて許可をもらった。姉者も同行したがっていたが、姉者いると、騒がしくて動物達が逃げてしまつので、色々言っけて誤魔化した。自分が褒められて嬉しそうにする姉者はやはり可愛い。

山の中で猪などを探していたが、見つからず、休憩がてら近くに有った川に行く。そこでしばらく休んでいたのだが、物音がした。辺りに気を配ると、人の気配。しかも、かなりの数。賊か？

やはり相手は賊だったようで、こちらを見るなり、気持ち悪い目で見回してくる。こんな奴らに見られるのは耐えられないので、先頭にいたやつに矢を放ち殺す。その光景に怒った賊たちが一斉に襲いかかってきた。最初は矢で応戦していたが矢が心もなくなってきたので剣に変える。迫ってくる賊を切り殺し、次の動作に備える。斬り殺した賊が川に突っ込んで川を汚してしまったが、今は気にしない。

賊の数は一向に減らず、手をこまねいていると、少し先に少年を見つけた。これはまずい。近くの村人が遊びにでも来ていたのだろうか？しかし、この状況ではあの少年が見つかれば殺されてしまう。私の手の届く所に置かなくては

とりあえず、少年のもとに来たが何やら考えているらしく、こちらに気づかない。しかし、嬉しい誤算があった。ただの村人だと思っていた少年は弓を持っている。それもかなりのものだ。見た感じはパツとしないが、それでもそれなりの武を持っているだろう。ここは少年に助力を願う

「そうだよ、オレは飲んでない！」

「その少年、良ければ助太刀願えないだろうか？弓を持っていると言ふ事は、武があると見える。今の状況では少々きついため、手

を貸してくれないか？私がやられたら次は君だぞ？」何か変な事を口走っていたが、気にせず頼んでみた。しかし、帰ってきた返事は予想外だった

「あなたのせいで、オレは最悪の気分になったんですけど、この行き場のない気持ち、晴らさせてもらえますか？」

「？・・・何の事だかわからないが、ここを無事に抜ければ、私にできる事なら善処しよう。少年、何人ならいける？」私が一体何をしたのだろうか？此処に賊を引き連れてきた事か？しかし、少年はそれよりも前から考え事をしていたはず、ならそれではない。一体・・・でもそれは置いておいて少年には後で償うとして今は此処を切り抜けるのが先決。少年にどれくらい大丈夫か聞いてみると、意外にも周りの敵は任せると言ってきた。

容姿からは想像できないが、なぜか不思議と安心感がある。なら、この少年に懸けてみようと思う。自分が死んだら私の所為？フ、それはお互い様だ。私が死んだら少年の所為だからな？。まだよくも知りもしない少年に背中を預けて賊に斬りかかりに行った。姉者や華琳様が聞いたら怒るだろうか？

- - - - -

青髪さんが前衛で戦っている間に、オレは賊を射殺す。青髪さんは星さん程強くはないが、冷静で自分の周りを常に警戒しながら戦っている。自分が射線上に入らないように注意し、それで尚且つ相手の数を削り、オレの所まで近付けさせない。この人と将棋勝負した

ら面白そうだな」

青髪さんの頑張りがあつてほぼ賊が全滅した（6割ぐらいは璃人が倒したのだが、本人にその自覚なし）。残った数人の賊はちりじりなつて逃げた。逃げるくらいなら、襲つてくるなよ！ビックリするじゃないか！

「少年、今回は世話になつたな。いや、命の恩人に少年とは失礼だな。私は性を夏候、名を淵、字を妙才という。良ければ貴殿の名前を教えてはくれないだろうか？」

なんと礼儀正しい人だろうか、これで、先程の事件がなければかなり好感が持てたのに……

「性を黄、名を恩、字を子苑と言います。恩人云々はお互い様なので、気にしないでください。こちらこそ、助かりました。それと敬語は結構です」

「いや。元々、こちらが巻き込んでしまったようだからな、すまない。……そういえば私に何か言つてなかつたか？」

「ええ、その事なんですよ。その事さえなければ、あなたの事はすごく好感が持てたのですが……」

「良ければ話してくれないか？恩人を不快にさせてしまったのなら、謝りたい。」

「ええ、大したことではないんです。川で水をね、そう、水を飲むうとしていたんですよ。最初はきれいな水を飲んでたはずなんです。・・・が、二杯目を飲もうとした時、その水が濁っている事に気づいたんです。何で濁っていたと思いますか？・・・答えは、人の血です。あなたが斬り飛ばした賊の。」

「それは・・・すまない事をした。あの時はそこまで考えが回らなかったからな。」

「別にあなたが悪いわけではないんですけど、この行き場のない気持ちはどうしたらいいでしょうか？一応自分では飲んでないはずなんです。」

「・・・侘びと言う程ではないが、口直しに「飲んでいません」・・・命を助けてくれたお礼に料理を振る舞おうと思うのだが、どうだろうか？一応、主からも認められている腕前だ。不味くはないと思うのだが」「こちらの事情を察してくれるあたり、本当に良い人である。」

「主と言うと、あなたはどこかのお城に仕えている武将さんですか？」

「陳留の勅史である曹操様に仕えている」

「ああ、ここら辺では評判がいいですよ。でも、城に行くのはちよつと・・・」

「ん？何か気になる事でもあるのか？華琳様は素晴らしいお方だから心配する必要はないぞ」

「曹操さんって女性の方なんですか。城はなんか危ない感じがするじゃないですか。ほら、お偉いさんとかに無礼を働いて死刑とか言われたら嫌なんですけど。というより夏侯淵さんもお偉いさんですよね？主の真名を受け取るくらいには。オレって罪になります？そうなたら全力で逃げますけど…」

「フフ、先程戦っていた男とは同じ男に思えんな。大丈夫だ私はそんなことしないし、華琳様もそんな事は許さない……と思う」

「最後のがすごく心配なんですけど…」

「華琳様は気分屋なところがあるから、イライラしてる時に無礼を働いた者がいたら。だが、今は大丈夫なはずだ」死んじゃうんですか！？無礼を働いたらやっぱ死んじゃうんですか！？

「今回は巡り合わせが悪かったと言う事でお礼の件はなかった事にしてもらいたいです。というか勘弁してください。まだ死にたくないです！」自分の首が飛ぶ姿が想像できてしまい、もう逃げの一手しかないと悟る璃人

「本当に先ほどとは別人だな。大丈夫だ、私の客人扱いなら華琳様も酷くは扱わないだろう。それに恩人に何もせずに戻したら私の方が叱られてしまうからな、私の顔を立ててはくれないだろうか？」

「いつそ、誰とも会わなかったというのはどうでしょう？」

「私に嘘をつけと言うのか？それはできん相談だな。華琳様に嘘を

つくなどありえん話だ」自信たっぷりと言つそれくらい曹操つて人を崇拜しているのだらう。

「なら仕方ないですね。ご相伴に預からせていただきます。でも、何か不審な気配を感じたら速攻で逃げますんで。あとこの弓は大事な物なので持っていていいですか？いったん預かるなんて言われなくても嫌なんですけど」

「まあ、そこは城についてから、華琳様に頼んでみよう、大丈夫なはずだ。ただ、矢の方は預からせてもらうぞ？」

「そちらは別に構いません」

「では、行こうか」青髪さん（心の中ではこう呼んでいる）について行き城を目指す。でも　あなた馬有ったんですね？オレは歩きですよ、この野郎！トボトボと馬の後ろをついて行った。ポニーテイル（馬だけに）が揺れているのがなんかムカついた。

.....

陳留到着

この町は随分と活気に満ちている。治安の良い証拠だらう。オレは青髪さんの後に続いて城の方を目指す。途中青髪さんに話しかけてくる町民がいたが、青髪さんが此処の人達に慕われている事がよくわかる。

城の入口で待機。今青髪さんが曹操さんに聞きに行っている。門番の人と少し談笑しながら、青髪さんの帰りを待つ

「許可が下りた。行くぞ、子苑」随分と早い到着で。それと青髪さんはオレの事を子苑と呼ぶ。何か黄恩とは呼び辛いらしい

城の中を青髪さんの後ろについて歩く。キョロキョロしながら歩いていたので青髪さんに怒られた。シャキツとしてるだとき。何か城にいと落ち着かない。昔から周りの目を気にしていたから、すぐに視線を追ってしまう。これは姫さんの所でもそうだったが、慣れないもんだ。やっぱ、森の中が一番良い

・
・
・

王座の様な所に到着

「秋蘭です。華琳様宜しいでしょうか？」

「入りなさい」許可が下りたようだ

「くれぐれも失礼のないようにな。」

「もちろんです。いざとなったら全力で逃げてやります！」

「ハア〜そんなこと高らかに宣言しなくていい。何もしなければ大丈夫だ」

青髪さんが部屋に入り、続いて部屋に入る。姫さんの所よりは小さいが十分な大きさの広間だった。前方を見ると、金髪の女性と、黒髪の女性がいた。なんか、黒髪の女性に関してはこちらを睨んでい

るような気がするんですけど 逃げよう

「待て、逃げるな。それと姉者あまり睨まないでやってくれ、こいつは見ての通り少し臆病なんだ」逃げようとして瞬間、青髪さんに肩を掴まれ防がれる。しかも、黒髪の女性は青髪さんのお姉さんらしい。姉？どちらかというと、青髪さんの方が姉のような気がするけど…

「お前考えている事が顔に出てるぞ。れっきとした姉だからな。私の方が妹だ」

「失敬。」

「で、あそこに居られるのが我らが主曹操様だ。しっかりと挨拶しろよ」

「はい。」金髪さんにの近くまで行って抱拳礼の形を取る

「お初にお目にかかります。性を黄、名を恩、字を子苑と申します。この度は夏候淵殿のお招きにあずかり、参上しました。どうぞ、よろしく願います」

「我が名は曹操。私の部下を救ってくれたようね。礼を言うわ。秋蘭には礼をさせるから、今日は此処に泊って行きなさい。」

「ありがとうございます。」礼をして、すぐに青髪さんの後ろに行く。金髪さんよりも黒髪さんの殺気がヤバイ

「春蘭やめなさい。秋蘭の命の恩人なのよ」

「そつだぞ、姉者」

「でも、華琳様、この男が秋蘭を助けたとは到底思えません。黒髪さんが縋るような目で曹操さんを見る。何か変な空気」

「確かにそうね。でも秋蘭が私に嘘をつくわけないし、そんな意味もない。そうでしょ、秋蘭？」

「は！」

「弓の使い手らしいわね。黄恩とやら、試しに腕を見せてもらえないかしら？」

やはりそう言う空気か。なんとか誤魔化さなければ…

「ええ、大変申し上げにくいのですが、私は狩り専門の弓使いなので、期待に応えるような腕は持ってはおりません。今回は夏侯淵さんが、近場の敵を相手してくれたので、その隙について狙っただけです。相手が動いてないなら当てられますが、動いていたら無理です」実際動いていようがいまいが賊相手なら関係ないのだが、ここで下手に本当の事を言うと面倒な事に絶対になる。かと言って全部ウソをついても青髪さんにバレる為、本当の様な嘘を話す

「でも、それじゃ、狩りなんてできないでしょ。止まっている動物の方が少ないわ」そう来たか、なんてもっともな意見、しかし言い訳などすでに考えてある

「それは、動物が他の所に注意が向いてる時に狙うんです。餌を捕っている熊なんかは狙い目ですね。矢を当てるのが難しいのは、対

象が動いてるからではなく、その動きが読めないからです。だから、相手の動きが制限されるところを狙えば良い。例えば死んだ動物の肉や、予め買っておいた肉を置いておき、そこに群がった所を狙うんです。小さな餌で大物を釣る。人類の英知のおかげですね。「実際は、そんな事はしない。絶で気配を経って射程距離まで近づいたら、後は射るだけ。」

「人類の英知ね、面白い事を言うじゃない。気に入ったわ、秋蘭食事の用意を。私も黄恩と食べるわ。」

「「え!?!」驚いたのはオレと黒髪さん

「わかりました。すぐに用意して参ります」そう言っつて爽快に去っていく青髪さん。

「……ちよつと待って!この場にオレ一人とか、何の虐めですか?むしろオレも厨房に行きたいツス!置いて行かないでください!カムバア!ツク青髪さん!オレを一人にしないで

「行つてしまつた」

「そんなに秋蘭にいて欲しかったの?なら呼びもどしてあげても良いけど、それだと料理が食べれないわよ?」

「何〜、貴様!まさか秋蘭のことを……」剣を抜いて近づいてくる黒髪さん

「ちよつと!何で剣を抜くんですか!?オレはただ、常識的な人が一人いなくなつた事に……」

「何々貴様！それは華琳様が非常識だと言いたいのか！」

「いや、むしろあなたです。というか、自分が非常識の中に入っていない事の方がビックリです」

「何を々々「春蘭」は、はい華琳様！」即座に曹操さんの声に反応する黒髪さん

「あなたは、私のどこが非常識だと思っているのかしら？」

「そ、そんな事は思っておりません。こ、こやつが…」

「異議あり！私は一人いなくなったと言っただけで、だれも、曹操さんを非常識なんて言っけません！」この黒髪さん勝手に罪をなすり付けようとしゃがった。そうはいかんぜよ！

「黄恩はこのように言っているけど、あなたは私が非常識だと思っただ訳よね々。さっ言っって御覧なさいな、あなたは一体私のどこが非常識だと言っのかしら？」どどん怒気を上げて行く曹操さん

「うっうっうっ」

「春蘭？」

「閨の時の攻め方とか？」ああ、それは悪手だ々。しかも、曹操さん百合なんですか？驚愕の事実が発覚した。全然知りたくなかったけど

「そう　春蘭、これから暫くの間、私との閨を禁止するわ！しばらく一人で慰めていなさい」

「そ、そんな、か、華琳様」何か泣き絶っている黒髪さん

「春蘭、私の言う事が聞けないの？」黒髪さんの顎に手を当てながら聞いている。何か後ろに百合の絵が見えるのは気のせいだろうか？具現化系か？

「い、いえ。」少し落ち込む黒髪さんだが、なんか嬉しそうである

「フフフ、良い子ね。ちゃんと反省したらまた呼んであげるわ」その言葉に嬉しそうな顔を浮かべる黒髪さん。なんか従順な犬のようだ

「は、はい！華琳様！」

そんなやり取りを二人で展開してオレとしてはすごく居心地が悪いのだった。

第9話 一体なぜこんな目に？

マジで居心地の悪いこの空間で待たされるなんてかなり辛いッス。いつそのこと手伝いに行つてきますとでも言えば良いだろうか？でもそれをする、黒髪さんが怒りだしそうな気がするんだよね〜

曹操さんはなんかこつち見てるし、なんとか視線を合わせないようになっているけど、話しかけられたらどうしよう。おお神よ、私を救いたもう。

「黄恩、あなたはなぜこちらを見ないのかしら？」もう神なんて信じねえ！願ったそばからこれかよ！

「ええっと、人見知りする方なので、人と目を合わすのが苦手なんです。」一応曹操さんの方を向く

「ふうん、その割には秋蘭と話せていたようだけど…」

「まあ、あの人は話しやすかったですし。」

「それは、私とは話辛いと言う事かしら？」若干の怒気が見える

「ええ、今もそうですけど、曹操さんと話すと黒髪さんが殺気を飛ばしてくるので」

「春蘭やめなさい。…それにしても春蘭の殺気を浴びて随分と平然としてるのね？家の兵士だって辛いはずなのに」なんか嬉しそうな顔をしている

「いや、実はかなり怖くてこれ以上は進めないんですよ。かなり、手加減してくれているようですが、それでも、オレには一杯一杯です。顔に出にくいのは気の性です。膝が震えまくっています」

「あなた本当に秋蘭を助けたの？」 呆れた顔をしてみてる曹操さん

「だから先程も言いましたように、夏侯淵さんがいたから何とかなつただけで、オレ一人じゃどうにもならなかつたですよ。夏侯淵さん様々ですね。」

「そうだろ、そうだろ、秋蘭はすごいやつだからな。うん、お前わかつているじゃないか」 黒髪さんが言う

「そうですよね？だから、そんな人に料理を作らせるなんていけないと思います。しかし、ここで断るのは夏侯淵さんに悪い。なので、オレも手伝って来て良いですか？一応旅してきたから、それなりに料理はできますし」

「おお、良いぞ。だが、秋蘭に迷惑を掛けるなよ。」 ちよろい、ゴン以上にちよろいな。これで、堂々とこの部屋から出る事が出来る。では、と言って去ろうとするが

「待ちなさい」 曹操さんに引き留められる。やはり、黒髪さんを避けてもこの人は無理だったか！

「なかなかの話の持つて行き方だわ。秋蘭を褒めれば春蘭が乗ってくるがわかつていたようね。私との会話から春蘭に相手を変えるの

も自然な流れだったし。…それで、あなたはどうしてここから出て行きたいのかしら？」バレてる！

「当然ね。部屋の中をキョロキョロ見ていたし、こちらを見ようともしない。さっとうして出て行きたいか言って御覧なさい」人の心が読めるのか？…ここは正直に言うべきか？下手な事を言っ
て疑われてもあれだし…

「いや〜ココすごく居づらいんですよ。お二人が仲のいいのはわかったのですが、子供のオレには刺激が強すぎるので、出て行きたいな〜と思っただけです」

「…ふ〜ん、まあいいわ。でも、あなたがここから出るのはダメよ。折角秋蘭が料理をしてくれているのだから、それを邪魔するのは無粋じゃなくて？」

「それもそうですね、では待たせていただきます。しかし、お二人の邪魔をするのも忍びないので端の方にいますね。」

若干疑われたようだが、青髪さんへの信頼度のおかげか、なんとかやり過ごせた。端に移動もできたし、いざとなったら、ここから逃げ出せる。

あの二人を見てもあれなので念の修業でもするか。念の方は出来ないが燃の方ならできる。とりあえず、点でもやっついていよう。

腰を落ち着けて、胡坐をかき瞑想する。最初は周りの音が聞こえているが、だんだんと音が消えて行く。聞こえるのは自分の呼吸と心臓の鼓動。この状態にまで行くとすごく集中できる。…zzzz

「黄恩、起きなさい」

「・・・は！」いつの間にか寝てしまったようだ。しかし、それほど時間が経っているわけではないだろう。

「座禅をしたかと思っただら寝てるなんてね」「ちょっと呆れている

「今日は色々あって疲れていたんですよ。ハハ」

「まあ良いわ。秋蘭の準備ができたから行くわよ。早くしないと折角の料理が冷めてしまうわ」

そうですね、と言って食堂に向かう。黒髪さんはかなりテンションを上げ、曹操さんはそんな黒髪さんを楽しそうに見ている。一人八つされた感はあるが、ここは仕方がない。早く行って食べてしまい、今日中にここを出よう。お金はあるのだから、宿くらい見つかるだろう。

食堂に到着

「夏侯淵さん、今回はありがとうございます。ご相伴に預らせていただきます。」

「そんな堅苦しくする必要はないぞ子苑。」

「いえ、曹操さん達がいるのに緊張しない方が無理ですよ。」

「それは私が邪魔と言う事かしら？」

「いえ、そんな事はないですけど。ほら、一介の庶民に城主様との食事なんて普通ありえないじゃないですか。だから、緊張しちゃうんですよ。だからと言って出てけと言っているわけじゃありませんからね。ただ、言葉数が少なくなるかもしれないし、緊張して味がわからなくなっちゃうかもしれないので、その点はご了承ください」

そうね、それは仕方ないわと言って向かい側の席に座った。黒髪さんはその隣。夏候淵さんはオレの隣に座る。女性3人に男一人、この世界に来て結構こういふ場面も増えたけど、やっぱり慣れない。

「では、頂きましょうか」

「頂きます」手を合わせて食べようとすると、なぜか、視線がこちらを向く。

「え〜っと、やっぱり曹操さんが食べるのを待った方が良いですか？すみません、常識がないもので」

「いえ、そうではないわ。その手を合わせて頂きますとはどういう意味なの？」ああ、この人にはない習慣か。そう言えば、どこ行っても聞かれたっけ

「ええっと、食材となった動物に対しての感謝の言葉です。食材である生き物の植物や動物の命を絶ち調理し、それらの命をもらってそれを食べる人間が自分の命を維持し生存することの感謝を表すために言う言葉と故郷で教わりました」

「そう、良い習慣ね。それじゃ頂きます」「」「頂きます」「」

他の人たちも、オレの真似をして頂きますをした。

皆が一斉に食べ始める。特に黒髪さんの食欲は半端じゃない。またたく間に、料理が無くなっていく。あれ〜これって一応オレのためじゃなかったけ？横目で青髪さんを見るがスマンと言ってているような顔をされた。まあ結構量もあるし、それを見越して作ったのだろう。

味の方は…うん、なかなかうまい。メンチとかに比べればまだまだだが、下手なお店で食べるよりはずっとうまい。惜しい所と言えばちよっとコツテリした物が多いと言う所。この世界で不思議に思っていたのだが、どうしてこんなに高カロリーの物を食べて、太らないのだろうかと疑問に思えて仕方がない。

「ごちそうさまでした」

「それもあなたの故郷の習慣？」

「はい。これは、料理を作ってくれた人や食材を調達してくれた人に感謝を表す言葉です。」

「そう…ごちそうさまでした」曹操さんに続いて二人も言う。

「夏侯淵さんは、この場合作った人ですから、お粗末さまでしたと言えは良いんですよ」夏侯淵さんは言われた通りに言う。すこし、疑問に思ったようだがまあ良いだろう

その後片づけは手伝い、一休みする。此処を出ようとしたが、曹操さんに阻止され、部屋を与えられて今はそこで横になっている。明日には出て行けるだろうと考え、寝ようとする、ドアの外から声をかけられた。この世界にノックと言う言葉はないらしい。家の実家では割と浸透しているんだけど…

「はい、どうぞ。」ドアを開けて入ってきたのは曹操さんと青髪さんでした。

「何かご用ですか？」

「用というわけではないのだけど、あなた内に仕官しないかしら？まさかのお誘い」

「武官ではないので遠慮させてもらいます。それにまだ旅を続けますので」

「そう、まあ今はいいわ。それと武官ではないと言っていたけど、あなたは一体何をしているの？」

「料理人ですね。それで今は修業中です。」

「・・・あなたが料理人ね、面白そうだから、明日何か作ってくれないかしら？勿論材料はこちらで出すわ。」

「明日ここを出るはずなんですけど…」

「良いじゃない。その後出ても遅くはないわよ。」

「修業中の身なので、美味しくもないかもしれませんが、それで、何

か罰とか有ったら嫌なんですけど…」

「そんな事はしないわ。私はただ、あなたの料理を食べてみたいだけ」

「・・・わかりました。それでは、曹操さんと、夏侯淵さんと黒髪さんの好きな食べ物と嫌いな食べ物を教えてください。」

「そういえば、なぜお前は姉者のことを黒髪と呼ぶのだ？」実はあなたの事も黒髪さんと呼んでいるとは言えない。

「だって、名前知らないですから。自己紹介をしてくれたのは、曹操さんと夏侯淵さんだけですから。」

「そう言えばそうね、明日させるわ。・・・それで、私達の好みを教えて欲しいようだけど、料理人を目指すならそれくらいわからないといけないのではなくて？」なんか挑発的な笑みを浮かべているが、そんなのわかるわけない。そもそも、人の顔を見て料理する事の方が少ないだろう。しかも、あつちは好きな物を注文してくるのだから、こちらがそれを把握する必要はない。だけど、この人に言っても無駄だろうな」

「まあ、まだ未熟者です。それにここで見栄を張って嫌いな物を出しても、相手に失礼なので、教えてもらえませんか？曹操さんだつてわからない事が有ったら聞くでしょう？聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥って言いますし。」

「聞くは一時の恥、聞かぬは一生の恥…初めて聞いたけど、なかなかいい言葉ね。あなら結構博識なのね。本当に一庶民なのかしら？」

「父が昔文官の仕事をやってしまして、それなりに学んだだけですよ。故郷では割と皆知っている言葉です。」はい嘘。こんな言葉この国で知っている人はいない。だけど、こう言っておけば、まあ大丈夫だろう。

「興味深いわね。あなたどこの出身なのかしら？」

「益州です。まあ森や山ばっかで何も無い所ですよ」

「益州ね・・・あんまり良いうわさは聞かないけど。確か、劉璋の配下の武將の嚴顔と黄忠は有能だと聞くけど、劉璋自体はそうでもないとか。そう言えば、黄忠の性と同じね、これって偶然かしら？」ニヤッと笑って聞いてくるが、別に話しても問題ないが、下手に武將の子供が他州にいるとなると問題になるかもしれないので、ここは黙っておく

「性が同じだけです。意外とありふれた性なので偶然同じだったんじゃないですか？」顔には出さず、嘘をついて見せる

「まあそうね。もし黄忠の息子ならこんな所で旅をしているわけないものね。」

「ええ、全くその通りです。それで話を戻しませんか？皆さんの好みを・・・」

「悪かったわね。私や秋蘭は特に苦手な物はないわ。ただ、辛すぎるのは舌に悪いからあまり好きではないけど。春蘭は基本何でも食べるから平気よ」

「わかりました。明日は精一杯作らせて頂きます。」抱拳礼をして、

頭を下げる

「ええ、楽しみにしているわ。それと、秋蘭はまだ話が有るみたいだから、残して行くわね。では、黄恩お休みなさい」

「お休みなさい曹操さん」曹操さんが出て行って部屋では二人きりになった。すると、夏侯淵さんが徐にお酒を取り出す。

「オレお酒あんまり好きじゃないんですけど…」

「お前も良い歳だろ。酒くらい飲めないと大変だぞ。それに、料理にだって酒を使うし、店を開こうと思ったら酒だって必要になるだろう？飲めといた方が良いぞ」

「…わかりました。オレもそろそろ元服を迎えるので、大人への一歩として飲ませていただきます。」

「元服？お前歳は幾つだ？」

「今14で、もうすぐ15になります。」

「そうか、その年で旅をしているのか…すごいな」

「皆さんだって、オレと同じ頃には戦場を経験していたんでしょ？十分オレよりはすごいと思うんですけど…」

「確かにそうだが、私達は一人と言う事はなかったからな、その点で行けばお前は一人旅だ。立派なものだよ」

「なんか恥ずかしいですね、年上の人に褒められるのは…それじゃ
元服のお祝いに一杯付き合ってもらえますか？」

「フフ、もともと私が誘ったんだがな、まあ良いだろう。ほら、酌
してやるから湯呑みを出せ」

「何か美人さんに酌してもらうのは気分が良いですね。ああ、そ
れくらいで結構です。あまり多すぎても飲めないのです。では、こち
らも」青髪さんに注いでもらい、今度は注ぎ返す。それで、乾杯し
て酒を飲む。…やっぱ、この世界の酒はうまくない。オレが作った
方がまだマシだ

「なんだ、だらしないぞ、姉者なら樽を全部飲んでも足りんだろう
な」

「…そう言えば良いんですか？いくら子供とは言え、夜中に男の部
屋にいるなんてあの人に知れたら…」

「危ないだろうな…」

「ですよね」「お前が」…やっぱり？あの女確実にあなたの事、溺
愛してますもんね。これ飲んだら、出て行ってもらえますか？ま
だ死にたくないもので」璃人の顔はかなり真剣だ。目が本気だもの

「ホントにあの時とは別人だな。心配するな、姉者はもう寝ている。
華琳様との閨を禁じられているから、すぐに寝てしまったぞ」

「最初に会った時から思っていましたけど、やっぱあの二人そっち系
の人達なんですね。もしかして夏候淵さんも？」

「ん？まあそうだな。華琳様や姉者の事は好きだな。」3歩くらい下がる。

「おいおい、そんなに引くな。別に男に興味がないわけではない。ただ、近くに良い男がいなかったただけだ。華琳様もきつとそうだぞ。まあ姉者は」

「女にしか興味がないと」どうしよう、黒髪さんと会った時対応に困るな。女にしか興味のない人に出会った事はない

「ん〜というより、自分より強い男でないと認めないだろうな。」

「そんな人いるんですか？殺気からして尋常じゃない気がするんですけど…」あれはキルアが本気モードになった時くらいの殺気だ。やってみないとわからないが、今のオレだと念を使っても勝てないだろう。緋の目を使ってなんとかぐらいたろうな。この世界の人達はそれくらいおかしい。前の世界の腕力とこっちの世界の腕力はどうも合っていない気がする。星さんだってそこまで腕力が有るわけじゃなかったのに人を飛ばしていたし。さすがにキルア程じゃないだろうけど…」

「まあいないだろうな、今のところは。」

「世継ぎがいなくなりますよ」

「確かにそうだが、姉者に勝てる男がそうそう出てくるとは思えんのだが…。子苑試してみるか？」

「何バ力なこと言っているんですか！勝てるわけないでしょう。オレは料理人であって武官ではないんですから・・・」

「しかし、料理人と言うにはなかなかの弓の腕前だったぞ、私でも敵うかどうか」ちよつと含みのある顔をする青髪さん

「もう酔っぱらったんですか？オレが勝てるわけないじゃないですか。酔ったんなら部屋で寝た方が良いでしょうよ」

「これくらいで酔っているわけないじゃないか。」

「酔った人はみんなそう言うんです。ほら顔だって赤くなっていないですね」

「酔ってはいないからな。・・・そうだ、お前に私の真名を預けよう。お前は命の恩人だからな」

「随分と唐突ですね。本当に酔ってませんか？」

「ああ、酔って真名を預けることなどせんよ。私の真名は秋蘭と言う。今回は助かった。」秋蘭さんが頭を下げる。この人も結構律儀な人だ

「それはお互い様なのでいいですって言ったじゃないですか。それじゃ、オレも真名を預けます。オレの真名は璃人です。」

「うむ、確かに受け取った。それでは、私もそろそろ・・・」少しよるめく秋蘭さん。とつさに手を取って倒れるのを防ぐ。

「もうう、やっぱり酔ってたんじゃないですか。気をつけてください」

い……殺気?!」扉の向こう側から殺気が

ドアが開くとそこに立っていたのは……鬼神。目の前にいる敵をすべて葬りそうなぐらいの殺気を放つ鬼がそこには立っていた。

「ええつと、これは……オレが説明すると大変そうなので、秋蘭さんお願いします」

「秋蘭 だと?き、貴様、秋蘭の真名を呼んだな……。それに、秋蘭を毒牙に掛けようとは……許さん!」

「待て姉者!これは誤解だ。私が酔った所を璃人が助けてくれたんだ。それに真名に関しては、私が預けたんだ、だから誤解するな」

「秋蘭は黙っている!その男がお前の夫に相応しくない事を私が証明してやる!」

「何その急展開!?誰が誰の夫になるんですか!?しかも黒髪さん寝てるって言うてたじゃないですか!秋蘭さん」

「ああ、確かに寝ていたが、私の大切な妹が部屋にいない事に気づいてな、探してみたら案の定だ。今まさに襲われようとしていたからな、探し回って正解だった。貴様覚悟はできているだろうな……」

「嘘!?この状況をどう見たらそんな事に!??」

「すまん、どうやら姉者は寝ぼけているらしい。」

「なんで寝ぼけてる人が、武器なんて持っているんですか！」

「それは姉者だからとしか」

「なんかすごい納得です！・・・しかし、この状況なんかかなりま
せんか？」

「無理だな。私は問題ないだろうが、お前は・・・」

「何それ！助けてくださいよ！俺こんな所で死ぬのなんて御免です
よ！」

「しかし・・・」

「うるさああああい！！！！」バン！と曹操さんが勢いよくドアを
開けて入ってくる

「もう！何騒いでいるのよ！うるさくて眠れない・・・あら、どうした
の春蘭、そんな所で寝て。」曹操さんが開けたドアによって春蘭さ
んが気絶した。さすがのあの人でも不意打ちには勝てなかったらし
い。

「ああ、助かった。曹操さんグツジョブ！」サムズアップして曹操
さんに言う

「ぐっじよ ぶ？何よそれ。というより、この状況はどういうこと
なの・・・秋蘭」

「は！実は」秋蘭さんが説明に入る

・
・
・
「そう言う事ね。理解したわ」さすがは大将！これでオレの命は安泰だ

「つまり。秋蘭を賭けて春蘭と勝負がしたいと 黄恩あなたもなかなかやるじゃないの。惚れた女のために命を懸けるなんて。良いでしょう、秋蘭をそこらの男に渡す気はなかったけど、春蘭に勝てたら考えましょう」

全然わかってないよ！どこをどう解釈したら、そんな事になる訳！？オレがいつ惚れたなんて言った！

「華琳様いくらなんでもそれは 。姉者に勝つなんて」

そこじゃないよ！まずは惚れた云々の所を否定してください！何戦う前提になっているんですか！しかも、良いんですか？自分が賭けの対象になってますよ

「曹操さん、それはあまりにも・・・ほら秋蘭さんにも悪いですし」

「へえ、秋蘭の真名までもらったんだ。秋蘭もそこまで見込んでいるなんて、フフ、明日は楽しみね。それじゃ、私は寝るからまた明日。」爽快に去って行った曹操さん。うそ、撤回させてもらえないんですか？

「スマンな璃人。話がこじれてしまった。姉者には私から言うておくからな」

「そうですね、秋蘭さんが言えば「殺さないように」と「そこじゃないよ！まずは戦う事を止めさせてください！オレ庶民、あの人武官！おかしいでしょう！」倒れている黒髪さんを指さしながら言う

「無理だな。華琳様が決めてしまった以上後には引けない。諦めてくれ」肩にポンと手を置かれ、そう言われる

うそ・・だろ。そう立ちつくすオレの横を秋蘭さんが通り過ぎて行き黒髪さんを担いで部屋を出て行くのだった。

第10話 璃人の全力？

昨日の内に脱走しようと思ったけど、逃げた後のリスクの方がヤバい気がして思いとどまった。黒髪さんが、ず〜と追ってくるなんて悪夢以外の何物でもない。ならオレに許された選択肢は勝つしかない。ハハ、なんて無理ゲー

とりあえず、朝の朝食を昨日の曹操さんに言われた通り、用意する。
ミソテリアス不思議な冷蔵庫から味噌を取り出し、まずは味噌汁を作る。具はジヤガイモと玉ねぎと卵。豆腐とワカメが良かったのだが、生憎ワカメがなく仕方なくこちらにした。

同時に魚を焼いていく。なぜかサワラしかなかったので西京味噌につけて焼いていく。あとはオレが漬けたお新香、特にきゅうりの出来はなかなか良い。ホウレン草の御浸しでも良かったが、ホウレン草がなかったのでやめた。最後にご飯を炊いて出来上がり。

「お待たせしました。どうぞお召し上がりください」

ああ、もしかしたら、これが最後の食事になるのか・・・昔、美術展でみたな、確か 最後の朝食？なんか違う気がするが、心情的には正にそれ・・・別に裏切り者と言うわけではないけれど・・・

「あら、これは何かしら？」

「それは漬物です。作り方は秘密です。」

「璃人これは？」

「お味噌汁ですね、味噌は豆板醤とは少し違う作り方ですが元は一緒です」この世界では醤油や普通の豆板醤はあるのに味噌はない。まあ元の世界でもジャポンにしかないものだから当然と言えば当然なのだが…

「おお、黄恩、この魚はうまいぞ！ただ、もう少し量が有った方が良いのだが…」この人は本当に美味しそうに食べる。作っている側からすれば、嬉しい事なのだが

「春蘭、食べ過ぎるとこの後の勝負が辛くなるわよ？」

「そ、そうでした！？まさか、もう勝負が始まっていたとはな、黄恩やるではないか！」

ハハハと笑っているが、こちらはそれどころではない。生きるか死ぬかの問題なのである。

「黒髪さん、やっぱりやめにしませんか？ほら、オレ料理人だし」

「む、そう言えばお前に私の名を覚えてなかったな。いいか、心して聞け！私の名は夏侯惇元讓。それとその提案は受け入れん。秋蘭が欲しいなら、私に勝てる程の男でないと！お前の料理は確かにうまいが、それだけでは妹を任せる事はできん！」

「いや、料理人なんで、料理が美味ければ問題ないのでは？そもそも妹さんを欲しいとは一言も言っていないんですけど」

「何だと！？貴様、秋蘭では不服だとも言うのか！私の自慢の妹だぞ！何が不満が有ると言うのだ！？」

「強いて言うなら周りの人ですかね」

「なぐに、それではまるで我々に問題があるみたいではないか！」

「実際そうじゃないですか。人の話聞いてくれないし、料理人に勝負をしかけるし」

「そのどこが悪い。秋蘭の夫となるからには、私を倒せる程のものではなくてはならん！」

「妹さん、一生嫁には行けませよ」

「あら、それは秋蘭を自分が娶るから、他には行かせないという事かしら？」きつと曹操さんの頭の中はすごい事になっているのだから。なんたってあの髪だし

「どうしてそういう解釈になるのか甚だ疑問ですが、もういいです。当事者の秋蘭さんはどう思いますか？」

「お前が姉者に勝てるとは思えんが、骨は拾ってやる。」

「賭けの対象になっているのに随分とのん気ですね」

「ああ、お前が勝つても私としては問題ない。別にお前の事は嫌いではないからな。もう少ししっかりしてくれと良いのだが…。それに姉者に勝てるようなら、こちらから頼みたいくらいだ」

「一体オレに何を期待しているんですか？夏候惇さんに勝てるわけないじゃないですか。それとそんな損得な結婚は嫌です」

「なぐに私が勝てんだと！？貴様、よく言っただぞ。完膚なきまでに叩きつぶしてやる」

「戦う前に勝利宣言　やるわね黄恩」この人笑っている。絶対わかって言ってる

「夏候惇さん、が、勝てないんじゃないかと夏候惇さんに、勝てないんです。ちゃんと聞いてください。」

「知らん！さあ飯も食ったしいざ尋常に勝負だ！」

「もうやだ。」この人達は全く話を聞いてくれない。ハアと夕メ息をついて夏候惇さんについて行くのだった。

.....

訓練場に着いてしまった。・・・でもよくよく考えるとどうして戦わなければいけないのだろうか？軽くやって負ければ：黒髪さんの方を見ると大剣を素振りしている。　やっぱ模擬刀とかは使わないのね。　：つまり、わざと加減すれば：死あるのみ　嫌だ！　なんでこんな事に　クソ！意地でも生き残ってやる！

「すみません、防具取って来ていいですか？」真剣でやる以上これをつけないと死ぬ

「あら、弓で戦うのではないの？」曹操さんが聞いてくるが

「あんな剣持っている人にこんな場所で弓なんて使ったら一瞬でやられちゃうじゃないですか。だから籠手と脚絆を使うんです。生身で剣なんて受けられませんし」

「へえ、無手で戦うのね。いいわ、準備しなさい。秋蘭あなたの夫候補はどうやら本気でやるそうよ」

「……」何も言わないが心配そうな目で見てくる

その視線を背に防具を取りに行った。

・
・
・
・

準備完了。この籠手と脚絆は旅の最中にゲットしたものでなかなかの業物である。どちらとも攻撃と防御の両面に使えるので熊と弓なしで戦った時かなり使えた。あの時は、修業のつもりでやったのだが思いのほか爪が危なかった。

「こちらの準備は万端だ。」

「こちらはまだですね。もしかしたら一生出来ないかもしれません。できることなら一生整いたくない。」

「両者良いようね。それでは始め！」曹操さんが審判してくれるよ。うだが、どうして話を通じないのだろうか？そんな事を考えていると黒髪さんが突っ込んでくる。……考え事をしている暇はなさそうだ

「でえええりやああああ！！」大剣を振りかざしそのまま下ろす。

ガキーン

籠手でガードしたが

「（お、重い！なんて馬鹿力）」その重さに耐えられず、膝が沈む

「おおなかなかやるではないか！この一撃で終わると思ったのだが」
そう言いながらも押してくる

「それって…オレの 人生も 終わっちゃうじゃ ないですかああ
ああと！」膝に力を入れ押し返す。なんとか弾けたが、やっぱ念
の抜きじゃ、勝てない というより生きられない。

堅！ 一瞬にして体の周りをオーラが包む

「ん？何か変わったな。お前もやる気になったようだな！だがその
程度の闘気では私には勝てんぞ！」オーラをその程度で済まします
か、一応オーラで人を殺せるんだけど、この人には関係ないらしい
というかこの人無意識にオーラ使っているし！この世界では気とい
うらしいが、物は違うけど似たものだ。それを無意識に扱うなんて
…天才か？敵顔さんも使っていたしな、何かこの世界の人の才能は
ズルイ。ゴンやキルアがたくさんいるみたいだ。

黒髪さんの怒涛の攻撃は続く。袈裟切りからの返し切り。避けても
こちらが懐に入るまでに剣が戻ってくる。かと言って下手に弾くと
腕は痺れるし、態勢が崩される。キルア技借りるぞ

「肢曲」無音歩行術の応用で相手に残像を見せる術。これはキルアに見せてもらって真つ先に覚えた。主に逃げるために。だから、相性はかなり良い

ステップに緩急をつけながら接近していく。黒髪さんでもまだ反応しきれていない

「疾！」黒髪さんが残像を切った瞬間に懐に入り込み腹にパンチを入れる。堅でやっているから、当たれば相当なダメージだが相手も気を使っているので、死にはしないだろう

ゴン！

「甘いわ！！」

「嘘！？」完全に入ったと思われたパンチが防がれた。パンチが体に届く前に膝で蹴って軌道をそらされた。この人剣士じゃないの？

「良く躲せましたね。決まったと思ったのですが…」

「私も驚いたぞ。まさか、貴様がこれ程とはな。私も全開で行かないと危ないようだ。」まだ全開じゃないのか！…つうか、ホントに体に気が集まってるし！

「行くぞ？」黒髪さんが物すごいスピードできた。

「（速い！）」体の突進力を加えて剣速が増している。避けきれないガキーン！周を使ってガードした籠手の上から吹っ飛ばされた。体勢は崩れてないが、次の連撃が来る

「ハッハハハ、面白いぞ黄恩！もつとだ、もつと全力を出して見せろ！」必死になって防ぐが、徐々にガードが開いて行く。クソ！バトルジャンキーはこれだから手がつけられない。仕方ない…ク

場の雰囲気が一瞬で変わる。その気配を察知した春蘭は一瞬で退いた

華琳・秋蘭サイド

「秋蘭この戦いをどう見る？」挑発的な笑みを浮かべて華琳様が聞いてくる。璃人には悪いが璃人に勝ち目はないだろう。弓の腕はすごかったが。無手で姉者に勝てるとは思わない けど

「まあ姉者の勝ち揺るぎないと思います。」

「あら、それでは黄恩はあなたの旦那には成れないわよ」

「華琳様もわかっていらっしやるんでしょう。璃人にその気がないと云う事を」

「あら、それだとあなたは気が有るようじゃない。妬けるわ」ちよつと唇を尖らせる華琳様。その姿も十分愛らしい

「まあ気がないとは言いません。あの弓を引いていた璃人は普段とは全くの別人でした。そうですね、ちょうど今のような顔です」姉者と対峙している璃人を指差す

「そうね、まだオドオドしているけど、顔つきは変わったわね。普

段があればからかつこよく見えるのかもしいけど…」

「そうですね …」試合が始まって璃人が姉者の攻撃を受ける。

「それは拙いぞ璃人！ ふう、なんとか防いだから「秋蘭？」は！」

「声に出てるわよ」フフッと笑いながら言ってくる華琳様

「そ、そうですか。でも、やはり璃人は恩人ですから、心配ではありません」少し顔が赤くなつたがなんとかやり過ごせた

「本当にそれだけ？」やはり華琳様にはわかつてしまったようだ

「いえ、私はどこか璃人に期待している所があります」二人の攻防を見ながら語る

「期待？」華琳様も興味があるようだ

「はい。あいつと初めて会った時、唯の少年だと思っていました。しかし、弓を持っているのを見て、なんとか助けになるか程度で助力を頼んだのです。しかし・・・」

「しかし？」

「璃人から返ってきた言葉は、気分の悪さを晴らさせてくれますか？という予想外ものでした。ちよつと私が原因で、璃人の気分が悪くなつてしまったのですが…」

「…まあそこは聞かないでおきましょう」華琳様は察してくれたようだ。血を飲んだなどと璃人は知られたくないだろうからな

「それで、後で謝罪するから、助力を頼めるか？と聞いて、相手に出来る人数まで聞いてきたんです。そしたら近場以外は任せるところでした」

「あら？黄恩の話とは違うわね。あの子はあなたがほとんど倒したと言っていたけど…」

「謙遜でしょう。実の所、ほとんどあいつが倒したんです。私はその討ちもらしを倒しただけです。」

「へえ、結構な人数に囲まれていたんでしょう？それなのに…」

「ええ、数はそれなりでした。しかし、驚いたのは璃人が私の呼吸にピッタリと合わせた事です」

「続けて」笑顔の華琳様が話を続けるように言う。実にうれしそうだ。

「まだ、会って間もない私に合わせて賊を討ち抜いて行きました。当然私も射線上に入らないように気をつけていましたが、それでも驚くほど呼吸が合いました。そして何より…」

「…」もう言葉を発さない華琳様

「何より安心感がありました。まるで姉者に背中を預けているような」

「秋蘭にそこまで言わせるなんてね…欲しいわ」華琳様の癖が出た。しかし、今回は私も賛成だ

璃人は意外にも善戦している。姉者も楽しそうだ。でも、もうそろそろ……何？璃人が増えた？

「秋蘭、私の目の錯覚かしら？黄恩が増えているように見えるのだけど」

「いえ、錯覚ではないと思います。私にもそう見えますし。…原理はわかりませんが、あの歩き方に何かあるのかもしれない。ほとんど地面を蹴っている音が聞こえません」

「そうね。これは嬉しい誤算だわ。まさかこれほどまでなんて」華琳様の喜びも上がっている

「しかし、さすがは姉者です。懐に入った一撃を見事に躲しました。」

「ええ、さすがに春蘭ね。黄恩も躲されて驚いているわ。このまま行けば春蘭の勝ちね。秋蘭、春蘭の勝ちが決まったら割って入りなさい。あれ程の逸材がここで潰れるのは惜しいわ。春蘭でも、殺しはしないでしょうけど、今の状態だと…」

「気分が高まっているようですし、下手をすれば再起不能になるかもしれません」

「そうなる前に　　何！？これは、黄恩から？」場の空気が変わったと言えるほど、黄恩の雰囲気が変わった。それを察知した姉者もいったん下がっている。一体何が起ったんだ　ん！？

「秋蘭？」

「華琳様、璃人の目が見えますか？」

「はつきりとは見えないけど、赤く光っている？」

「ええ、それに雰囲気も変わりました。普段のオドオドさがまるで感じられない」

「黄恩も本気という事なのね」

これからどうなるのか楽しみだという顔をする華琳様。私も同じだ、璃人お前の全力を見せてくれ

璃人サイド

緋の目発動

「さあ、決着をつけようか？」

「な、何だ急に！？そ、それにその目」

「ああ、なんつうか特異体質？序に言うところの目になった時は性格が変わるんだよ。それじゃー…やろうか？」

「ハ…ハツハハハ、面白いぞ黄恩！まだ全力じゃなかったのか！久しぶりに楽しい戦いができたらまだその先が有るとはな！ハツハハ

ハ」夏候惇も気が高ぶっている

「オレもあんたが相手で良かった。あんたなら…オレより強いあんなら、全力でやれる。」璃人は一度目を閉じ、少し集中してからもう一度開く。

璃人が緋の目を発動している時に使える能力の一つ

「ブリディクトフューチャー我思う故に未来在り」璃人を静かな、それでいて力強いオーラが包み込む。相手が自分より強いと判断した時発動可能。緋の目の特性を生かし、各系統100%だからこそできる能力。オーラを脳に集め体の機能の向上、さらに、相手の呼吸、筋肉の動きや、顔の変化から、相手の動きを予測する。その精度はかなり高い。頭の中でシミュレーションをし、相手の動きに合わせて何通りも考えて自分が勝つ最善を導きだす。

「フン、なんだかよくわからんが、倒せば問題ない！」

春蘭が突っ込んでくる。先程と同じように突進力に剣速を乗せた剛の剣。しかも、先ほどより速度が速い…が

キーン

璃人の籠手を少し掠っただけで軌道が逸れた。しかし、相手もさすがで、軌道が逸れた瞬間、蹴りを璃人に入れ追撃を回避しようとするが…

パン

今度は手で弾かれる、否、逸らされる。

五回 十回 二十回：絶え間なく続く攻撃を璃人は最初から分かっているように、少しの動作で回避していく。予め未来が見えていたのではないかと疑う程の舞踏。

「はあっ、はあっ、き、貴様、こちらの動きがわかっているのか？」

「……」璃人は答えない

「スウゥ、ハアゥ……」フン、たとえこちらの動きが見きられていたのだとしても、貴様の予測を上回れば良いだけの話だ！てやああああ！」「上段に構えた春蘭。しかし、それが隙となった。

「ハ！」一瞬で距離を詰め春蘭の懐に入り込もうとする。入られた春蘭はすかさず剣を振り下ろそうとするが

バシン！

「クツ！」

振り下ろす前に璃人に止められた。璃人が春蘭の手を殴ったのだ。

でも、春蘭もさすがで殴られても剣は離さなかった。しかし、手を殴られた事で一瞬目を閉じてしまい、その間に璃人を見失う。本能的に後ろからの攻撃を察知し前方に転がるように跳ぶ。その後はげしい轟音が聞こえた。……後ろから聞こえた音は、地面を陥没させた璃人の踵落しの音だった

「…本当に大したものだな、その年でそこまでの域に至るとは…それでも、妹のためにそう簡単に負けるわけにはいかん！」

態勢を整えた春蘭が剣を構えるが…璃人の雰囲気に戻った。

「いや、もう限界ッス。ここら辺で勘弁してください！」緋の目を解き、頭を下げる

「なんだと！？貴様ここまでやってそれはないだろう！まだやれるは」「そこまでよ！この勝負、黄恩の勝ちとするわ！」　な？
「か、華琳様！ど、どうして…私はまだ」

「春蘭私が気づかないとも思っているのかしら？その右手の指、折れているわ。これ以上やったらいくらあなたでも、無事では済まないはずよ。武人として決着を着けたいのはわかるけど、ここは退いてちょうだい。私はここで、あなたを失うわけにはいかないわ」

「か、華琳様、それは私がこいつに負けるとおっしゃるんですか！？」

「そうは言わないけど、このまま続ければどちらかが再起不能になる可能性がある。私はそれを良しとはしないわ。」

「わ、わかりました。」すこしシユンとする春蘭の顔に華琳がやさしく手を添える。それを花が咲いたような笑顔でうれしそうに笑う春蘭にしっぽのようなものが見えたのは幻覚であって欲しいと璃人は思う

少しの間、春蘭とのじゃれ合いを終えた華琳がこちらを振り向き嫌な笑顔を向ける

「黄恩、単刀直入に言うわ。私の下に来なさい」

「嫌です。」璃人は速攻で断る

「へえ、私の誘いを断るなんて…理由を聞かせてくれる？」顔は笑顔のまま

「危険だからです。戦の可能性がある軍にいるなんて、百害あつて一利なしです。それに助けてもらえなかったのに、なぜ人を助けなくてはいけないのですか？」

実際、璃人は見ず知らずの他人のために、命を懸ける気なんて全くない。自分の預かり知らない所で他人が死のうと、どうでもいいと考えている。それは、璃人の過去に起因している。小さい頃に幻影旅団に襲われ、一族は二人を残し全滅。その後クラピカとは決別したため、子供の一人旅。もともとクルタ一族は流浪の民のため、一人で生きて行くための訓練を小さい頃からしてはいたが、実際、八歳の子供一人で旅をするのはかなり大変である。当然、璃人も大人に協力を求めようとしたが、事情を説明すると、今度は自分たちも襲われてしまいかもしれないと言って誰も助けてはくれなかった。

まあ、元来臆病な性格もあり、いつか自分の身が危なくなるかもしれないから、小さい頃からやっていた鍛錬のおかげで動物を狩つてはその日を生き抜いていたが、結局だれも助けてはくれなかった。

そんな生活をしているうちに年が経って行き、自身もそれなりに強くなった。兼ねてより自分を救ってくれた一族の目を探すためにハンターになることにした。借りた借りはきっちり返す主義である。

そんなこんなでハンター試験でメンチと出会い、その後、ネテロ会長に捕まりキメラアント討伐に駆り出された訳だが、結局死んでしまい。この世界で生まれ変わった。不幸にも緋の目が何故か有り、前の世界と境遇は違えど、周りの大人は、家族と巖顔さん以外は助けてはくれなかった。

そんな自分がなぜ他の人を助けなければいけないのか、助けてもらえなかったオレがいるのに、自分の時は助けてと言う。そんな人達がたまらなく嫌いだった。だから、璃人は関係ないやつのために戦う気なんてない。どんな理由が有ったにせよ、助けてもらえなかった事實は変わらないので、助ける気なんてないのだ。根が優しいため、目の前で助けを求められて自分に可能な範囲なら助けない事もないのだけど…

「あなたは益州の人間だったわね。聞いた事が有るわ、益州では赤目が不吉の象徴とされている事を…州から追放されたのね？」

「そうです。知り合いに偉い人がいたので処刑だけはま逃れましたが、州は追放でした。それで、今はここにいます。今日で出て行くつもりですけど」

「私があなただを逃がすと思って？」

「逆に問いますけど…」

オレと殺る気か？今はすこぶる気分が悪い。一軍相手だろうと殺るぞ？逃げようと思えばオレの方が速い。馬で追ってこようとも馬じや近寄れないぜ？」緋の目を発動して殺気をあてる。反射的に華琳の前に春蘭と秋蘭が立つが華琳がそれを制した。

「…止めておくわ。私は勝てると思った戦いじゃないの。それに無駄に大事な兵を失う事もしたくない。でもね、黄恩、私は欲しいと思ったものは必ず手に入れるのよ。それを忘れないで頂戴」

「もう忘れました。それでは行きます」緋の目を解除して、立ち去ろうとする。

「待ちなさい。そう言えばあなたに褒美を与えるわ。春蘭と互角に戦ったんですもの、それくらいの価値はあるわ。何か、望みでもある？やっぱり秋蘭が良いかしら？」先程とはうって変わった提案に璃人の毒気が消える。

「今は決められないんで、貸し一つでお願いします。」

「わかったわ。気をつけなさい黄恩」

「言われなくても気をつけます。それ「待て」もう何ですか？秋蘭さん。ここは黙って見送る所ですよ。」

「私も少し気になったことが有ってな。…璃人、お前が姉者との戦いを途中で止めようとしたのは、姉者を思ってたの事か？あのまま、続ければ勝てただろう？なぜだ？」

「勝てたかと聞かれれば、微妙なところですね。実際疲労が溜まっていたのは確かです。黒髪さんは反射神経が異常だから、不意をついたあの一瞬で決められなければ、オレの負けだと思ってました。」

まあ、黒髪さんの手が折れてなかったら話ですけど　だから、止めました。」

「それは姉者を心配してくれたからか？」

「どうなんでしょうね？これ以上続けても双方に利がない　もともとオレにはないんですけど…なので、こちら辺で終わってくれないかなと思ったまでです。まあ基本自分第一なので」

「そ、そうか…ありがとうな璃人」嬉しそうに言う秋蘭の顔はとても美しかった。璃人もドキツとしてしまうようなそんな笑顔だった。

「どこに礼を言われるのかわからないんですけど…」

「お前は嘘つきだからな、交わした言葉は少ないがそれくらいはわかる。利がないと言っていたが、お前なら最初から全力であれば決めただろうし、姉者の手を狙い続ければお前は無傷で勝てただろう。姉者を思ってくれて中断してくれた事がよくわかった。」

「なに〜！？貴様手を抜いたのか！」

「秋蘭さんの所為で変な誤解が生まれちゃったじゃないですか！黒髪さん、手は抜いていないのであしからず。」

「そ、そうか、なら良い。それとその黒髪さんというのはやめろ。私の事は春蘭と呼べ」

「あら？秋蘭に続いて春蘭まで墮とすなんてやるじゃない黄恩。妬けちゃうわ」クスクスと春蘭の方を見ながら言う華琳に、春蘭が慌

てて否定する

「え、いや 華琳様！私はそんなつもりはございません！ただ、こやつが武人としての力量を認めただけであってこやつに惚れた訳ではありません！！」

顔を真っ赤にする春蘭を秋蘭が嬉しそうに見て、華琳も楽しそうにする。やっぱここは変な所だ。

「冗談よ。春蘭が私の事を一番愛してくれている事は知っているわ。ちよつと嫉妬しちゃっただけよ。許して頂戴」春蘭の顔にそつと手をあてる華琳：やはり百合が見える

「華琳様〜」もう完全に堕ちてしまった春蘭

「それと、黄恩、私の事も華琳と呼ぶと良いわ。あれだけの戦いを見せてもらったんですもの、私の真名を託すには十分よ。それに、将来部下になるものに真名を預けておくのは悪い事ではないでしょう？」この人のこの挑戦的な笑みが好きになれない。

「そんな日が来るとは思いませんが、ありがたく頂戴します。お二人ともオレの真名は璃人です。これから会う事があるかわかりませんが、どう 痛いんですけど、抓るのを止めてください秋蘭さん」

「ん？お、すまんな。無意識にイラつと来たんだ。他意はない」

「なんですかそれ？」

「フフ、秋蘭も随分入れ込んでいるようね？もう、あなたの中では私が一番ではいられないようね。残念だわ」そうは言っているがな

んかすごく嬉しそうだ。妹の成長を見守る姉の様な心境なのだろう

「まあ、いいです。それでは行きますね。秋蘭さん」

「ん、なんだ？」少し焦っているようだがなんか面白い

「握手です。また会いましょう」そう言って手を差し出す

「ああ、そうだな。また会おう。その時は」「ゴニョゴニョ言つて良くわからなかったが、軍にでも入れとでも言いたかったのだから。入る気はないけど」

その後3人と別れ、荷物をまとめて出て行った。次は幽州でも行くか

第10話 璃人の全力？（後書き）

ぶっちゃけ緋の目の能力の元ネタは○○の王子様です。才気煥発の極みでも良かったんですが、充てる英語が分かりませんでした。

第11話 理想と現実

今歩いているのは幽州の五台山の麓。璃人も十五歳になり元服を迎えたが、本人はこれと言って変わらさず。山で生活したり、町で料理人をしたりして日々を過ごしている。今向かっているのは公孫贄の治める町。噂では普通の町らしく可もなく不可もなくという所らしい。

この場所は特に何もなく、当たりが山や森と言ったものに囲まれていて、のんびりとしている。こう言う空気は何事にも代え難い。だから、例え、目の前で賊に襲われている女性達を見ても、見なかったことに出来るくらいの心は持っている

「ああ、空が青いな」

「その御仁、良ければ、手を貸してくれないだろうか？私と妹では、姉上を守りながらだと辛い数なのだ。弓を持っているようだし、助力をお願いします。」偃月刀を振り回し、賊を次々に倒して行く黒髪の女性。もう一方の赤髪の女の子も賊を吹っ飛ばしている。

助けいらなくね？

「ああ、そのお姉さんを守るくらいの事はしますよ。この弓は基本狩りで使うものなので、戦闘には使わないですよ。でも、お姉さん一人くらいなら守れますんで、こちらに任せて、暴れてください」

「別に暴れているわけでは　まあ良い。桃香様をよろしく頼む。・・・行くぞ、賊共！この関羽雲長が成敗してくれる！はあああああ」ここから始まったのは一方的な戦い。黒髪さんと赤毛の子が

無双する。このペースなら三百近くいた賊が半刻も経たないうちに全滅するだろう。

その光景をボクッと見ていたら、ぼやんとした女性に話しかけられた。

「あの〜ありがとうございます。私のことを守っていただき、「ニッコリと笑いながら言うがオレは何もしてない。お宅の妹さん達がガンバてるおかげです、はい。」

「ああ、礼ならいいですよ。実際何もしてないですし。それにしても、妹さん達随分とお強いですね。おおっと少し頭を下げてください」「？と首をかしげながらも、言われた通り頭を下げる女性。下げた瞬間その上を弓矢が通りすぎた。

「……お、教えてくれたのは嬉しいですけど、もう少し早く言ってもらえると助かるんですけど……」何が通過したのか分かったのか、少し不満そうに言うてくるお姉さん。ああでも……

「そうですか？ああ、今度は右に避けてください」

「キヤアア」女性が避けた所を矢が通過していく。きっとこの人には何か惹きつけるものがあるのだろう。弓矢を惹きつけるなんて死んでもごめんだが

「もう……キヤア……ちょっと……うう……助けてください……いやあ」次々と女性に矢が飛んでいく。座っているこちらには飛んで来ないのに動いている女性に飛ぶなんて、矢に愛されているんだな〜と感心しつつも見ていてかわいそうになったので助ける事にする。

「お姉さんこちらへ来てください。」

「え・・キャ・・はい」言われた通り来るとお姉さんに飛んでいた矢が止まった。

「あれ、どうして？」

「そんなの簡単です。あの黒髪さんの後ろにいれば、あの人が弓を切ってくれるので、ここまででは来ません。赤毛の子は弓を避けているので、その後ろにいたお姉さんに全て飛んで行ったのでしよう。いや・・なかなかの反射神経でしたよ。見ていてワクワクしました」

「それを知っているならもっと早く言ってください！」怒っているようだ、全然そう見えないのはどうしてだろうか？はわわ先輩やあわわ先輩と同じタイプなのだろう。見ていて飽きない。

その後も色々言っていたが、基本左から入って右から出て行った。この晴天の中、空を見上げれば、限りなく続く青い空が広がっているのに、前を見れば賊の死体と血の海 見なかった事にしよう。今はこの美しい空を見て心を清めよう。そうオレは何も見っていない。

そうこうしているうちに、二人が無双し終えたようだ。赤毛の子は元気に走ってこちらに向かってくる。あれだけの戦闘をした後で、その笑顔は結構怖い。ゴンとは違う感じがする。

「お姉ちゃん、大丈夫だったか？」その笑顔は、天真爛漫という言葉が似合うのだが、後ろの賊の死体がそれを邪魔している。危ない殺人鬼のようにしか見えないのはなぜだろうか？

「うん、鈴々ちゃんや愛紗ちゃんのおかげで平気だったよ。それと、お疲れ様」ホント、仲睦まじい光景が広がっているが、後ろの死体の山がそれを台無しにしている。

「とりあえず、あの死体を始末しませんか？こんな所に放置したら、感染症とかの恐れが出てくるので」

「ん？どういうことだ？」黒髪の人が不思議そうだ。無理もないだろう、この時代は病の原因がなんだかよくわかっていないのだから。

「野菜とか放っておくと腐りますよね？それを食べたらどうなりますか？」

「お腹が痛くなるのだ」赤毛の子が元気に答える。

「そうです。とにかく腐った物は異臭がしますし、何かと健康に良くない。ハエなどそう言うものに群がりますが、果たしてそのハエが人に付いたりしたらどうなるでしょう？蚊でも良いです。人の体内に入り込んでしまったら、何かしらの病気になってしまいかも出来ないのです、死体はちゃんと始末した方が良い。」

「といっても、私達は穴を掘る道具など、持っていないのだが」

「なら、近くの町で借りましょう。賊退治をしたと言えば手伝ってくれる人もいますし。一か所に集めて燃やしてしまえば万事解決です。肉だって生で食うと危ないから、焼くでしょう？だから、腐る前に焼いてしまえば問題ないです」

わかったと3人が頷いて近くの村に行く。事情を説明すると、手伝ってくれる人が数人いて道具も貸してもらえた。ただ、大半の人は

我関せずを貫き、協力はしてくれなかった。黒髪さんと赤毛の子がいなかったら襲われていたかもしれないのに　これがやつぱこの世界の現状か…別にどうでもいいんですけど

協力してくれた人達と穴を掘り、そこに死体を入れて燃やして行く。星さん達と討伐した時はやったが、秋蘭さんとの時はしなかったな。・・・まあ肉食の動物がいるから大丈夫だろう・・・たぶん。あそこら辺の動物を狩って誰かが腹を壊してもまあ仕方ない。あの時は…思い出したくない。

「そう言えば、あなたの名前を聞いてませんでしたね。私は性を関、名を羽、字を雲長と申します。」

「はい、次私。私は性を劉、名は備、字は玄德です。」

「鈴々は、性を張、名を飛、字を翼徳というのだ」

「私は、性を黄、名を恩、字を子苑と言います。」

「黄恩殿には姉者がお世話になった。礼を言います。」

「あ、敬語はいいですよ。それと、実際頑張ったのはあなたなので礼も良いです。ね、劉備さん？」

「あ、うん、そうだね。最初は助けてもらったけど、後は愛紗ちゃんの後ろにいれば問題なかったし」

「え〜っと、どういうことなのだ？」

「関羽さんの後ろは弓が飛んで来なくて安全だったと言う事ですよ。」

「そうなのか、やっぱり愛紗はすごいのだ。」

「そうなんです、関羽さんはすごいんです」

「ハハハハハ」

「どうして、お主らは人の事でそこまで、盛り上げられるのだ？」若干恥ずかしそうにしている。自分の事が褒められて、テレているのだろう。なんとも、弄り甲斐のありそうな人なんだろうか…

その後は、近くの町で食事を取る事にしたが、一緒にどうか？などと誘われた。なので丁重にお断りした。何でかと言うと

「あなた達、お金を持ってなさそうなので」

「うっ」「二人が反応した。やはり、たかる気だったらしい。そんなのごめんだ。」

「年下にたかる気なんですか？見損ないました。」軽蔑したような視線を二人に浴びせる。その視線を浴びた二人は顔をそらし、バツの悪そうな顔をしている。

「そもそも、何でお金がないんですか？関羽さんや張飛ちゃんがいれば、問題なく稼げるでしょう？賊の討伐とかで」

「あ、うん…：そうなんだけど、私達はあまりそう言う報酬目当てで

はやってないの。困っている人や苦しんでいる人がいたらできる限り助けてあげたいんだ。」

「……」完全に絶句。今の世界にこんな頭がお花畑の人がいるとは思わなかった。困っている人を助けるって 自分の事も満足にできないのに

「桃香様は、今の世を憂い、か弱き民を救うため旅をしているのだ。私と鈴々はそんな桃香様に心を打たれ一緒に旅をしてる。」

「へ、へえ〜。それはたいそう立派なことですね。まあ頑張ってください。応援だけはしています。」

「む、なんだ？桃香様の考えに何か問題でもあるのか？」関羽さんが少し不満そうな顔で聞いてくる。この人も自分は正義みたいな人か…嫌いだな、こういう人

「別にないですよ。」

「しかし、先程の反応は何か言いたげだったではないか！何かあるならちゃんと見え。」

「では。お三方は、か弱き民を助けたいと言っていました。が、先程殺した賊はか弱き民ではないのですか？賊に堕ちたとはいえ、元は農民の人ですよ？まあ根っからの犯罪者もいるでしょうけど」

「しかし、やつらは…」

「賊ですか？まあ確かにそうでしょうし、オレもそれを否定するつもりはありません。だから、罪を犯してしまったら裁かれるのは当

然です。じゃあ逆に人を助けたあなた達が報償を受け取らない事は
どういう事になるでしょうか？」

「別に問題ないんじゃない？」劉備さんは分からないらしい。

「一言で言えばそれも立派な悪です」

「何だと?! 一体私達のどこが悪なんだ!」偃月刀を構えをこちら
を威嚇してくる

「愛紗ちゃんダメだよ!」

「そうなのだ愛紗、落ち着くのだ!」二人が止めに入る。突きつけ
られた璃人の方はかなり距離をとっていた。いや〜ビビった。

「失礼した。それで、一体どういう事だ? それとそんなに
離れるな、もう取り乱したりはしない」

「心配なのでこの距離でお話します。」若干関羽からの視線が怖か
ったが、また暴れられても困るので距離は取っておく。

「先程の答えですが、あなた方がしていることは、単なる自己満足
です。誰のためにもなっていない。」

「どついうことですか! 私達はちゃんと守って来ましたよ」劉備は
そう言うが

「その時は」でしょ? その後はまた襲われたらきつと終わりです

ね。でも、あなた達の行いが悪かったわけではない。問題はその後です。」

「報償を受け取らなかつたことか？しかし、村によつては荒れていて大変な所だつてあるんだぞ？」

「なにも多額を要求しろとは言つてませんよ。何も受け取らない事が問題なんです。あなた達が受け取らなかつた事で村人たちは勘違いする。困つていれば無料で助けてもらえるのだと。これは、状況としては最悪です。」

「なぜだ？」

「その次にその村を訪れた義勇兵がいたとしましょう。そして、こう言われるのです。「以前助けてくれた人は、無料でやってくれた」と。そうなるとう義勇兵の方も無料でやるしかなくなる。民のために立ち上がった義勇兵が、無料で助けてくれた時があつたと聞いたらやるしかないでしょう。そう、無料で命を懸けるしかない。この意味わかりますか？貴方達は命を軽くしたんです。」

「……」

「さらに言うなら、村人たちの墮落にも繋がります。自分たちが何もしなくても、また助けてもらえるのだと。それは危機感が無くなり、最悪あなた達は恨まれます。どうして助けてくれなかつたのかと…。報償を受け取るとう事は当然の対価であり、それを拒否するとう事は村人に危機感をなくさせます。報償とは大なり小なり、村に影響を与えます。そこで村人は考えるわけです。報償を出さずになんとかならないか？と。そしたら自ずと自衛しかありません。最終的には村の危機感意識向上につながります。それでも本当にど

うしようもない時は助けを求めるのです。村の財産を使って。それをどれくらい受け取るかはその戦った人の裁量なんでしょうけど、受け取らないと言うのはただの偽善だ。優しさで世界が救えるならとくに救われている。貴方達は弱き民と言っています、弱き民を作っているのもまたあなたたちですよ。人は危機に陥れば、抗おうとする生き物です。貴方達はただの自己満足でその機会を断つてしまった。」

「私達がしてきた事は間違っていたの?…」

「間違っていた訳じゃないです。人の命を助けた事自体は立派な事なんですよ。オレにはできません。でも、その対価をきちんと受け取らなきゃ、いつまでたっても変わらない。極論、この国を変えたいなら漢王朝にケンカを売ればいい。それが一番早いけど現状だれもそんな事は出来ない。犯罪者になってしまいますから。だから自分の自己満足のために手近な所で済ませようとしてしまう。本当にこの国を憂うなら、国を変えるしかない。どんな犠牲を払ってでも」

「わ、私は、皆が仲良く平和な世界にしたいの。犠牲を払わずに!」

「それは不可能です。そんな事が出来ないのは歴史が証明しています。皆が幸せ?どうやったらそんな事が出来るんですか?例えば、その二人が戦場で命を落としたとして、あなたは幸せに暮らせるんですか?」

「ううん。でも、二人は強いから…」

「まあそうですね。お二人は死なないかもしれない。でも、敵だっ

たら？あなたが理想の国を作ろうとすれば当然他の理想を掲げる人だっている。その人は言わば敵です。その相手の誰かが死んでしまつたら、相手はきつと幸せになれないでしょう。これでもあなたの理想はできるんですか？」

「は、話し合いで解決すれば」

「まあ無理ですね。人が10人いれば10通りの考えがある。似通つた考えが有るかもしれないけど、10人すべてが同じなんて事は絶対にない。でも、それが人なんです。あなたが言う皆が幸せという事はだれも何も感じないと言う事です。悲しい事が有るから、嬉しい事が有る。幸せな人もいればそうでない人もいる。でも、これが当然なんです。誰もかれも幸せなら、それは何も感じていない世界になる。嬉しい事も悲しい事もなければ、少なくとも平和ですね。ただ、人として生きているかは別ですが…」

「……」三人はもう何も言えなかつた。自分の追い求めてきた理想は叶うものではなく、たとえ叶つたとしても、それは本当の意味で叶つたとは言えないからだ。世界には必ず、表と裏がある。表だけの世界、裏だけの世界なんてものは存在しない。辛い事を実感しなければ嬉しい事を実感などできないし、嬉しい事を実感しなければ、辛い事も実感できない。表と裏を比較して初めて表と裏ができるのだから。

「まあ所詮はガキの戯言です。気にせず自分の道を行けば良いんじゃないですか？何か生意気な説教みたくなつちやいましたけど、それは各自の自由です。頑張ってくださいとしか言いようがないので。

オレはこれで失礼しますね。では」

言いたい事だけ言っ去つていく璃人は、自分は一体何様だ？と自分で自問自答している。一時の乗りに身を任せてしまつて多いに失敗するパターンである。気恥ずかしさもありませんが、とりあえず、当初の目的通り公孫贄の治める町に行く事にする

そして、今いる町を出て行こうとすると後ろから声がかかった。

「待つて！」劉玄德と愉快な仲間達がそこには居た。劉玄德はすごく良い笑顔だ。あの笑顔はオレにとってかなり問題が有りそうだ。なぜか、メンチを彷彿とさせる。

「私決めたの　さらば！　ええええええ！！？ま、待つて！」
相手が何かを言う前に走り去る。速力ならこつちの方が速い。関羽さんが張飛ちゃんが追つて来たとしても、劉備さんが追つて来れないはずなので、逃げ切れる

今璃人は風になった。

あれ？折角撒いたと思ったのにどうして遭遇するの？・・・しまった！この人たちもこの町を目指していたのか！折角良い働き所を見つけたと思ったのに…

—————回想

劉玄德達を撒いて、公孫賛の治める町に入ったは良いが、全力で走ったので、お腹が空いてしまい、とりあえず、そこら辺で腹ごなしをする事にする。運の良い事に、その料理屋は従業員募集中らしく、それならばと働こうとしたのだが、まさか、ここにメンマ星人がいるとは思わなかった。

「おや？懐かしい顔だな。息災だったか璃人。」

「あれ？メンマさん、もとい、星さんではないですか。他のお二方はどうしたんですか？」

「私という者がありながら、稟や風の事を聞くなど婿としてはいかんぞ。まず最初に熱い抱擁から入ってだな」

「そうですか、深刻な病を患ってしまったようですね。まさか、妄想がここまでの領域だとは。きっと風さんも妄想者が二人もいては大変だろうと思ってあなたを置いて行ってしまったんですね。すみません風さん、オレにはこの人を治す事は出来ないようです。」

「璃人よ最初から話に乗らないのは戴けない。そんなんでは女性にモテんぞ。」

そう言うので、徐に近づき

ぎゅ

と抱きしめてみた。

「な!？」顔を真つ赤にして口をパクパクする星さん。意外と初心なようだ。

「星さんって意外とかわいい所が有りますよね。からかったつもりで、顔を真つ赤にするなんて」にやりと笑いながら星を擲う

「璃人よ、今はな・・・」大人の女性としての威厳を取り戻すために弁解しようとする星

「抱きしめられて、ビックリしちゃったんですね。かわいいじゃないですか、子供っぽくて」

「璃人、少ししか経ってないのに、お主随分と変わったではないか。何か有ったのか？」

「ええ、実は星さん達と別れた後 ……」

「何だ、辛い事でもあったのか？それなら私に話して普通に過ごしてました」…もう良い。それより今は何をしている？私は今この公孫釐と呼ばれる人の下で客将をしているのだが、どうだ、璃人も来ないか？私から頼めば城で料理人として働けるぞ？」

「ホントですか？ ならお世話になりましょうかね。今から職探しをしようと思っここで働けるか聞こうと思っっていたところなんで

すよ。城で働けるならそつちの方が給料は良さそうですし。星さんが働いているなら多少の無礼は見逃してくれる所なんですよ？だったらそこにします。」

「気になる評価があるがまあ良い。稟と風と別れてから、一人だったからな。久しぶりに友と話すのも悪くない。」

「そう言えば、お二人は？…やっぱ、愛想を尽かされちゃったんですか？」

「お前の私に対する評価はよくわかった。それについては、後で、キツチリと分かせてやろう。二人は路銀が尽きた私と違って、まだ旅を続けているよ。また会おうと約束もしたしな」

「へえ〜」その後少し話して 公孫賛さんって言い辛いな、とにかくその人の下に行つて就活をしようと思う。まあ料理を作って判断されるだけだろうけど 怖い人じゃなければいいな。まあ星さんが働いている以上、そんな人ではないと思うんだけど

そんな感じで考えながら歩いているといつの間にか城主さんの所に着いていた。

第一印象は普通。見た目は綺麗なのだが、なんか残念な人の感じがする。例えるなら、キメラアント討伐前までは元気だったが、王宮に侵入してからはげ散らかったノヴさんのような感じだ。

そのあと少し話をして、とりあえず、料理をしてくれと頼まれたんで、厨房に行つて料理をする事にする。星さんにはメンマだけ出しておけばいいだろう。普通さんは 普通でいいや。

- - - 回想終了

で、出来た料理を持って来た訳だが

「ああ、黄恩君みつけた！」劉玄德と愉快的仲間達がそこにはいた。本日二回目

第12話　なんか最近こつこついうのばかりな気がする

折角逃げてきたのに、まさか、此処の城に来るとは思わなかった。しかも、様子から察するに、公孫贄さんの知り合いのようだ。

「黄恩君、さっきは何で急に行っちゃったの？もう会えないかと思つたよ。でも、白蓮ちゃんの所にいてくれてよかった。それでね、さっき言おうとしてた事んだけど…」ニッコリ笑つていた顔を真剣な顔に変えて何かを告げようとする劉玄德。しかし、璃人にとつてそれは、嫌な予感しかない。しかも、こつこつ時の璃人の勘は良く当たる。話を逸らさねば

「あ、そうですか？でも、今職場の試験中なので後にしてもらえます？折角作つたのに、冷めちゃったら勿体ないじゃないですか」

「あ、うん、ごめんね。じゃあ後で話すね。」

「すみません。では、お召し上がりください。星さんには…特別にこれです」

ジャジャーンと効果音が出たかのようにメンマ丼を渡す。ご飯：メンマ：他の具〃5：4：1のメンマ丼。メンマオンリーでも良かったけど、それでは味気ないので、他の具材も加えてみた。薬味程度だけ

「り、璃人…お、お主…わ・わ・」

「わ？」

「私と結婚してくれ！こんなうまさうな物をいとも簡単に作ってしまえるのはお主しかおらん。まさにこれは運命だ。私はこれを食べたらもう戻れないかもしれない。お主の料理、いや、メンマ以外食べれないかもしれない！だから」

「またまたそんな　　メンマでそこまで行くわけないじゃないですか、星さん、そんな事で旦那さんを選んではいけませんよ。」

「し、しかし」

「まあ、バカなこと言っていないで食べてみてください。以前作った試作品よりも、うまくできていると思います。」

「璃人よ、私を殺す気か？以前の試作品でさえ、あれほどだったのに……」

「まあ、気絶しましたもんね」

「えええええええ！メンマで気絶したんですか？」まあ驚くのもわかるけど、騒ぎ過ぎだ。

「分かっておらんな劉備殿。璃人のメンマはまさに至高。食べた者を必ず昇天させるほどの味だぞ。私も以前危うく昇天しかけた。しかも、今回はそれ以上の出来　　覚悟を決めなければ」

「そ、そんなにすごいメンマなんですか？　　少し食べてみたいかも」

「鈴々もなのだ。」二人が星のメンマ丼を凝視するが、星が鬼のよ

うな形相で二人を睨む。その睨みで二人は固まった。蛇に睨まれたカエルってこんな感じか？意味合いは違うと思うけど…

そんな様子を関羽と公孫贇は呆れながら見ているのだった。

「そんなにすごいものじゃないですよ。あくまで、星さん限定です。まあ、とりあえず食べてください。公孫贇さんもどうぞ」

「わかった。」「うむ、趙子龍いざ参る」二人が料理を口の中に入れる。

・
・
・

「おお、美味しいじゃないか。こんなにうまいのは久しぶりだな。特にこの卵料理。出汁加減が絶妙だ」

「それは、卵焼きと言います。砂糖を入る事もありますが、砂糖は高いので、今回は昆布があつたので出汁で作ってみました。それと、何か普通の反応すぎてあまり面白くありません。」

「普通って言うな！それじゃーどんなのなら普通じゃないんだ！」

「勿論あれです」星の方向を指す。公孫贇も気づいてはいたようだが、あえて触れなかった。いや、触れられなかったと言った方が良いかもれない。

「た、確かにそうだが、あれは私には無理だ。」

「じゃあ一生普通ですね」

「ああなるくらいなら、普通で良いかもしれない」

「そうですね。全く持って同感です。まさか、メンマを食べて

」

「「顔がメンマのようになるなんて!!」」

そう、何と星さんの顔がメンマのようにしなびれた…というか、筍？…まあとりあえず、メンマの様な顔になった。普段きれいな白い肌の星さんの顔が微妙に黄色っぽくなっている。肌の色としては、まあ有りだけど、顔だけというのは気持ち悪い。一瞬凝をして、変化系で顔を変えたのかと探ってしまっただくらいである。こんなリアクション現実世界で起るとは思わなかった。

まあ曹操さんのところでも尻尾とか、百合とか見えたし、この世界ではこれがデフォルトなのかもしれない…嫌な世界だ。あ、でもあつちの世界の人も顔とか殴られると原型が分からないくらい腫れあがっていたから、問題ないのか？ピスケの修業でキルアもなっていたし…その後爆笑して殺されかけたけど。

「私にはあれは高度すぎる。それによく見る。まゆ毛の所にメンマが貼ってあるぞ。」

「普段、美人さんの星さんの影も形も残っていませんね。あの状態で会っていたら、星さんには近付けなかつたでしょう。」

「私だって無理だ。あんな顔で客将になりたいなどと言われても、どう対応して良いかわからない。しかし、どうやればあんな事に…」

「まさに、人類の神秘ですね。あんな神秘なら全くいらないうですけど」

「同感だ。私もあんな特殊な人間になるなら、普通で良い。いや、むしろ、普通が良い。」

そう固く誓った、普通子さん…メンドイからハムさんには心底同意だ。劉備さんたちも、驚きのあまり言葉を失っている。張飛ちゃんもなんか嬉しそうにしているが…

とりあえず、この状態なら話は出来ないだろうから、星さんを運んで部屋で休ませる許可をもらった。

狙った訳ではないけど、星さんグッジョブ！これで、劉備さんから離れられる。オレが戻る頃にはもういなくなっているだろう。きつと旧交を温めるだけに立ち寄ったに違いない。

そう言えば、はわわ先輩とあわわ先輩は元気に成長しているだろうか？あの後で手紙だけで出てきちゃったから、それだけが心配だ。一応煮干しは置いてきたけど、あんま成長してはいまい

そんなくだらない事を考えながら星を抱えて部屋に向かうのだった。

「む？」

「あ、起きました？毎回毎回、オレの料理で倒れるの止めてもらえます？なんかオレが悪いみたいじゃないですか」

「り 璃人？…私は一体…？」意識を取り戻した成果が寢床から起き上がる。そして、辺りを見渡し、自分の部屋である事がわかった。璃人からの話だとまた、気絶しまったらしい。あの至高のメンマ丼を食べてからの記憶がない…一体どうしたのだろうか？

「星さんも、すごい人ですね。まさか、メンマを食べてあんな事になるとは思いませんでした。今は元に戻っていますが、人類の神秘を感じましたよ。」

「あんな事？璃人よ、一体私に何が…」

「口では説明できません。まあ覚えていないのなら、気にしない事をお勧めします。正直どう接して良いか分かりませんので

それでは公孫贄さんの所に戻りましょう。オレの試験結果も気になるし」

「私は、どれくらい気絶していた？」

「一刻くらいですか？おそらく劉備さん達はもう帰っちゃったんじゃないでしょうか。」というか帰っていて欲しい。

「一刻もか ああ、それと璃人、劉備殿達はまだいると思
うぞ。伯珪殿のところに仕官しに来たと言っていたからな。劉備殿
は戦えないだろうが、他の二人はなかなか強そうだったし、伯珪殿
も召し抱えるだろうさ…どうした、璃人？そんな、私の裸を
見た時のような驚いた顔をして」

「そんな時はなかったと思いますが、なんでもありませんよ」まさか、ここに仕官とは。…しかし、当然と言えば当然か。城に訪れる

用なんてそんなにない。旧交を温めるだけに寄るなんて考えにくい。ぬかったー！

どうする？このまま行けば確実に面倒な事になりそうなんだが

「ホントにどうしたのだ？急に百面相などして。まさか、そんなに私の裸が見たいのか？私としてはお前になら構わんが、私はそんな軽い女ではないぞ」茶化したように言うのだが

「え？何か言いました？考え事してたので聞いてませんでした。…何顔を赤くしてるんですか？」璃人は全く聞いていなかった。

「いや、何でもない。聞いてもらえない冗談ほど恥ずかしい物はないと思っただけだ。それはさて置き、戻ろぞ。」

「ええ〜っと、やっぱりこの仕事やめようかな〜なんて思ったりしてるんですけど。」

「む？なぜだ？伯珪殿が気に入らなかったのか？伯珪殿は…うむ普通だ。それ以外に説明できん。」

「いえ、あの人に問題が有るわけじゃないんですけど。」

「なら、劉備殿達か？そう言えば、知り合いの様な感じであったな。何かあったのか？私の目から見ても、劉備殿達はそれなりの御仁だと思っただが…」

「いや〜何と云いますか…強いて言うなら意見の不一致でしょうか？考え方が合わない感じですよ。理想は素晴らしいと思いますが、あくまで理想ですしね。」

「どんな理想なのだ？」

「本人に聞いてください。オレが言うとなんか偏見みたく聞こえてしまふと思うんで、本人から聞くのが一番ですよ。もしかしたら、星さんの主になるかもしれないですね」

「ほくそれは実に興味深い。なら、聞いてみようではないか」星の顔がニヤリと笑い、自分の主になるかもしれないと言う情報を嬉しく思ったようだ。

「じゃあ、オレはこれで」立ち去ろうとする璃人だが、肩をガツチり掴まれて逃げられない

「離してください、星さん」

「まあそう言うな。此処に残るにしろ、残らないにしろ、伯珪殿に一言言って行くのが筋だろ？」

「星さんがそんなまともな事を言うなんて……」

「お前が私の事をどう思っているか、一度じっくり話し合う必要が有りそうだな。主に肉体言語で
まあ今はいい。四の五の
言わずついて来い」璃人を引きずる星。

璃人は人攫いとか言っただけで叫ぶが、誰も来ず、結局広間まで連れて来られてしまった。こんな細腕の一体どこにこれだけの腕力が有るのかを知りたいと璃人は本気で思った。

そのまま部屋に入ると、まだ劉備さん達がいた。引きずられているので、姿は見えてないのだが、声が聞こえるのであるだろう。星さんはオレを途中で捨てて行き、劉備さん達の下に向かう。どうやら話し合いをするらしい。こちらとしてはどうでもいい話なので静かに待つ事にする。

・
・
・
・
今、なぜか、訓練場に入る。しかも、目の前には闘志を漲らせる関羽雲長が立っている。凝で見なくとも、気が集まっているのがわかる。一体どうして

「一体どうして、オレがここにいるのでしょうか？簡潔に答えてください、星さん」

「気分だ」

「そうですね　あなたにメンマを作る事は一生ないでしょうね。オレも気分屋ですので、星さんに『のみ』作る気になれそうにありませんが、それも仕方ない事ですね」

「ま、まま、待て璃人。ちゃんと説明する。」

「冗談は時と場所を選んでください。」全く持って人の事を言えた義理ではないのだが、言わなくてはいけないと思ったので言うておく

「すまぬ。ただお主には言われたくない。」

「全くその通りです。オレも自分で言っただけで違和感を感じました。」

「なれない事はするもんじゃないぞ？」

「まあ、劉備殿に、劉備殿が求める理想というのを聞いてみたが、璃人の言つとおりだった。理想は理想であつたと」

「そんな事ありません！私は必ず叶うと信じています」

「淡白に言つた星と熱弁する劉備。で？」

「その事とオレがこうやって関羽さんと対峙してる理由は関係あるんですか？」

「何を言つた璃人。かの孔子も『其の以す所を視、其の由る所を觀、其の安んずる所を察すれば、人いづくんぞ隠さんや、人いづくんぞ隠さんや。』と言っているではないか。」

「人間の行動には、必ず動機がある。そして、その動機をどのように発展させて行動しているかを観察すれば、その人は絶対に自分を隠すことはできない、絶対に隠せないという意味だが」

「ますます持つて意味がわからないんですけど」

「つまり、その理想を掲げる劉備殿の行動を観察すれば、本質が見えてくるというわけだ。私は武人なので人の本質を見るには戦う事が一番だ。しかし、劉備殿は武人ではなさそうなので、その家臣の関羽と戦ってみれば判ると判断した」

「なら、星さんが戦えば……」

「私は観察で忙しい。さすがにそんな事を考えながら戦えるほどの相手ではないと思うからな。そこで璃人の白羽の矢が立った訳だ」

「…死ねばいいのに」これ以上ないという冷たい視線が星に向く

「な?! 璃人?! 今、一体なんて」

「あ、つい本音が 実際そんな事を思っていないですよ… たぶん」顔は笑顔だが目は笑ってない

「隠す気ないだろ。 すまないな、だが私としてはお前の実力が見たいんだ。お前とは約束があるから、私は戦えないからな」

「つつか、それが本音じゃないですか?! 普通に嫌です。オレに一体何の得が有るんですか?」

「私が嫁に行く」

「まだそれを引っ張るんですね。いい加減しつこいですよ」

「む! 私では不満か? これでも容姿には自信があるぞ」

「不満なら十分にあります。一番は人の話を聞いてくれない事ですね。まあ、最近誰も聞いてくれないような気がしますが…」

「それくらい気にしないのが男の甲斐性というものだろう。」

「どんな甲斐性ですか! オレは普通が良いです。」ここで、星との

結婚談義が始まってしまったが、璃人は別に星の事は嫌いではない。むしろ、好きな部類に入る。ただ、戦いたくないので、話を逸らし、場を乱してトンスラしようとしているのを星は知らない。

「いい加減我慢の限界なんだが、もう始めても良いのか？」関羽さんがこめかみをピクピクさせながら聞いてくる。まあ今まで完全無視だったので、キレるのも無理はないんだが…

「ええ〜と始まらない方向じゃダメですか？オレとしては何のためにもならないので遠慮したいんですけど」

「でも、黄恩くんには私の思いを知って欲しいから 愛紗ちゃんはそのを体現できるし だから、戦ってくれないかな？」平和とか言いながら戦ってという矛盾を言う劉備さん

体現…だと？

他人の理想を他人が体現など出来ようもない。考え方に同調する事はあっても、それを体現などチャンチャラおかしい。そんな仮初の理想など、唯の迷惑だ。

オレが劉備さんに賛同できないのは、彼女の在り方。

理想を描くだけでそれを行動に移す人は他人。人を惹きつけるカリスマ性みたいなものはあるんだろうけど、なんか気に入らない。自分の考えを伝えるのにどうして他人に任せるんだ？

他人に任せる … 彼女はそういう環境で今まで生きてきたのだろう。周囲の人が自分の考えに同調してくれる、誰も否定して来ない、そんな世界を生きてきたのだろう。

だからか … あの人を見た時苛立ちしか感じなかったのは。あの人
が何か言おうとしても、聞こうとも思わなかったのは … それに分
かった事が有る、あの人見て思い出した。

オレはきつと劉備さんが嫌いなんだ。それに同調しているこの目の
前の人も。嫌悪レベルで言ったら、王親衛隊の蛾くらいだな。あ
いつは最初に見た時からムカついた。劉備さんはあいつに似ている
だ。

自分の信じた物を疑わない。疑問に思っても、それを否定する。そ
して、自分と同じ考えにならないと、そうなるように操る。やり方
は違えど、きつと劉備さんも同じ事をするだろう。しかも、無意識
に…そして、皆が笑える世界という妄想で人を操り、自分の過ごし
やすい世界を作るんだろうな

なんだ、やってることは独裁者と変わらないじゃんか（これは璃人
がそう思っているだけで、本当かどうかは定かではない。イライラ
して偏見がかなり混ざっている）

「じゃあ、賭けをしませんか？オレが勝ったら願い事を一つ聞いて
もらいます。そちらが勝ったら、オレが何か願い事を聞きましょう」

「いいよ。私の願いは黄恩君に仲間になって欲しい。」

「関羽さんが勝てたら聞きましょう。オレの願いは後で言います。」

心配しなくても無理な事は言わないので・・・」

「わかった。愛紗ちゃんお願いね」

「お任せください桃香様。関雲長、必ず期待にこたえて見せます」

今回、璃人は弓で戦う事にする。一応手甲なども付けて、接近戦でも戦えるようにしているが、おそらく接近戦にはならないだろう。この人、たぶん春蘭さんよりも弱い 心が

立ち振る舞いからして、強いのは確かである。まともにやり合えば、春蘭さんと同じくらいかもしれない。でも、明らかに心が弱い。

春蘭さんも華琳さんのために頑張っている。方向性はこの人と同じだろうが、在り方が違う。

春蘭さんは、華琳さんの理想を叶えるために頑張ってるが、それはあくまで華琳さんのため。華琳さんの理想を叶える事が目的なのではなく、純粹に華琳さんのために頑張っている。というより、華琳さんの理想を体現するなんて言ったら華琳さんがキレルだろう。

その点、関羽さんは、自分の理想と劉備さんとの理想が同じだと思っっている。そんなはずは絶対はないのに

関羽さんは賊を殺していた。それ自体は良い でも、皆が笑って暮らすを目標にしている人たちが、人を殺すなんて自分の理想に反し

ていないのだそうか？

賊だから？ だったら、自分たちの理想が何の意味もも立いない事を自分達で言っている事になる。

劉備さんの言う“皆”とは自分に都合のいい人間だけなのだろうか？分かってくれないのは相手の所為。自分達は正しいのだから実力行使。おそらくこの人はそれをするだろう。なんて都合のいい理想だから、その理想を掲げる劉備さんや関羽さんには負けたくない。こんな心が弱い人たちに負けるのなんて絶対に嫌だ。

今回の戦いで弓を使うのは、何も相手を舐めているわけじゃない。母上と父上から貰った弓だから、戦闘で使うのは極力避けたかった。でも、あの人にはこれで行く。必ず、この弓であの矛盾だらけの理想を貫く

「準備は良いですよ。やりましょう？」不敵に笑って見せる

「私相手に弓が効くと思うなよ。行くぞ！」二人の戦いが始まった。

第13話 璃人の願い

「私相手に弓が効くと思うわんことだな！」

「あなたこそ、舐めていると痛い目に会いますよ！・・・疾！」突っ込んでくる関羽に矢を放つ。基本璃人は速射が得意ではないが、一回に三本放てる。

例えば、秋蘭は璃人が一回放つ間に二本放てる程の速さで射れる。璃人が2回放つと6本の矢、秋蘭は3回速射する事になる。期待値計算すれば、璃人の方が高い。それに、三本同時に放つても璃人の命中精度は落ちないので、実は相手にとっては脅威だったりする。しかも、これが、集団で見つけた動物を狩るために身につけたというのだから、弓を扱う物からすれば納得もいかないだろう。璃人からすれば生きるために身につけたものなのだが

放たれた矢は3本すべて、関羽に飛んで行く。偃月刀を使いながらでも、三本の矢を正確に防いでいく。やはり、技量は確かなものだが、これが、一体いつまで続けられるか…勝負！

璃人は、時には緩急をつけ、関羽が躲すのを難しくさせる。関羽自体も、そのせいで、なかなか近寄れない。苛立った関羽がなにやら叫ぶ

「そんな遠くから、攻撃して武人として恥ずかしくないのか！」

「は？オレは武人だなんて一言も言ってませんし、それに、弓を主

体とする武将の人だっているでしょう？あなたはその人たちにも弓を使うなって言うんですか？」

「し、しかし、これは一対一だぞ？正々堂々と打ち合いをだな・・・」

「撃ち合ってるじゃないですか　疾！」話している間も手は休めない

「くっ、ひ、卑怯だぞ！」

「さっきから、何を言ってるんですか？話しかけてきたのも、油断したのもそっちでしょ？バカなんですか？」

「バ、バカ　だと?!」

「だってそうでしょ？弓兵に弓を使うなんて、私弓相手だと勝てないから、使わないでくださいって言うてるようなものじゃないですか?.....あなたが、惨めなので止めてあげても良いですよ?」挑発する事を忘れない。こういう手合いは苛立たせればすぐに冷静でいられなくなる

「フ・・・わ、私を挑発しても無駄だぞ。」

「その割には焦ってますけど...ね!」関羽目掛けて矢を放つ。当然避けるが、今回はスピードを重視し、念を使ったので関羽も完璧には避けきれなかった。

態勢を崩し、膝が落ちる。その隙を璃人が見逃すはずもなく、無防備に出された偃月刀を射ぬく。偃月刀は関羽の手を離れ、これで、勝敗が決まった。

・
・
・
「オレの勝ちですね」

「ああ、私の負けだな。 私はなんと無様だ！桃香様の…」
関羽が続けようとしている所を璃人が防ぐ

「そもそも、それがおかしいんですよ。理想の体現？笑わせないでください。あなたのやっている事は理想とは全くかけ離れた唯の殺人です。」

「な?!」

「だって、そうでしょ？オレと初めて会った時、あなたと張飛ちゃんとは賊すべてを殺しました。別にそれ自体は構いません。彼らもそれだけの事をしたのでしょうから、同情の余地はありません。ただ」

「…」睨みつけるようにこちらを見る関羽。実際、この話はさつきもしたんだけど…

「ただ、皆が笑顔で平和にを謳っている劉備さんが、賊だからと言って皆殺しはどうなんでしょう？劉備さんは、あなたが自分の理想を体現できると言っていましたか、本当にそうなのでしょうか？

 だったら、あの人の理想は絶対に叶わない。 だって自分が叶わないと思っっているんだから」

「そんな事はない！桃香様の理想は必ず叶う！」

「じゃあ、皆殺しにされた賊は？その仲間は何？笑って暮らせるのですか？ 無理です。 先程も言いましたが、無理なんです

よ、皆が笑う世界なんて。そもそも、あなたの理想とあの人の理想は大きく違う。 平和ってなんだと思いますか？」

「 皆が笑って、争いのない世界ではないのか？」

「そうですね。じゃあ、それを成し遂げるにはどうすればいいと思いますか？」

「桃香様が統治する！」

「在りえませんね。そんな事になったら国が乱れます。」

「き、貴様！」

「だってそうでしょう？オレは先程、平和的解決を促したのに、あの人は“戦って”と言いました。話し合いではなく戦闘で思い伝えようと思いました。しかも、自分ではなく他人が。こんな矛盾を抱えた人が、誰かの上に立つなんて、民にとっては不幸以外の何物でもない。だって、平和を信じて集まったら、結局戦争しましたじゃ、話にならない。」

「……」

「あなたもよく考えてみてください。本当にあの人の理想は実現できるのか？本当に自分はその目標を目指しているのか？ ……妄信

は身を滅ぼしますよ…」

「わかった。桃香様と話してみる」関羽も思う所があったのか、話し合う事にしたらしい。

関羽さんとの話を終えて、星さん達の所に戻る。星さんは満足そうな顔を浮かべ、劉備さんは少し残念そうだ。張飛ちゃんは……笑顔なのでよし！

「私を忘れるな！」あ、そう言えばいたんでしたっけ、ハム子さん
「…忘れてるわけじゃないですか？アハハハ」オレにつられて、張飛ちゃんも笑っている。

「まあ良いだろう。けど、私は「黄恩君！」桃香」私がまだ話してるんだぞ的な視線を劉備さんに向けるが、普通にスルー！
…絶対この人たち友達じゃないよな…

「ええ〜つと何ですか？人の会話を遮ってまで」

「あ、それはごめんね。あのね勝負の前にした約束なんだけど…」

「ああ、その事ですか？ オレの願いはただ一つ。劉備さん」

「ん、何？」

「義勇軍を解散してください」

「え?!　ごめん、もう1回言ってくれるかな?」璃人の言った事がうまく理解できなかったのか、予想外の事で慌てたのか、おそらく後者だが、普通に聞き返してしまう桃香

「だから、義勇軍を解散してください。ああ、正確にはまだ軍は発足してないので、義勇軍を作るのを止めてください。」

「ど、どうして?!」

「あなたは人の上に立つ資格がありません。オレが言うのも何ですけど…」

「お、おい黄恩!言い過ぎだぞ、桃香はな　「白蓮ちゃんは黙ってて」　な?桃香」もう完全にこの二人は友達ではないだろう。折角庇ってくれたのに…

「それで、何でそんな事言うの?私は皆を助けたいんだよ。それはいけない事なの?」

「いえ、あなたの考えは素晴らしいと思います。　ただ、問題はあなたに有ります。」

「私?」

「あなたは弱き民を救いたいから義勇軍を作っていると言ってますが、じゃあ、弱くなかったら、助けられないんです?そもそも弱いって何が基準ですか?武力ですか?　それなら、あなたにだってない。…知力ですか?…失礼ですがそれもあるようには思えません」

「うっ、その通りです」自分が何も出来てないという事を痛感し落ち込んでいます

「先程の基準で言えば、あなただって十分弱き民です。」

「……」

「オレはあなたが強いとは全く思いません。でも、関羽さん達は自分の主として認めている。そう、弱いや強いなんて人の価値観です。なら、あなたの言う弱き民とは自分よりも弱い人ですか？そう言う人を助けて優越感にでも浸りたいんですか？」

「ち、違っよ！わ、私は困っている人達を……」

「そんなこと言ったら、困ってない人なんていない。オレだって困っている事があります。あなたにオレが救えますか？」やれるもんならやってみるといふ顔で劉備を見る

「……」無力さを感じる劉備

「別に困っている人を助けるなど言っているわけではありません。ただ」璃人は一拍置き

「あなたが仮に王様になったとしましょう。政策は考えられなさうだから、きっと優秀な軍師が立ててくれるでしょう。しかし、最終的にそれを決定するのはあなただ。あなたの判断で国の未来が変わると言っても良い。戦をするに当たってそうだ。あなたの判断で多くの人の命が失われる。あなたにそれを背負う覚悟が有りますか？あなたを信じて集まった人が、死ぬような命令を時に出さ

「星さん…どうしましょう？言いたい事だけ言って逃げてきちゃいました。」

「お主は良い時と悪い時の差が激しすぎるぞ。あんなに堂々としていたのに…」呆れる星

「でもさ、オレ人の事言えるようなやつじゃないのに 何様だよ」

「そんな事はないぞ、璃人よ。私もお前から学ぶ事は多い。それに、私を助けてくれた時だって、戦いに参加などする気はないと言いなから、助けてくれたではないか。わざわざ嘘までついて」

「やっぱ、バレてました？」

「当然だ。あんな山道を登るやつはおらん。大方、私達が心配で見に来てくれたんだろ？」

「まあ、バレちゃったから、隠しても仕方ないですね。ええ、そうですよ。最初は見学のもりだったんですけど、勇敢な人が突っ込んで行ってしまったので助けに入りました。知り合いでなければ見過ごしてたんですけど…」若干バツの悪そうな星が

「嘘をつけ。お前は知り合いでなくても助けていただろ？口で言ってるだけで、基本お前は善人だから、そんな事はできまい」

「否定し辛い所です。…でも、自分の命を危険にさらしてまで助けようとは思いませんよ。基本オレは人が嫌いなんです」

「そう言えば、お前はそのような事を言っていたな。言い辛い

なら言わなくて良いが、なぜ人が嫌いなんだ？」興味と言うより、璃人をもっとよく分かりたいというような顔で星が聞いてくる

「まあ …… なんとというか、オレの体質の所為です。オレの出身って言いましたっけ？」

「いや」

「益州です。益州にある風習って知ってますか？」

「聞いた事が有る。なんでも、赤目が不幸を呼ぶとされていると」

「そうです。星さんも赤目っばいですけど、オレのはもっと赤いんですよ。遠くからでも見えるくらい。 なんとというか赤く光ると言った方が正しいかもしれません。」

「また、冗談か？ 私はそう言う冗談は 嫌い だぞ」冗談はよせと言おうとした星だが、璃人の雰囲気が変わるのを見てしまった。いや、雰囲気もそうだが、綺麗に光る目に魅入ってしまった。

「これが、オレの体質。今は自分で操作できるけど、昔は感情が高ぶると出てくるもんだった。それに、この状態になると若干性格が変わる…… どうでした？ オレの目」緋の目の発動を解除し素に戻って尋ねる。

「……」

「まあ気持ち悪いですよ 急に眼の色が変わるなんて」

「……いや、そんな事はない。むしろ、綺麗で魅入ってしまったくら

いだ。他の者がどういふかは知らんが、私は好きだぞ、璃人の目。私も赤いしな」璃人の目について気にしない人は何人かいたが、好意を向けられたのは、いつ以来だろうか？ 星さんの言葉がすごく嬉しい。この目はオレにとって決して良いものではなかったから…

「ありがとうございます。そう言ってもらえて何よりです。」心から感謝を述べる

「ほ、私に惚れ直したか？」ニヤッと笑う星

「ええ、そうかもしれません。貴女となら」

「な?!」璃人の真顔が星にとってはかなり危険だった。普段の璃人はオドオドした感じが目立つのだが、いざという時は男前な顔をする。もともと母親が美人なので、璃人の顔もしっかりとしていれば非常にカッコいいのである

「貴女となら良い御友達でいられそうです どうしたんですか？ そんな顔を赤くしちゃって…はは、くん、もしかして期待しちゃいました？」

「そ、そんな事はないぞ?!ただ」焦りまくる星

「冗談ですよ。星さんじゃオレには勿体ないですから。ただ、さっき言った事は嘘じゃないですよ。さっきの星さんなら惚れてたかも知れませんが。その後の慌てぶりがなければですけど」

「り、ひ、と」星が珍しく怒ってしまったようだ。

とりあえず、璃人は謝り、星を落ち着かせる。新メンマ井で手を打った。そして、本題に戻る

「で、さっきの雰囲気からはあれなんですけど…この目の所為でオレは益州を追い出され、ここにいます。幼少期から、睨まれたりしたんですけど、オレが追放された頃は賊や天災が多かったため、憎しみの対象がオレに向いた訳です。人は何かの所為にしないと生きていけない生き物ですから…」

「お前を助けてくれる人はいなかったのか？」

「…いました。父と母、それに母の友達の人です。父は既に病で亡くなってますが、母は存命なはずですよ。だから、オレは人が嫌いです。ただ、世界のすべての人が嫌いなわけじゃない。星さんみたいな人もいるわけですから…」

「お主が劉備殿を嫌う理由はそこに有るのか…確かに、お主の様な人間からすれば、劉備殿はただ、偽善者。辛い事を経験して来なかったお嬢様だからな、嫌うのも当然と言えば当然か…」

「まあ、そんな所ですね。少し、妬んでいるのかもかもしれませんが…苦勞を知らない人間に、救ってやるなんて言われても腹が立つだけです…結局あの上から視線が気に入りません。それも無自覚なのが余計に…」

「あい、わかった。璃人にも辛い話をさせて悪かったな。お前がこ

こを出て行くのも仕方ないだろう。私も伯珪殿に言っておかなければな。」

「何を？」

「そんな事決まってるではないか！私も璃人について行く。璃人の母上にも会いたいからな」

「え?!」

「将来の母親に挨拶しておくのはおかしな事ではないだろう？」

「そこじゃない！何で星さんがついてくるかもそうですけど、オレが何で益州に行く事になっているんですか?!オレ益州追放されているんですけど」

「そんな物、そうそうバレはしまい。別に長居する訳ではないのだ。挨拶してすぐに出れば問題ないだろう」

「で、でも…」

「璃人よ、お前母上に会うのが嫌なのか？」

「!!!」星の何気ない発言が璃人に突きささる

「凶星か」

「…オレの父が病死した時、すごく嫌な奴に言われたんですよ。オレの所為で死んだんじゃないかって。最初は、迷信なんて信じていなかったですけど、オレの所為で家族が不幸に会ったの事実です。」

オレが出て行かなければ、家族も追放と言う事になりましたし…。

当時、母にはオレの妹か弟がお腹の中にいて、オレと一緒に出ようとしてくれたんですけど、オレが断りました。父との約束と言う事もあり家族を守るために出て行くと言いましたが、ただ、母と一緒にいるのが、気まづかったただけなのかもしれませぬ。旅立ちの時も、お別れは言っませんでしたから…。」

「なら、尚の事会いに行かなくてはな。お主の母上もさぞ心配しているだろう。そんな心配そんな顔をするな。璃人の母上がお前を嫌うわけがなかるう。お前と共に出て行くうとしてくれた立派な母上じゃないか」

「そうですね。オレも、気にはなっていましたし、久しぶりに会いに言ってみようかと思えます。一人では不安なので付いてきてもらえますか？」

「初めから、そう言ってるじゃないか。お義母様に挨拶しなくてはな」

「変な言葉が混じってるように聞こえるんですけど…」

それで。準備をして、ハム子さんの下に向かおうとしていると。兵士の方が星さんの部屋にやって来て、至急、広間に集まってくださいと言うので、とりあえず向かう事にする。オレが付いて行く必要はないんだけど、何かその場の流れで

広間到着

中に入ってみると、ハム子さん以外に、劉備さん達がいた。劉備さんはこちらを向いた瞬間に何かを言おうとしたようだが、結局なにも言わず、顔を逸らした。

星さんが事情を聴くためにハム子さんに話しかけたが、どうやら、近くで賊が出たらしい。その討伐依頼が来たようだ。星さんはまだこの客将のため。この討伐に参加する。オレも、自分で試験を頼んでおいて断ろうとし、あまつさえ、星さんを連れて行こうとしているので、申し訳なく思い、参加する事にした。遠くから矢を射るだけだけど…

「それで、桃香はどうする？」

「わ、私は…」一度こちらを見る。そして、何かを考えるように

「私も行く！愛紗ちゃんや鈴々だけ行かせるなんてできない」

「足手まといです。貴女に何ができるんですか？武芸に秀でてるわけでも、軍略に秀でているわけでもない。そんなあなたが戦場に立った所でなんの役にも立たない。」一料理人の立場の発言ではないが、ここで言うておかないと邪魔になる。ハム子さんは、この人を気遣って、護衛に何人が回すだろう。そんな無駄な戦力はない。

「だ、大丈夫だよ。皆の迷惑になるつもりはないから。」

「どうやって？」

「それは」

「私が桃香様に付けばよい」関羽さんが割って入る

「劉備さんを庇いながら戦えるんですか？オレと出会った時でさえ、庇いながらでは苦戦していたのに。今回はあの時以上の数ですよ、できますか？劉備さんも自分が足手まといになることくらい自覚してください。関羽さんが、貴女を守ること、でなくて良い被害が出るかもしれません。まあ関羽さんの主は貴女なので貴女が決めれば良いのですけど」

「…愛紗ちゃん御免ね。愛紗ちゃんには多くの人を助けて欲しいから、私の事は守らなくて良いよ。」

「しかし、桃香様！」

「なら、黄恩の下に桃香を置けばいいだろう？黄恩は狙撃するだけだから、前線には行かない訳だし」今まで空気だったハム子さんがなんか言っただけ」

「嫌ですよ。確かに前線には出ませんが、それでも非常事態と言うのは有ります。そんな所に…」

「それもそうだが、お前が、狙撃に集中して周りから誰か近づいたら気づかないかもしれないだろう？だったら桃香を置いておいた方が良い。」

クツ、以外に正論だ。円を発動しながらやると体力消耗が激しいので、周囲に警戒をしてくれる人がいるのは確かに有りがたいが…

「璃人よ、諦めろ。伯珪殿の言う事は理にかなっている。こういう

所で我を通すものではないぞ」星さんに言われてしまったては仕方がない。

璃人は不快感を感じながらも、今回の決定を了承し、戦う準備を始めるのだった。

第14話 再会と旅立ち？

劉備さんという千里眼（偽）を伴い、戦場に繰り出そうと城下を出ようとした時、二人の幼女とおばあさんが賊に襲われているのが見えた。しかも、あの特徴のある服と帽子はすごく見覚えがある。何やってんですか先輩方…

二人を助けるために璃人は弓を構える

幼女×2視点

「はわわ、おばあさん、あともう少しで、公孫贄さんの治める城下でし。だ、だから、頑張ってください！」朱里がおばあさんを励ましながら走る

「すまないねえ、お嬢ちゃん達。でも、私の事は良いから二人とも早く逃げな。」

「そ、そんなことはできません！私達はこういう理不尽で苦しむ人を助けるために故郷を出てきたんです。ここでおばあさんを見捨てる事は、私達の目的も失う事になります。まだ、諦めるには早すぎましゅ！」最後囁んで良いセリフを台無しにしてしまうあたり離らしいとも言える。

「でも、このままだと、お嬢ちゃん達まで」

「いざとなったら戦います。昔、護身術をならっていた事もあって、

少くらいなら時間は稼げます」璃人に少しだけ手ほどきを受けた二人は元来の真面目さから、璃人が去った後も鍛錬を続けていた。いつか成長した自分たちを見せたいという思いもあつてだが…

璃人が二人に教えたのは棒術。攻撃はあまり教えてないが、相手の力を利用する合気道は教えてある。璃人がジャポンを旅している時にならったもので、背の低い二人が力で勝つのは難しいし、筋力トレーニングもこの二人にやらせても無駄だろうと、この武術を教え

た。
だから、二人は相手の攻撃を受け流す事はできる。そして璃人は受け流した後、一発で倒す必殺技を伝授し、二人の護身術を完成させる

「へへへ、嬢ちゃん達随分と勇ましい事言うじゃねえか？婆は金目の物奪い取ったら殺せばいいが、嬢ちゃん達は上玉だから……オレ達で楽しんだ後、どこかの金持ちに売払ってやるよ。へへへ嬢ちゃん達はその陳けな棒で頑張んな」汚い笑い方をした男どもが朱里たちを囲む。

「……………」二人はおばあさんを後ろに庇い、棒を構える。

「野郎ども、あんまり傷つけるんじゃねえぞ！後で楽しめなくなっちゃまうからな」下卑た顔が余計にひどくなりながら朱里たちに迫ってくる

賊はまず、朱里たちを確保しようと剣を抜かず、二人に迫ってくる。幼女二人の棒など、多少我慢すれば大丈夫と踏んでいるのだろう、そのまま突っ込んでくる。

だが、以前の朱里達とは違う。突っ込んできた賊の足をめがけて転ばせ、倒れた所に全力で棒を叩きつける。

「おhgれじえるj」賊の二人が悲鳴とも言えない叫びを上げながら泡を吹いて倒れた。

「て、てめえら…それはダメだろ」

「手段を選んではありましえん。」

「（コクコク）」朱里が少し嘸みながらも賊に対し言い、雛里はそれに對し同意する

周りにいた賊たちは一斉に退く…股間を押さえながら。

璃人が教えた事は、相手の攻撃を受け流し、態勢を崩したら迷わず股間を狙えという事。むしろ潰せと言っていた。

元来腕力に恵まれない二人が大人の男に勝つには、急所を狙うしかない。顔や頭は二人の伸長や元来の優しさの所為で狙えない。しかし、男にはもう一つ弱点がある。二人の背丈でも十分狙えて大ダメージを与えられる場所。つまり金的である。

最初、璃人に教えられた時は、恥ずかしがってできなかったが、璃人が捕まえた商人のオッサンが脱走したのか釈放されたのかわからないが、水鏡塾に復讐しに来た事が有った。その時、何人か連れてきたので二人の実戦にちょうど良いと二人に戦わせてみた。

相手もただの素人なので二人も習った棒状で対応していたが、決定打がない。そこで、璃人が石を投げ一人の男を転ばせ、序に朱里も足を掠めて転ばせた。ちょうど、棒が股間に当たるように

朱里は急に目の前の人 が倒れ、自分も転びそうになったので、なんとかして態勢を立て直そうと、棒を地面に叩きつけて、踏ん張ろうとした。しかし、朱里が捕らえたのは地球という玉ではなく、男の象徴であるゴールデンボール。しかも全力で振り下ろされたため、先程の賊と同じように、泡を吹いて倒れた。その光景を見て動きが固まったオツサン達に璃人は同様の手口を仕掛ける。

雛里に指示した事は一つだけ

「あわわ先輩、目をつぶってもなんでもいいから下から全力で払い上げてください」

璃人の指示に素直に従い全力で払う。そうして雛里が払ったその先にはまたしても、ゴールデンボールが有った。威力は弱くとも急所に喰らった事で男が倒れる。

大の男が簡単に倒れたのを見て、二人は顔を見合わせ頷き。残りの玉をすべて潰した。

それ以来、荊州のとある町で不埒を働いた男が股を押さえながら、気絶していたという目撃情報がたびたび寄せられた。

その現場を見ていた町の人は二人の幼女を“紅いホムランの葬らん”と名付

けた。二人の持った棒が赤く染まっていたらしい事と正確にボールを捕らえる事からその名がつけられたらしいが、詳細は不明

「野郎ども、剣を抜け！あの嬢ちゃん達はオレ達男にとって危険な気がする。上玉だが、ここで生かせば確実に潰されるぞ！」その声に周りの賊が反応して剣を抜く。男としての本能がそうさせるんだろう

「あわわ、朱里ちゃんどうしよう？！私達こんなに相手には出来ないよ」剣を抜いた賊を見て雛里が慌てる

「はわわ、でも、あと少しすれば、軍が来てくれると思うから頑張ろう雛里ちゃん」朱里も焦っているようだが、遠くの方に見えた軍を見て、そこまで粘ればなんとかなると、雛里を励ます

「そ、そうだね。頑張ろう朱里ちゃん」

二人はとにかく守りに徹し隙が出来たら潰すという作業を繰り返した。だが、元々武官であるわけではないので、賊の数が増えた事で手に負えなくなった。

雛里が相手の攻撃を避けようとした際に倒した賊に躓いて倒れる。そのスキを見逃さず、賊が雛里に剣を振り下ろす

朱里が叫び、雛里がもう駄目だと思った瞬間

「v k d s ん ぐ あ あ s じ ょ h を」今まで散々聞いてきた悲鳴が聞こ

えた。雛里を殺そうとしていた男の股間に弓矢が当たっている。訓練の矢の用で、先の矢じりがなく重り代わりの石に変えられているが、股間に当たってしまったては関係ない。

そこから、数秒と経たず雛里や朱里の周りにいた男たちの股間に正確に矢が当たっていく。近くにいた賊が全て気絶し、雛里たちは何が起こったのかよく分からずそのまま腰を抜かしていた。

- - - - -

「ハア、これで大丈夫だろ。先輩たち 意外と強くなっていたな」
「あの賊たちは死んだな 男として」

「襲われた人達、大丈夫なんですか？」

後ろについていた劉備が璃人に話しかける。どうやら心配だったらしい

「はい、尊い犠牲の下に3人は無事です。無事でないやつらが若干名いますが…」

「何かあったの？なんかよく見えないけど 股を押さえて倒れているような気が…」

「気のせいです。それと、あまり前に出ないでください。邪魔です」

倒れている人を見ようと劉備が前に出て見ようとする。今二人がい

るのは少し高い岩の上。それなりのスペースが有るが、動かれると邪魔なので注意する

「あ、ごめんね」言われて下がる劉備

「とりあえず、劉備さんはそこで見ていてください。矢の補充はお願いします。」今回の劉備の仕事は周りを見ることと矢の補充。璃人の持つている矢が尽きたら、他の矢を渡し、それを繰り返す。自分も何かの役に立ちたいと言って璃人に頼んだ事だった。だから、今はたくさんの矢の入った筒を抱えている。

「ここからは、人が死にます。覚悟は良いですか？貴女はこれから人殺しの一端を担うんです。自分の意思で 貴女の理念に反しますけど」

「うん、私はちゃんと見なきゃいけない。今まで愛紗ちゃん達に任せてきた部分を ううん、自分で避けてきた部分を。きつと私は気づいてたはずなんだ。皆を救うって言いながら人を殺しているという矛盾に…でも、それを見ようとはしなかった。今まで自分がどれだけ幸せな生活を送ってきたかが分かる。私の見ていた世界はこんなにも小さかったって事が。皆が、幸せになれる世界なんてない」

「…それが答えですか？」

「ううん。確かに、皆が幸せになる世界はないのかもしれない。でも、なら出来るだけ多くの人がちゃんと生活できるようにしたい。理不尽な事で死んでしまったりする事がない様に 皆が選べるよ

うな世界を私は作りたいと思う。自分の事は自分で決められるような…」

かつて、璃人が朱里たちに言った言葉。自分が選択できるような世界。つまり、選べるだけの豊かさが有り、理不尽さが無い世界。しかし、これも理想論。理不尽のない世界はどこにもない。何かしらの理不尽と言う物は有るものだ。それが、親の決めた事であったり、宗教上の事であったり、古くからの風習であったり…

それをなくそうとする事は、限りなく不可能だ。でも、ゼロじゃない。璃人は諦めてしまったが、劉玄德は諦めないようだ。

「今の貴女にそれができるとは思えません…」

「そうだね。私には、黄恩君が言った王様になる資質はない。でも、私は王様になりたいんじゃない。皆が安心して暮らせるような世界を作りたいだけ。それができるのなら、私が王様である必要はないと思うんだ。」

「結局、他人任せですか？」

「ううん。私にできる事はちゃんとする。こんな私でも付いてきて来る人がいる。ちゃんと話したんだ、二人と…。こんな私にどうして付いてきてくれたの？って、それで、二人から、同じ答えが返ってきた。」

「桃香様（お姉ちゃん）には人を惹きつける物が有る（のだ）！」

「！」

確かに、この人には良くも悪くも人を惹きつけるだけの何かがある。カリスマ性と言うやつだろう、華琳さんとは違えど確かに持っている。ただ、それだけで、王になれるのなら、有名なアイドルが国を治めるのと同じだ。アイドルにだって人を惹きつける物を持っている。だが、そんな事が起つたら、間違いなく国が乱れるだろう。

「でも、それだけじゃ国は守れない。逆にただ人を惹きつけて行けばそれは争いの種にしかない。そして貴女はその可能性を十分に持っている。」

「うん、だから私は」

「……！……すみません、こちらものん気に話している場合じゃあ、なくなつたようです。準備してください」

劉備が何か言おうとしたけど、賊と公孫贇軍が戦闘になりこちらも戦闘準備を開始する。味方を射ないように、敵だけ射抜いて行く。関羽、張飛、公孫贇、趙雲の率いる軍を避け、援護に入ろうとした賊だけを撃ち抜いて行く。

賊の方も、援護がなかなか来ない事に焦り、徐々に崩れ始める。その隙を見逃す猛者達ではないので、一気に攻め込み、賊は壊滅した。璃人の方も矢をほとんど使い切り、何もする事が無くなったので、一息つく。後ろの劉備は賊が死んでいるのを、今までとは違う心境で見ているのだった。

-
-
-
-
-
-
-
-
-
-

戦後の処理も終わり、今オレは、城でのんびりとしている……
・・なんて事は無く、二人の幼女の前で正座させられている。

「璃人君、ちゃんと話を聞いていますしゅか!？」

「まだ、その噛み噛み口調直ってないんですね、あわわ先輩」

「あわわ、その名前で呼ぶの止めてください!」

「その口癖がなくなったら、考えます」

「考えてくれるだけなんですネ … あれ、前にもこんな事が有った
気が…」 雛里が自分の顎に人差し指を付けながら考えているが、ど
う見ても子供にしか見えない。まあ、外見は完璧な子供だからあれ
なんだけど

「はわわ、雛里ちゃん、璃人君の話に巻き込まれちゃダメだよ。
そうやって話をはぐらかす事に関しては天才的なんだから!」

「そ、そうだね、朱里ちゃん」

「お二人の中のおレって…」

「嘘つきでいじめっ子!」

「正解です。まあ、お二人に言われた所で、どうという事はないん
ですけど…」

「「り、璃人君!」」

「え？こつて怒られる所なんですか？」と幼女を弄っていると、何やら楽しそうな星さんが話に入ってくる

「璃人もなかなかやるではないか。こんな美少女を二人もとはな・・
・お主、そつち系の趣味が有るのか？まあ、お主にそのような趣味があつても、一向に構わんが、これなら、私に反応しないのも頷ける」

「星さん、そつち系の趣味ってなんですか？」

「ん？幼女を好む……」

「まさか、星さん、そんな想像を？ちよつと近付かないでください。この状況をみて、まさかそんな想像をするなんて、稟さん以上に変態ですね。ちよつとガツカリです」

「え、お、おい、ちよつと待て璃人！私はただ」

「ぎゃあああ！！襲われる〜！！変態さんに襲われる〜！先輩方、お逃げください、この変態さんはオレがなんとか食い止めますから！」そう二人に指示し、璃人は二人の前に立つ

「…璃人君、そこまでにした方が良いでしょう。なんか、すごく落ち込んでいますよ」雛里に言われて、星の方を見ている璃人。そこには両手両膝をついて、落ち込んでいる星がいた。しかも、若干泣いている。稟さん以上の変態と言つ言葉がまずかったのだろうか？

「せ、星さん、冗談ですって！まさか、星さんにそんな事を言うわ

けないじゃないですか、ハハハ」

「プイ」星と同じ視線で話そうと目の前に座ったが顔を逸らされてしまった。

「機嫌直してくださいよ、ほら、メンマ丼も作りますから」

「私はそんな安い女ではないぞ。毎回メンマで釣れると思ったたら大間違いだ。私の心は深く傷ついたんだ、どうしてくれる?!」

「ハア、オレにどうして欲しんですか？」

「私を嫁に」

「却下です。それと、星さんそれ演技ですね?いつからですか？」

「璃人が私を嵌めようとした辺りだ。最初は否定しようと思ったが、それをするとますます、璃人が有利になりそうだから、落ち込んだふりをして璃人の立場を悪くさせよう…」

「悪女だ、ここに悪女がいる。星さんそうやって、男から金を巻き上げて行くんですね。涙まで使って」

「女の涙は武器になるということだ。」

「良く覚えておきます。」

そんな風に星と話していると服を引っ張られる。どうやら、事情が

あまり呑み込めず、説明を求めているらしい。

「はわわ先輩、あわわ先輩、こちらはオレの友達の趙雲さんです。そして、星さん、こちらは、昔少しだけいた、私塾の先輩方です。丸い帽子を被っているのが諸葛孔明先輩で、尖った帽子を被っているのが鳳統士元先輩です。」

「うむ、璃人の妻だ。よろしく頼む」

「つ、妻!？」

「り、璃人君結婚したんですね?おめでとつございましゅ」

「先輩方、人の話聞いてました?オレの友達って言ったんですよ。星さんに関しては　オレと同じような感じだと思ってください」

「「納得です」」

「む、私は璃人と違って嘘などつかない正直ものだぞ!心外だ」

「初対面の人間に嘘を吐いている人の言葉ですか!ホント、璃人君にそっくりです!」

「ハハハ、孔明殿、照れますな、私と璃人がお似合いだななどは…」

「あの人の耳は腐っているんで気にしないでください」

「璃人よ妻に向かって言う言葉ではないぞ」

「ええ、妻ではないですから。それで話は戻るんです

けど、お二人はどうしてここに？水鏡先生は？」

いきなり、話を戻した璃人。これ以上星と話しても進展がないと思
ったようだ

「はわわ、私達は自分たちの力を役立てるために、水鏡先生の下を
出たんです。それと、璃人君を探しにも」

「オレを？ どうしてまた？ ちゃんと手紙にも書いてあっ
たでしょ、料理修業の旅に出ますって」

「あんな話の後出ってたら、気になりますゆ！私達の所為かと…」

「あわわ先輩、それはないので気にしないでください。それと、今
かなり噛んだと思うのでそっちを気にしてください。ほら、あくん」

「あくん」何の抵抗もなく口をかける雛里。私塾にいた時もこうし
て、璃人が見ていたので雛里に抵抗感はない

「・・・これなら大丈夫ですね。でも、先輩方も変わりませんね、
相変わらずだ。ホントに舌を無くしますよ？少なくとも食事が摂れ
なくなります 主に痛みで」

「」「うっうっ」「自覚のある二人

「あのく悪いんだが、そろそろこちらにも混ぜてくれないか？状況が
わからない」ハム子さんが話に入ってくる

「ああ、この二人が世直しの旅に出てきたらしく、士官先を探しているようなんです。後ついでに迷子探し」

「迷子？」

「ええ、人生という道に迷ってしまった少年探しも兼ねているようです。…ちなみにその少年はオレです。昔、この先輩方には散々虐められた物です」

「嘘いわないでください!!」

「私もそれは無理だと思っぞ。お前がこの二人にいじめられる姿が想像つかない。逆なら分かるが」

「さすがは、太守様、見事な慧眼です」

「それは、褒めているのか？」

「ええ、勿論」

「ま、まあ、褒められているなら良いか。それで、二人はここに仕官しに来たのか？」

「ええ〜っと…」朱里がちょっと言い辛そうにしている。

その気配を感じ取った璃人は、こちらで説明してやろうと思った・・・善意です

「お二人は、賊に襲われて、たまたまここに来ただけのようです。公孫贇さんの事を知ってきた訳じゃないと思います」

「ハハハ・・・やっぱりそうだよな…私なんて…」

「はわわ、璃人君、言わなくても良い事を」

「え？言い辛そうにしてたから、オレが言った方が良いかなど思っただけ、言わない方が良かったですか？」

「う、うん」

「あちゃー・・・公孫贇さん今の無しでお願いします」

「できるか!!」

その後、落ち込んだハム子さんを星さんと劉備さんが慰め、オレは二人との会話に戻る

「それじゃあ、何しに此処に？他にお目当てになるような人、いましたっけ？」

「ここら辺で義勇兵を率いているという噂を聞いて、その人を見に来たんです。確か劉備玄德さんというかたですね。村で噂になっていました。」

「へえ」　まあ義勇軍と言っても3人ですけどね。ちなみにあそこにはいますよ」劉備の方を指さす

「　あの方ですか？　　ちよつとお話してきますね。離里ちやん行こう」

「うん。じゃあ璃人君また後でね」そう言っつて劉備の方に向かう二人。

璃人は、公孫贄が落ち着いたのを見て、今回の仕事の件をなかつた事にしてもらいたいと言ひ、公孫贄もそれを了承した。かなり残念がつっていたが

その後、星が璃人について行くと言つたら、公孫贄は快く応じていた。きつと星にはいろいろと苦労を懸けられたんだろう。主にかいかいで…

思い残すことはもうないので、旅立とうとしたらまたしても劉玄德が話しかけてきたのだった。

第15話　まだ心の準備が……

「あのね、黄恩君、話が有るんだけど良いかな？」いつもより引き締まった顔をする劉備

「先程の事ですか？」

「うん」劉備の顔がいつそう引き締まる

「まあ、急いでいるわけじゃないですけど、星さんは構いませんか？」

「私は別に構わんぞ」

「らしいです。ではどうぞ」手をひっくり返して劉備に話す事を促す

「さっき言ったじゃない？私が王様である必要はないって」

「言っていましたね。それで、その話が何の関係が有るんですか？」

真剣な表情をした劉備が力強く言う

「……私を黄恩君に仕えさせてください!!」

「……は？」璃人の頭の中がショートした。何をどうやったらその結論にたどり着くのか意味がわからない。

「私は貴方に仕えたいと思いました。貴方なら皆を幸せに出来ると思うから……」

「いや、無理ッス」璃人は淡白に答えた

「え??」

「だから、無理ですつて。オレ人を従えるとか出来ませんもん。」

「でも…」

「それに国を平和にしたいとは思いませんし」

「な、なんで!??」

「いや、別に国を乱したいわけじゃないですよ? ただ、他

人のために命を懸ける気がないだけです。平和で有る事は良い事だ
と思うけど、そのために自分の人生を台無しにする気はないです。

オレは今度こそ自由に生きたいから」

「……………」

「だから、他を当たってください。最近噂の天の御遣いとやらが袁
家に現れたというじゃないですか、その方も当たれば良いんじゃない
でしょうか?」

「それは止めておいた方が良いでしょう!」朱里登場

「とぅいっつとっ…」

「私と雛里ちゃんはここに来る前に、袁家にも寄ってみたんですけど…酷いものでした」

「天の御遣いがいるのに？」

「その天の御遣いが問題なんです。袁家の権力を利用し好き勝手やっつてみたいですよ。町では気に入った子を自分の閨に引っ張り込んでいると言われているくらいです。実際、私と雛里ちゃんもそうなりそうになりました。」

「あれは怖かったよ」雛里が思いだして震える

「でも、護身術でなんとかなつたでしょう？」

「はい…でも、仮にそこで危害を加えてしまつたら私達は殺されてしまつ可能性があるのでは…」

「でも、それじゃあ、どうやって逃げてきたんですか？」

「袁家の顔良さんと文醜さんに助けてもらいました。あの二人は天の御遣いさんの事を嫌っているようでしたので…どうやら、袁家の主である袁紹さんが骨抜きにされたようです。その事を二人は快く思っていないようです。」朱里がそこでいったん止め雛里が続ける

「そんな状態の袁家だから、町はかなり荒んでました。特に町の女性たちの目が」

「いつ襲われるかわからないし、襲われたら抵抗できないもからか…天の御遣い殿は、どうやって大陸を平和に導くのかね。大陸中の女の子を墮として天下統一でも目指しているのかね」

「うう 冗談に聞こえないよ」朱里が今度は震えてしまった

「ああ先輩、怖がらないでください。別に怖がらせようとした訳ではないんです。ほら高い高い」朱里を持ちあげて高い高いをする

「り、璃人君！恥ずかしいから下ろしてください！それと子供扱
いしないでください」

「……」その容姿で言うのか…と目で訴えてみる

「その目も止めてください！私は璃人君よりも年上のお姉さんなんですよ！」

「…フ」鼻で笑ってみる

「い、今鼻で笑いましたね?!」

「ソナナコトナイデスヨ」

「どうしてカタコトなんですか！」朱里がヒートアップしていくが、

これでは話が進まないよ、雛里と劉備が宥め、本題に戻る

「つまり袁家に降りた天の御遣い様はダメダメだという事ですね？」

「まあ、そうなりますね。だから、私は雛里ちゃんとの幽州に来たんです。」

「で、お二方は劉備さんに仕えるんですか？」

「そ、それは　　」朱里が若干言葉に詰まる

「　　私は璃人君に仕えたいでしゅ！」雛里が叫ぶ

「・・・あわわ先輩まで何言ってるんですか？昔、話しましたよね？オレはそう言う事はやりたくないんです。それにそれをやれるだけの器もない。」

「そんなことないです！璃人君はもつと自分に自信を持つべきです！少なくとも私は璃人君に導いてもらえました！」朱里が力強く呟く

「　　オレが導いた訳ではないですよ。先輩が変わっただけです。何度も言いますが、オレは人を仕えさせる気はないです」

このまま、平行線をたどりそうなので、星が一つの妥協案を出す

「まあ、このまま続けても、変わらないだろうから、ここは一つ時間をおいたらどうだろうか？これから、私達は璃人の故郷に帰るところだ。璃人にも考える時間が必要だろうか？　　付いてきた

いはは付いてくれば良いし、そうでない者はここで別ればよい。その後、考えても尚、璃人に仕えたいというのであればまた申し出ればよい。」

「いや、星さん何を勝手に　　」 小声で星に話しかけるが

「ここはこうでも言わないと、進まんたる？それにお主も故郷を見れば何か考えが変わるかもしれん。私もお主になら仕えても良いと思う」

「星さんまで言うんですか　　ハア」　　まあ、結論は変わらないうが、ここは星さんの提案に乗りましょう。でも、オレは絶対にやりませんから！」

璃人が了承した事で、今回の里帰りのメンバーはこの場にいる公孫賛を除く全員となった。劉備一行も付いてくるらしい。

璃人としては団体行動はあまり好きじゃないし、自分以外はすべて女性と言う環境で肩身が狭い事もあるのだが、それを言ったらキリが無くなるので考えない事にした。

朱里や雛里は、昔、璃人が言っていた料理があると思っっているので結構楽しみにしている。なんか完全な観光になってしまいそうな気がするのは気のせいだろうか？今なら自分の家にオレを連れて行きたくなかったキルアの気持ちがよく分かる。

今向かっているのは母が治める城……の前の森。一応益州を追放さ

れた身なのでおいそれと帰って母に迷惑をかけるのは良くないと思
い、今は森で待機している。劉備一行とロリ先輩は先に町に入って、
町の様子を見ているようだ。

璃人は事情を知っているロリ先輩に劉備一行を任せ、星と相談中。
手紙を出そうにも、差出人不明では門番の人に捨てられてしまし、
かと言って名前を書けば、誰かに気づかれる可能性がある。その事
で劉璋に知られて母に迷惑はかけたくない。

自ら赴いても、門番に止められ身元確認の次点でOUTである。し
かも、成長した結果、どことなく母の面影を残すので気づく人には
気づかれてしまう。

「どうでしょうか？ 星さん」

「ふむ…私としては気にせず城に向かえば良いと思うのだが…」

「い、いや、それだと母に迷惑が掛るかもしれないんで却下です。
それに門番の人に捕まります。いくら年月が経っているとは言え、
覚えられているかもしれないから」

その後もいろいろ案を出すのが結局解決策は見当たらない。母の方が
ら来てくれないかな〜とか考えていると背後の茂みが音を立てる

星も少し警戒し、璃人は円を発動。 人？

茂みの方がガサガサとしたかと思ったら、何か幼女が出てきた。し
かも、泣いている。 . . . 以前にもこんな事が有ったような気がする

「うう・・・、グスツ。・・・お母あさん？」なんか、紫色の髪をした幼女が出てきた。しかも、お母さん発言

「星さん 子持ちだったんですね？あれだけ人に気が有るみたいな事を言っておいてすでに子持ちなんて 軽蔑します」

「な、んなあ、何を言ってる璃人！私はまだ誰とも子供ができるよ うな事はしておらん！」

「冗談ですよ、第一髪の色が違うじゃないですか。 でも、星さんやっぱり初心ですよね」ニヤニヤしながら星の方を見ていると、自分の発言に気づいたのか、顔を赤くして下を向く星

そんな星を放っておいて、幼女に話しかける

「それで、お嬢ちゃんは、こんな所で何をしているかな？ここは肉食動物がいるから危ないよ？」

「お母あさん いなくなっちゃった。ううう」

「あゝ泣かない、泣かない。ほら、こっちにおいで」手招きをして、幼女をこっちに呼び寄せる。さすがに、こんな怪しいメンツに近づかないかなと思ったけど、幼女はなんの躊躇いもなく璃人の下に来る。しかも膝の上

「お兄ちゃん お母さんと同じにおいがする。 あったかくてポカポカするお日様みたいなおい。」璃人は足の上に座る幼女の対

応に困っていた。 なんの警戒心もなく近づき、抱きついてきた。…子供に好かれるオーラでも出しているんだらうか？

うれしそうに座る少女の頭を撫でながら、名前を聞いてみる

「お嬢ちゃん、名前はなんて言うの？」

「璃々はね、璃々って言うの！」

「（璃々？…そしてこの髪の色）それは真名だろ？」

「お兄ちゃんなら呼んでも良いよ。なんか、お母さんみたいだから」

「お母さんの名前は分かるかい？」

「黄忠っていうんだよ。きれいでつよくて璃々のじまんのお母さん！」嬉しそうな璃々。先程までの泣き顔が嘘のようだ。

そんな璃々の顔を見て、璃人は自分の母親の事を思い出す。 似ている。それに、自分とも…

「（ああ、やっぱり母上の娘が つまりオレの妹になるんだよな？オレがここを離れてから3年くらい経ったから、オレが出てすぐ生まれたとすると、3歳くらいか。お腹の中にいた時しか見てないから、感慨深いな）」

「どうしたの？お兄ちゃん」璃々が首をコテンと傾けて聞いてくる。 こちちらが黙ってしまったから気になったんだらう。

「ん？何でもないよ。それより、お母さんとはどこで逸れちゃったのかな？ちようど良いし一緒に探そう」

「ホント?!」

「ああ、本当さ。ほら」足にいた璃々を持ちあげて肩車する。最初璃々は怖がったが、すぐに慣れて嬉しそうにはしゃいでいる

「星さん、行きますよ　それでどっちだい？」

「あつち〜」璃々が指す方向に向かって歩き始める。星は完全に空気に化していた。

.....

しばらく母上の搜索を続ける。しかし、なかなか見つからず、終いには疲れてしまった璃々は寝てしまった。そのままの状態で肩車は危ないので、今は背中に背負っている

「璃人よ、随分大事そうにしておるではないか？やはり　そういう趣味か？」

「ハハハ、バカ言わないでくださいよ。妹に欲情する兄がいると思えますか？」星の発言に笑いながらも返す

「妹？お主、妹がいたのか？それにしたって　」先程のやり取りを見ていたのだから当然の反応だ。明らかに初めて会った者同士の会話だった

「ええ、オレがここを出て行く頃にはまだ生まれてなかったんですけど、母上のお腹の中には居ましたから、オレが出てすぐに産まれたんだと思います。」

「…そうか。確かにお主に似ているな。」星が寝ている璃々の顔を見て言う

「正確には母上に似てるんですけどね。オレも母上似ですし…」

「先程、この子が言っていた黄忠殿だったか？ 確かかなりの弓の名手で劉璋配下の武将の中で厳顔と共に知られている有名人だな。」

お主の弓の腕も頷ける

「まあ、母上に教わったのはホント基本中の基本なんですけどね。」

後、厳顔さんがオレの命を助けてくれた恩人さんです。あの人もあとで挨拶に行かなくてはなりませんね…」

「まあ、それよりもこの子の母親、もとい、お義母様を探さねばなるまい。妻として挨拶はきちんとしておかなければな。」

「寝言は寝て言ってください。それよりも早く行きますよ。日が暮れると面倒だ。母上の事だから、城に戻らず森の中を探しているはずでしょうから」

その後、円を発動させれば早いんじゃないかね？と思い今自分に出来るMAXの円を発動する。半径100メートル程なので、少し歩くと反応が有った。

懐かしい……そう感じてしまうほど時が経ってしまった。母上は常人よりも気が洗練されているので見つけるのは難しくなかった。

「星さん、あつちです」璃人が方向を指さす

「ん？なぜわかる？」当然の疑問だが、ここで念の説明をしてもしようがないので適当にごまかす

「まあ、なんとなくです。向こうに母上がいる気がするだけです」

「……そうか」星も何か思うところがあるらしいが聞かずに璃人の後を付いて行った。

・
・
・
・

昔、良く遊んだ川に着いた。そして川の反対側に人がいるのが見える。

ああ、懐かしい。3年経ったがその容姿はほとんど変わっていない。こちらは背も大きくなり、母上に似ているとは言え男らしい顔つきになった。母上は気づいてくれるだろうか？……それよりも、オレの事を覚えているだろうか？

父上が死んで、その後オレの事で母上には精神的に苦勞をかけた。母上が寝てる間に旅立ったのも無意識のうちに顔を会わすのを避けてのかもしれない。だから、母上はそんなオレの事を忘れていないかもしれない……そう思うと、足が止まる。

まだ、母上はこちらに気づいていないが、こちらから、声を掛ける気になれない。……“拒絶”璃人が前の世界でもこの世界でも経験したトラウマの様なもの。今までは身内ではなく、赤の他人だったため、割り切る事が出来たが、身内、それも自分の母親に拒絶されるかもしれないと思うとこれ以上前には行けない

璃人が躊躇っているとあちらがこちらに気づいた。

そ

の瞬間親子の目が合う。距離は離れているものの、お互いの目が合った事には両者とも気づいた。璃人はすぐに目を逸らす……！！

「星さん！、璃々をお願いします！」そういうと、すばやく背中にいた璃々を預け弓を番える。星も一瞬動揺したが、璃人が見る先を見て理解した。……熊がいたのだ、それもかなりでかい

紫苑は突然の事で体が動かない。自分の娘が見つかった喜びと自分の息子に急に弓を構えられて、後ろにいる気配に気づかない。

動転し、後ずさるうとして漸く気づいた。自分の後ろに巨大な熊がいた事に

今は弓など持っていない。一応護身用に小型の剣を持っているが、この巨大な熊相手に聞くとは思えない。熊はこちらに狙いを定め向かってくる。紫苑も一応剣を構えるが無理だとは思っている。これが普通の剣なら問題なかったんだろうが、今回は小さすぎる。

自分の死を覚悟した時、後ろから声がかかった。

「母上！頭下げて！」忘れもしない自分の息子の声。少し、声変わりをしてはいるが、それでも自分の息子だと断言できる。あの日以来ずっと聞いたかかった声

感慨に耽りながらも言われた通り、その場に伏せる。伏せて瞬間に自分の頭の上を勢いよく飛んで行く音が聞こえた。

一拍も置かずに先程の熊が悲鳴を上げ、ドスンと倒れる。

紫苑もその音で熊の方を見る。先程頭上を通過した矢が熊の眉間に刺さっている。否、突き刺さっている。矢の半分以上が熊の頭に取り込み、先端が後頭部の方から見えている。すごい威力だ。自分が放つてもここまでの威力は出ないだろう。

熊の生死を確認した紫苑はすぐさま振り返り自分の息子の方を見る。そこには先程のやり取りでおきてしまった愛娘がこちらに来ようとしているのを必死に押さえている兄の姿があった。

.....

今は川の所で、熊鍋を作っている。折角仕留めたのだから、捨てるのは勿体ないので食べる事にする。ただ、問題なのは背中に張り付いて離れない璃々。なぜ、こうなったかというところ・・・

回想

「璃々！ちよつと落ち着け！このままあつちに行つても川で溺れるぞ」璃々は自分の母親が見つかったのが嬉しかったのか、すぐさま行こうとする。ここが唯の平地で有ればなんの問題もないのだが、いかんせん、ここには川が有る。三歳児がこの川に入ったら・・・
・間違いなく溺れる

「おゝかあゝさゝゝん！！」璃々はそんな璃人の事は全く気にせず突っ込もうとしている。泣きながら母を求める子とそれを阻止する少年。対外的にみれば璃人は極悪人である

妹の暴走に四苦八苦していた兄に救いの手が差し伸べられる。

「璃々ゝそのまま来たら危ないから、向こうの橋を渡ってお兄ちゃんと一緒に来なさい」

「わかつたゝ。お兄ちゃん早く行こう！」母に言う事に忠実な璃々。しかも、こつちまで行く事になっている。先程は急なことだったので、母上と叫んでしまったが、まだ心の準備は出来ていない。

「璃人も話があるからちゃんと来なさい。後、璃々を安全に届けてね。お兄ちゃんでしょう？」ニッコリ笑う母に反論できる訳もなく

「はい、今そちらに向かいます。ほら、璃々」そういつて手を差し出し、手をつないで歩いて行く。璃々も嬉しそうに手を握り返し兄を引っ張るように母の下に急ぐのだった。

「私は どうしたのか・・・」すっかり忘れられてしまった星
はポツリと声を漏らしていた。

第16話

家への帰宅とこれから

今日の前には母上が璃々を大事そうに抱きながら岩に腰を掛けて座っている。こちら側はオレ一人。星さんは家族の話に他人がいるのは良くないと言って川の方で休んでいる。

冗談で

「璃人の妻です」と言おうとしたらしいが、母上のただならぬ空気を察して、普通に自己紹介をして逃げて言った星さん。あの人はこういうときは空気を読むから、そういう所はすごいと思う。ただ、逃げた事はいつか復讐してやる。もともと、オレがここに来る羽目になったのはあの人の所為なのだから。

星に感謝してくせにこういう状況になると、他人の所為にしようとする璃人は案外ダメ人間である

「それで、璃人、先程は助けくれてありがとう。」まずは、母上のお礼から始まる

「おかあさん、お兄ちゃんのことしってるの？」母上に抱かれた状態の璃々は母上がおれの名前を知っている事に疑問を思ったのだろう、母上に尋ねている。

「あら？璃人、自分の妹に自己紹介をしなかったのかしら？酷いお兄ちゃんね」母上は笑顔のままだが、かなり怖い。

「ええ〜つとですね、確信が持てなかつたというか…」

「璃々はちゃんと自己紹介したよ。おかあさん、えらい？」褒めて〜と言つような顔で母を見る妹が今は小悪魔に見える。それは拙いぞ妹よ

「あら〜璃々は偉いわね〜。それに比べてお兄ちゃんは…」璃々の頭を撫でながら、こちらに非難の視線を向ける母上

「いや〜、オレにどうしろと？いきなり、兄ですと言っても信じられないでしょう？」正論を言ってみるが

「そんなことないわよ。貴方が私に“黙って”出て行ってから璃々は生まれたんだけど、それ以来お兄ちゃんがいるという事はちゃんと教えてきたから分かるはずよ」

「・・・申し訳ありません」

「まあ、貴方が私に別れさえ言わず“黙って”立ち去ってしまったから、仕方ないと言えば仕方ないんだけど・・・」

「・・・もうしわけありません」

「・・・おかあさん、お兄ちゃんは、璃々の本当のお兄ちゃんなの？」オレが俯いて謝っていると最初に疑問を出した璃々が入ってくる

「そうよ、私達家族を守ってくれた立派なお兄ちゃんよ……ただ、別れも言わずに出て行ったバカ息子だけ」「璃々に言い聞かせるように言う紫苑。

しかし、璃人には有る言葉が頭の中に響いた。その言葉聞いて漸く璃人は心のもやもやが取れた様に思える

もしかしたら、母は恨んでいるのではないだろうか？自分の事を忘れていたのではないだろうか？そういう不安が有って、ここに帰ってくる事が出来なかったが、今、母上の言葉を聞いてそれはないと確信が持てた

バカ息子

まだ、母上はオレの事を息子だと思っている。そして、妹に話してくれるくらい、忘れないでいてくれた。この事は璃人の内に有った不安をすべて取り除いてくれた。

その言葉がともうれしくて、涙が出そうになるのをこらえている

「おにいちゃん、どこか痛いのか？」いつの間にか、母上の下から離れ、こちらに来ていた璃々。今は、そんな璃々をちゃんと見れないので、抱き寄せて、顔を見られないようにする

「なん……でもないよ。璃々は優しいね。ちょっとだけ、こうさせてくれるか……い？」兄として妹に泣き顔を見られるのは恥ずかしいので顔は見せない

「いいよ。お兄ちゃんはお母さんと同じにおいがするから好きだもん。」璃々は抱きついた璃人をその小さな体で抱きしめていた。

向かいに座っていた紫苑には璃人の泣き顔が丸見えだったが、自分も泣いているので、ただ、笑いながら、二人の兄妹を見ていた。

-----回想終了

そんなこんなで、璃々が懐き、今は離れようとしてくれない。母上達には、折角だから手料理でも振る舞おうと思つて勇んでみたが、背中張り付くかわいい妹の所為でなかなかはかどれない。母上に応援を頼むも

「初めて会つたお兄ちゃんだから、嬉しいんですよ。今は璃々の好きにさせてあげなさい」そう言つて助けてはくれず、オレは背中には璃々が張り付いたまま。まあ幼女が張り付いた所で、どうという事はないのだけでも、包丁や火を扱う際にケガでもしたら、大変なのでかなり注意を払いながらやっている。

「璃人も妹には弱いんもんだな」

「うるさいですよ星さん。メンマを抜きにしますよ」

「ま、待て！璃人！早まるな！」

「その止め方は何か違うような気がします…」

家族の話し合いがいったん終わつたので、星さんがこちらに来て料

理を待っている。

しかも、

「先程はちゃんと自己紹介ができなくて申し訳ない。璃人の妻です。よろしくお願いします義母上」こちらの空気が良くなったことで、そんな事を言いだした星さんに向けてお玉を投げつけてしまったのは仕方がない。しかも、それが星さんの頭にクリーンヒットしたので悶絶しているのも仕方ない事なのだ

ただ、うちの母上は猛者なので

「あら、うちの息子はもう奥さんが出来たのね。孫の顔が早く見えるかもしれないわね」

「星さんの冗談ですから、本気にしないでください」

「あらあら。照れちゃって可愛いわね」

「人の話を聞いてください。それに仮にそうだったら、母上はおばあちゃ・・・」目の前を何かが通った

「何かしら?」「ニッコリとしながらも弓を構えている母上。それ、オレの何ですけど・・・」

「おにいちゃん、ま〜だ〜?璃々お腹すいちゃった〜」オレの背中 にいた璃々がダダをこね始めた。妹よ、お前にはあの母上が見えないのか?今料理に戻ったら確実にやられるぞ!

「・・・璃々もそう言っているから、早く準備してね？私も璃人の手料理楽しみだわ」

「なら、その弓を下ろしてください。そんな命を狙われながら料理をするなんてできません」

「あら、やくね。私が息子の命を取るわけないでしょう？ただ、世間知らずの息子をちよつと教育しようと思ったただけよ？・・・璃人覚えておきなさい、女性に年齢の関わる発言は禁句よ」

「ただ、事実を述べただけなんですけど・・・」

シユン！

「おおっと！・・・何するんですか！」

「聞きわけのない息子にお仕置きしようと思っただけよ。良い璃人、そう言う発言が身を滅ぼす事になるからちゃんとしていなきゃダメよ？」笑顔で弓を構えるのは止めて欲しい

「わ、わかりました」

「うれしいわ。やっぱり聞きわけの良い息子ね」そんな脅しで反抗できる息子がいたら会ってみたいわ！つと言えたらどれだけ良かったかと、璃人は心の中で思った。

「おなかすいた」

背中
の妹がのほほんとしている事が今は非常に羨ましい

食事も終えてこれからの事を話すために城に向かう事にした。オレが城に向かうのは問題だろうと母に言ってみたのだが

「息子が家に帰ってくるのに何の問題が有るのかしら？」と真顔で言われてしまったので反論できず、しぶしぶ母上について行く。

城に向かう途中で先輩一行を見つけたので、ついにつれて行く事にする。母上は誰が本命なの？と聞いてきたが無視した。ただ、気になったのが

「あわわ、璃人君、とうとう…」あわわ先輩が何か勘違いしている。

まあ璃々を背負っているので誤解を招く事も仕方ないのだが・・・
あわわ先輩、「とうとう」とはどういう事でしょうか？後で、じ
くくくり話合う必要があると思う。フフフフ

城に到着

最初は門番の人が何か言おうとしたらしいが母上

「私のお客様よ。失礼のない様にね」と言ったら何も言わなくなつた。ここでの母上の信頼度は高いようだ。

城の中に入り、広間に向かう。あそこが一番広いし話合つにはうつつつけの場所だろう。

ただ、行つておきたい場所がある。

「母上、少し外しても宜しいですか？父上の所に行きたいと思ひまして。」

「・・・そうね。行つてあげて。あの人も貴方の成長を喜んでくれると思うわ」

「はい。では、失礼します。」

気配を消し、城内を移動。城の中の人に見つかつてもめんどくさそうなので、絶で気配を消し移動する。この時代は基本土葬なのだが、父上の遺体は火葬されて、壺の中に納められているはず。旅立つ際に、厳顔さんにそうお願いしておいた。

この土地を離れなければいけないかもしれない時に、父上の遺体だけ残してはなれるのは母上には出来ないだろうから、いつでも一緒にいられる方が良くと火葬のやり方を教えて旅に出たのだ。

厳顔さんは約束を守る人だから、ちゃんとやってくれただろう。説明がなければ母上は反対したかもしれないけど・・・まあ、いきな

り燃やすなんて言われたら、この時代の人なら驚くわな

父上の遺骨はおそらく母上の部屋に有るだろう。母上なら誰かに管理されるよりも自分で管理する方を選ぶだろうからな。

・
・
・
有った

母上の部屋に入るとすぐ見つかった。さすがに遺影はないが、仏壇の様な物が有る。母上パないツス

「父上、恥ずかしながら戻ってくる事になりました。父上との約束を守れているかは分かりませんが、今はなんとか家族全員無事ですね。聞いてくださいよ、旅の途中で会った星さんという人が物すごいメンマ好きで……」

璃人は今までの事を父の遺骨に話している。この城を出て3年いるんな人に出会った。良い出会いもあればよくない出会いもあったが、璃人にとっては思い出の一つだ。それをうれしそうに報告する璃人は年相応の少年に見えた。

まだ15歳。元服したとはいえ15歳の少年が一人で旅をするという事はそれなりに苦勞が有るものだ。いくら前世での記憶が有るとは言え、精神は肉体に引つ張られる。無意識に溜っていたものを吐き出すかに様に話し続ける璃人。璃人がここまで話し続けたのはどれくらいぶりの事だろうか？

璃人が話を終えて部屋を出ようとすると、何か温かいものが肩に乗る。…まるで人の手の様なもの

後ろを振り返ってみるが誰もいない。…しかし、この感じは昔、感じた事がある。

「父上、また来ます」遠い日の記憶に残る父親の温かな手を思い出しながら、璃人は広間に戻るのだった。

広間

広間では何やら話し合いが行われている。状況がつかめないので、近くにいたあわわ先輩に聞く

「あわわ先輩、今はなんの話をしているんですか？」

「あ、璃人君。…ええ〜とね。…」なぜか言葉に詰まる雛里。その様子を見た璃人は、どうやら女性だけの話だと、勝手に誤解し、話さなくても良いと言おうとしたが

「劉備さんが璃人君に仕えたいと言ってしまつて、それを黄忠さんが聞いて、何やら、話し合いに発展してしまつたんです」

「なん…だと」

母上に聞かれた？それは別にいい。大した問題ではない。ただ問題になるのがその事を母上が考え出した事だ。昔の母上なら、適当に

ごまかしてくれたが、今の母上はどうだろうか？

考え出したという点で、かなり心配になってきたんですけど

「あら、璃人戻ってきたのね？あの人にはちゃんと話せたかしら？」

「え、ええ、一応」急に話を振られるもんだからちよつと焦った

「何よ、その態度は？焦ったりして、相変わらずおかしいわね」
クスクスと笑いながら見ている母上だが、この人も相変わらず失礼だ。昔から、おかしいと連呼していたからな…

「それで、母上、今はどういう状況なんでしょうか？」

「貴方がこの城の太守になるという事は確定したんだけど、その後どうしようか考えているのよ」

「……は？ すみません、母上、あまりの事に今の言葉が頭の中に残りませんでした。もう一度、言ってもらえ「貴方をこの城の太守にすると言ったのよ」ませんか… 八八八、母上、いくらなんでもそれはないでしょう？3年ですよ？見かけが変わってないから安心しましたけど、母上もとうとうお歳のようにですね シュン そおおい！！」飛んできた矢を華麗に回避する璃人

「何か言ったかしら？年がどうとか、聞こえた気がしたんだけど… また教育が必要なのかしら？私としては最愛の息子に教育を施す事は構わないんだけど…」笑顔なんだけど、持つてる弓が怖い。

「いえ、あまりの発言に気が動転してしまつて……それと、教育は結構です。」

「あら、残念ね」

「母上、なんか変わりましたね。」

「そんなことないわ。ただ、女性はみんな年には敏感なのよ」

「……理解しました」視線の先には幼女先輩

「な、なんですか！こちらを見て納得しないでください！私達は璃人君より年上なんですよ！」

「はわわ先輩、まだ何も言つてませんよ」

「うううう」朱里がなんか勝手に勘違い？して発言したが、自分の失言に気づき顔を赤くしている。

「璃人も随分と成長したようね。あの人に似てモテる様になつて……」
「なんか、母上も勘違いして一人トリップしているが、ここは現実に戻つてもらわないと」

「母上、とりあえず、戻つてきてください！話が進みません」

「は……ごめんなさいね、あの人の出会いから思い出してしまつたわ」

「やっぱ母上変わりましたよ。なんか、オレの中の母上が総崩れです……」

「私は昔からこんなものよ。それで、璃人を太守にするという所に話を戻すけど、劉備ちゃん達の話聞いて、私も璃人を城の領主にしようと思ったの」

「いやいやいや、それはないでしょう。オレこれでも追放された身なんですけど」

「「追放?!」「事情を知らない劉備一行が叫ぶが気にしない

「でもね、璃人。益州の最近の状況を知ってる?」

「いえ。益州の事は聞かないようにしていたので…」

「劉璋様の乱心。民の税率を上げ民衆は普通に生活するだけで精一杯。生活する事も困難な人も出て来てるわ。それに賊が来ても放置と言った状況で、なんとか私と桔梗で頑張っているけど、それも限界に近いわ」

「他の家臣の方はなんて?」

「何も言わないわ。一度、進言した人がいたけど、問答無用で追放私や桔梗も追放されかけたけど、私達がいないと州が滅ぶと言われて追放は無しになったわ。明らかに様子がおかしいの。なにが、人に操られているような病気とも違うようだし」

「薬ですか?毒薬なら人間の精神を崩壊させる効果のやつも有りますし…」

「私と桔梗はその線が高いと思っていてるけど、まだ何とも言えないわ。でも、仮に薬が使われたとして、一体誰が」

紫苑と璃人が話しこむ中、広間のドアが開けられ、人が入ってきた。あの人も変わってないなと素直に璃人は思った。

「紫苑、邪魔するぞ……お？ おお！、お前子苑か？」ずか
ずかと部屋に入ってきた桔梗は璃人がいる事に気づき驚く

「ええ、お久しぶりです、巖顔さん。なんとか、まだ、生きてます」
桔梗に頭を下げる璃人

「ハツハハ、立派になったじゃないか、あの小僧が。どれ、あの時の約束を果たそうではないか。」

「はい。オレの真名は璃人と言います。それと、父の事、ありがとうございしました。」

「うむ、しかと受け取った。わしの真名は桔梗と言う、受け取ってくれ。それと、お前の父の事なら気にするな、お前に言われた通りにやっただけじゃからな」

「ありがたく頂戴します。」璃人が自分の真名を受け取ったのを見て桔梗が紫苑に話を戻す

「紫苑、璃人が帰ってきた事には驚いたが、今は一体どういう状況じゃ？お前の客のようではあるが……」

「正確には璃人のお客よ。なんでも、璃人に仕えたいらしいわ」

「ほお」桔梗が好奇心のある目で璃人を見る。璃人はその視線から目を逸らし、母に反論する

「母上、オレは誰も仕えさせる気はありません。それに太守になるつもりも有りません」

「あら、そう？それじゃ、仕方ないわね。諦めましょう」

「いくら母上に言われても……あれ？諦めてくれるんですか？」

「ええ。私は自分の息子に無理をさせる気はないわ。璃人がやりたくないというのなら、その意思を尊重するのが母親としての役目よ。お母様、貴女が女神に見えます。さつきは変わったなんて言っただごめんなさい。やはり昔のやさしい母上でした」

「なんじゃ紫苑、璃人にやらせんのか？こやつは必ず大物になるぞ？」

「私も、そう思うけど、息子に無理をさせる気はないわ。この子には迷惑しか掛けてない訳だから、生き方くらい選ばせてあげたいのよ」

「……紫苑」紫苑の顔を見た桔梗はそれ以上は何も言わなかった。その顔は後悔で埋め尽くされているようだったから……

「ちょっと待ってください！それじゃあ、黄恩君はこの城の太守にはならないという事ですか?!」

「そう言う事になるわね。ごめんなさいね劉備ちゃん。」紫苑が優しく諭す

「……でも、そしたら、私はどうすれば……」落ち込む劉備。璃人に仕えられると思っていたのでその落ち込み方はかなり暗い

「母上に仕えれば良いじゃないですか？オレが言うのもなんですけど母上は優秀ですよ。それに桔梗さんでも良い」

「あらあら、息子に褒められると照れるわね」手を顔い当てながら喜ぶ紫苑

「わしも璃人から高評価だとはな。」腕を組みながらも、うれしそうにしている桔梗。

二人の中で璃人の株は高いようだ。璃人本人はなぜだか知らないが…

「でも……」泣く劉備

「あなたはまだ、何も出来ないただの人です。国を思うなら優秀な人の下でもっと学ぶべきだ。その後、独立でも何でもすれば良い」

「……わかったよ。でも、いつか必ず黄恩君に仕えるから」

「永遠に来ないでしょうけど」

「うつつ、が、頑張るもん！　黄忠さん、私が黄恩君に仕えられるようにビシビシ鍛えてください！お願いします！」

「あらあら、璃人もなかなか罪づくりね。任して頂戴、私が立派に鍛えて見せるわ」

「あ、ありがとうございます！私の真名は桃香です。こっちの二人は私の大切な家族の　」

「関羽雲長です、真名は愛紗と申します。桃香様ともども、よろしくお願いします」

「鈴々は張飛翼徳なのだ。真名は鈴々なのだ」

「コラ鈴々！ちゃんと挨拶しろ」妹を叱る姉だが、どこか微笑ましい

「あらあら、良いのよ愛紗ちゃん。　私の真名は紫苑と言っの。よろしく頼むわね。」

「恙無く終わった所なんで、それじゃオレはここら辺で・・・」

「何を言っているのかしら？貴方の家はここでしょう？一体どこに行こうというのかしら？」

「ええつと母上？オレ追放された身なんですって」

「それがどうかしたのかしら？今の劉璋様は民の支持もない。むしろ暴君として知れ渡っているの。それなら・・・」

「フフフ、そう言う事か、それならわしも乗るぞ、紫苑。最近の劉璋には飽き飽きしていたからのぉ。それにやつを取り巻きどもも、民を食い物にしてる下種な輩じゃ。そろそろ、潮時じゃろつて」

「あのゝもしかして、謀反でも起こす気ですか？」恐る恐る聞いてみる璃人

「「勿論！！」」二人の笑顔が怖かった。

この後絶対めんどくさくなるなと思うも嘆くことしかできない璃人であったが、ここで、思わぬ介入が入る

「「それは、止めておいた方が良いと思いましゅー！！」」

二人の幼女が同時に声出したがことで、皆の視線が幼女に釘付けになったのだった

第17話 璃人、赴く

「それは止めておいた方が良いでしょう!!」「二人の少女がそんな事を言いだした。

その言葉で、全員の視線が二人に向く。皆が自分たちを見ている事に気づき、帽子で顔を隠そうとするあわわ先輩。

「それはどうしてかしら?」母上が代表して聞く

「それは、劉璋様がまだ、漢王朝の臣下だからです。いくら、暴政をしているとは言え、謀反を起こせば、こちらが、討伐対象になります。衰退しているとは言え、漢王朝に権力が有るのは事実ですから・・・」朱里が悔しそうに言う。今の漢王朝を嘆いているのだろう

「確かにそうね・・・でも、このままでは、益州の民が持たないわ」

「そうじゃの、たび重なる増税と賊の襲撃で、民は疲労しきっている。いつ崩れても、おかしくはないのお」母上と桔梗さんが現状を説明する。

「はい、ですから、謀反などではなく、ちゃんとした大義名分を持つて戦えればいいですけど・・・」

「私や桔梗だって、官軍へのコネはあまりないし・・・この中で都に親しい人がいる人なんていないだろうし・・・」

「困ったのお〜」皆が思案にくれている中、璃人は我関せずを貫いていた。璃人にはこれっぽっちも戦う気はないからだ。しかし、星の言葉が、それを許さなかった

「璃人よ、お主なら、知り合いがおるのではないか？いろいろ、旅をしてきたのなら、洛陽の方にも言った事が有るであろう？お主の事だから、誰か、お偉いさんに知り合いでも居るだろう」

「オレをなんだと思っっているんですか？基本危険な所は回避していたんで、洛陽になんか言った事はありいませんよ。」

「と言う事は、お偉いさんには、知り合いがいると・・・そう言えばそう言えば私達が最後に別れたのは陳留だったな。あそこは曹操殿が居ったはず。お主、曹操殿と知り合いであろう？」「ニヤッと笑う星さんに少し反応してしまった

「そ、そんなことないですよ。全く知りません、はい」

「お主、嘘が下手だな。お主が嘘を吐くと、必ず、私に求愛を求める視線をする。さつきから、ずっと感じていたぞ」

「そんなことあるかい！！どんなやつだよ！嘘を吐いて求愛を求める奴って。会ってみたいわ！」

「で、曹操殿とはいつ知り合ったのだ？」

「何？今までの話は無視なんですか？知り合つても何も城に呼ばれたら……あ」

「墓穴を掘つたな璃人？お主は冗談を言っている間は、意外とスキが多いからな。まだまだ、精進がたらんぞ？」

「クツ……これが孔明の罠か！！ぬかった」床に手を着き落ち込む璃人

「な、なんで、そこで私が出てくるんですか！私は何も罠なんて張ってませんよ！」朱里が慌てて否定するが

「いや、なんとなく、言わなければならない気がして……」

「璃人君って時々意味のわからない事言うよね……」

「コラあわわ先輩、人には言つて良い事と悪い事が有るんです。今の発言でオレの心は深く傷つきました。なので、部屋に帰って寝る事にします」

「あわわ。璃人君待つてくださいい」雛里が璃人にしがみ付いて引き留める

「離してください。……あれ前にもこんな事が有つた気が……」

「私もそんな気が……」二人で首をかしげる

「二人で考えれば、思いだすかもしれませぬ。あわわ先輩。とり

あえず、ここを出て二人で話し合いました。」

「そうだね。私も思い出した方がスッキリするし。」

「はわわ、ダメだよ雛里ちゃん、そうやってここから逃げようとしてる、璃人君の罠だよ。」朱里が雛里を引き留め、璃人の策を崩す

「ちっ、もう一人の幼女がいた事を忘れていた。ここでも邪魔をするのか、諸葛孔明！」

「璃人、かつこつけているところ悪いんだけど、話が進まないから、戻していいかしら？」笑顔な紫苑。だけど目が笑ってない

「・・・はい、母上」やはり母には逆らえない

「それで、貴方は官職の方と親しいのかしら？」

「親しい訳ではないと思います。料理の腕を見せただけなので。知り合い程度ですね。だから、オレに期待しても無駄ですよ。」本当は真名まで交換したんです」とは言わない

「でも、そうになると、何か、功を立てて、官位を貰うしかないわね。・・・璃人、あなたどの位強くなったのかしら？」

「ええっと、一般人相手に逃げられる程度ですね」ナチュラルに嘘を吐く

「璃人、嘘は良くな・・・」星さんがいきなり倒れた。

「星・・・さん？だ、誰だ、星さんをやったやつは！くっくっく」

「……いや、おまえだろ！！」全員に突っ込まれた。なんだよ、ちよつと絶で背後に忍び寄って、手刀で気絶させただけじゃないか
「……璃人、お主、随分と腕を上げたようじゃの。先程の気配の絶ち方、見事じゃった。その場にいたはずなのに、一瞬、消えたかと思つたぞ」

「何を言ってるんですか、桔梗さん。気配を絶つ技術と強さは関係ないですって。オレは逃げるためにこの技術を身につけたんですから」

「お主、情けなさすぎるぞ。もっと、何かないのか？こつ……」

「ありませんね。全ては生きるためです。断じて武勲を上げるためなどではありません。」

「ち、ちよつと待ってくれ！それでは、黄恩殿に負けた私の立場はどうなる！？」璃人の発言に反応した愛紗が話に入ってくる

「さあ？少なくとも、オレは貴女に負けるなんて微塵も思いませんし、貴女の立場なんて物も知りません」

「それは私が弱いという事か？」璃人に負けた手前、強く出れない愛紗が若干俯きながら尋ねる

「武に関してはお強いと思いますよ。この大陸でも上から数えた方が早いのは確実です」

「そ、それでは、黄恩殿は私よりはるか高みにいると？」

「いえ、そんな事ありません。戦った事はありませんが、星さんと同じくらいではないかと思うんです。張飛ちゃんとやったら、負けるかもしれません」

「ふむ」「うにゃ？」 思索顔をする星とちょっと嬉しそうな鈴々

「確かに、趙雲殿は強いであろうし、鈴々も強いのは事実です。しかし、私とそれほど離れているものなのですか？」

「はい、全く違いますね。張飛ちゃんの方は微妙ですが・・・」

「一体の何が・・・」

「・・・それは心の在り方です」

「心の在り方？」

「前に戦った時にも似たような事を言いましたが・・・あなた、戦う理由を人に預けているでしょ？」

「!」 「目を見開く愛紗

「自覚はあるようですね。

はつきり言って貴女が弱いのは武でなく心。“くくのために”と言って戦ってる人程ブレる人が多い。別に他人のために戦うなど言っているわけではないんですよ。ただ、自分の戦う理由を他人に任せるということですよ。

貴女の場合は、劉備さんが望んでいるから戦う。だから、あの人の理想に反していても、望んでいる事だから、と特に考える事もなく戦ってしまう。良い例が賊殺しです」

「……」何も言えない愛紗

「オレの母上はオレが追放されると知って、一緒に出てくれると言ってくれました。父上が病気で亡くなって、まだ、璃々がお腹の中にいるのにも関わらず、城の城主という立場を捨ててまで、オレを守ろうとしてくれました。……それ自体はオレが止めてオレだけ出たんですけど……」
だから、他の人のために戦うという事は悪い訳ではありません。何かを守ろうとする行為は何物にも代えがたいでしょう、特に身内なら尚更。……ただ、貴女はそこに自分の責任を預けて、自分の責任から逃れようとする。これは劉備さんにも言える事ですけど……」

「私の武には何も乗せられてないという事ですか？」

「はい。貴女の武は軽い。‘重さ’ではなく、‘思さ’がないのです。何の目的もなく振るわれる武など怖くもなるともない。」

「私はどうすればいいのでしょうか？」

「さあ？そんなのオレに分かるわけありません。自分の戦う理由は自分にしか分かりません。たとえそれがメンマを求めるためだろうが、生きるためだろうが、自分の決めた事なら、後は押しとおすだけです。あ、犯罪行為は別ですよ」と最後の方でふざけてみるが、愛紗の目はまっすぐ璃人を見つめ、戯言など気にしないようだった

「あらあら、うちの子も立派になって……」なぜか袖口で目元押さえながら、そんな事を言っている母上

「そうじゃの。あの時はただの小童だったのに、今では立派な主じやて」腕組みしながらいう桔梗だが、聞き捨てならない言葉が

「誰が、誰の主ですか！オレはそんな面倒な事は絶対にやりません！」

「惜しいのお、お主ならきつと立派な王になれるだろうに・・・」

「いやいや、無理ツス。つつか勘弁してください！オレは平和に生きられればそれで十分です」

「なんと?!大陸を平和にして生きていくとは、やはり璃人もなかなかの器をもっておるようじゃな」

「人の話聞いてくださいよ！オレは自分の平和のために生きるんです。他の人がどうなるかと知った事ではありません。あ、母上や璃々は別です。大事な家族ですので。ですから、家族を守る以外では基本的に争いたくない訳ですよ。」

「どうやら、決まったようじゃな紫苑」

「ええそうね。私も息子がこんなに成長してくれて嬉しいわ。」「ニコニコしながら言う二人

「ええ〜っと、一体何の話でしょうか？」

「ねえ、璃人、ここに朝廷からの賊の討伐の勅が届いているのよ。」

本当は劉璋の下に届いたんだけど、こっちに回してきたわ。それで、私達が討伐に行く事になるんだけど、今は乱心した劉璋の所為で、ここを離れることはできないの」

「つまり、オレにその討伐に行けと？」

「そついうことよ。兵は、内と桔梗の所から連れて行って良いから、手柄を上げて来てね？序に官位とか貰ってくれとありがたいんだけど……」

「……条件付きなら良いですよ」

「あら、意外ね？もっとダダをこねると思ったんだけど……」肩透かしを食らった紫苑がそつつぶやく

「どうせさっきの台詞を言質にとって、行かせようとしてたくせに……」少し口を尖らせなが言う璃人の様子は子供のようだ

「ごめんなさいね。それで、条件と言うとなにかしら？」

「討伐には参加しますが、官位は母上が受け取る事にしてください。どの道、劉璋を倒せばここには戻ってこれるので、オレが官位を貰う必要はないですし、母上が貰った方が、高い位をもらえるでしょう？」

「……わかったわ。私が言える事じゃないけど、気をつけてね」

「はい。ただ、一つ質問が有るんですけど、母上はいつからこの話を？」

「最初からよ。そもそも桔梗が今日来たのはその話をするためだったし、ちょうど、璃人が帰って来てくれたから……」

「面倒事を押しつけようと……」ちよつと不満そうに言う

そんな璃人の様子を見て、紫苑が真剣な顔になる

「ごめんなさいね、璃人。あなたが、この領民に関して、良い思いを持っていないのは知っているわ。……でもね、璃人、この領民もあの人が守ろうとしたものなのよ。あなたにとって、良い思い出がないのは知っているけど、私もこの人達を守らないといけないの。あなたの母としてではなく、この町の太守としての自分を優先している私を許してとは言わないわ。本気で嫌ならこの話を辞退してくれても良い。

ただ、忘れないで欲しいの、ここはあの人との唯一の思い出の場所。あなたにとって唯一無二の場所よ」

「そんな事言われなくても分かってますよ。母上がオレの事を思っ
て言ってくれてる事も。 オレに手柄を取らせるのはオ

レがここに帰って来られるようにするためでしょ？それに、父上との約束もあるし、璃々だっている。大切な妹、見捨てるほど、薄情な奴になつたつもりはないです。家族を守るためにこの民を守るしかないなら、そうしますよ。」璃人の穏やかな、それでいて、しっかりとした顔が周りの人間にも見えた。特質系の人間に多い、カリスマ性の片鱗を見せたのかもしれない。

「ありがとう璃人」紫苑の顔は璃人の成長を見てより一層の慈愛で満ちていた。

それで、璃人が賊（黄巾党と呼ばれているらしい）の討伐に参加する事になり、今は作戦会議を開いている。参加メンバーは、璃人、星、ダブル幼女、桃香、愛紗、鈴々。

「では今回の賊討伐においての作戦会議を行いたいと思います。はわわ先輩、司会進行をどうぞ」

「はわわ、わ、私ですか？が、頑張りましゅ！　　まず一番

大事なことから決めましょう。誰を大将にするかですが……」

「はい！奇をてらつてあわわ先輩が良いと思います。他の諸侯も幼女相手なら、油断して色々な情報をくれるかもしれませんし……」
璃人が手を上げて言う

「わ、私は幼女じゃありません！それに私だと油断よりも先に舐められちゃうよ〜」雛里が怒りながらも冷静に答える

「じゃあ、星さんしかいないけど、仕方ないか……」

「璃人よ、自分がやるといふ選択肢はないのか？」

「そんなのあるわけないじゃないですか〜。オレは他人の事まで面倒を見てる余裕がありません。」

「そんな事を言ったら、私もそうだぞ？討伐となると、最前線に赴く訳だし……」

「それもそうですね。そうすると、残された道が、戦わなくて、幼女でもない人となりますが……」璃人の視線が桃香の方に向く

「え、わ、私?!」驚く桃香だが、普通にわかると思う。やはりアホの人なんだと璃人は思った。

「ええ、消去法としては貴女しかいないですけど ……アホなんですよね〜…」本音がさらっと出る

「わ、私はアホじゃないもん!人よりちょっとだけ考えるのが遅いだけ!」

「言つてて恥ずかしくないですか?」

「うっうっう」

「まあ、一番良いのは、はわわ先輩かあわわ先輩なんですけど……ハア〜」二人を見てタメ息を吐く

「「なんですかそのため息は!!!」」幼女二人が反論しようとするが

「でも、劉備殿では、いざ主同士の話し合いになった時に簡単に言いくるめられてしまう気がするんだが……」

「「無視ですか?!」」星が華麗に無視した事に、反発する二人

「確かにそうだけど、一応母上代理扱いにして。軍議系の話し合いになったら、先輩方のどちらかを補佐につけましょう。そうすれば言いくるめられる事もないですし……」

「私ってほとんど信用されてないんだね・・・」星と璃人の評価が底辺なのを聞いて落ち込む桃香。いつもなら愛紗が慰めているのだが、今日はそう言ったそぶりは見せない。

「当然と言えば当然ですね。まだ、貴女は見習い程度なんですから、下手に主らしく振る舞う必要はないです。それに、官位は母上に行きますが、活躍すれば、貴女の名前も広まる訳なので、独立もしやすいんじゃないですか？」

「わ、私は、黄恩君に仕えたいから・・・」

「無理です。」

「うづうづうづう」落ち込んだ桃香を放っておいて、話を進める

「とりあえず、大将代理は劉備さんに決めました。後は指揮する人達ですが、皆さんでよろしいですか？」話を戻したはわわ先輩が尋ねる

「はい、オレ無理です！人を率いた経験がありません！なので、一般兵扱いをお願いします」

「！！！！！！」皆の視線が璃人に向く

「何を驚いているんですか？オレは料理人ですよ？軍を率いる経験が有るわけないじゃないですか」

「た、確かにそうなんだが、お主が武官でない事をすっかり忘れて

いた。普通に考えれば璃人がここにいるのはおかしいことだな」星が思い出したように呟く。確かに璃人は武官ではないのでそれも道理だ

「でも、璃人君も指揮する経験とか持つておいた方が良いんじゃない？」

「オレは単独行動の方が向いているのでその必要はないですよ。軍を率いるという事はその命を預かる事になる。オレにはそんな事できませんよ、あわわ先輩」

「……そうですか」璃人の顔を見た雛里はそれ以上は何も言えなかった。璃人の顔は感情を無くした能面のような顔をしていたから

基本方針が決まり、後は軍の練度を見てみない事には作戦も決められないという事から、それぞれが訓練に行くこととなった。紫苑や桔梗がすでに伝えてあるので兵士たちも賊討伐に向かうことには納得している。ただ、それを率いる者達が新参者なので、良い気はしないだろうが、訓練を見ればその意見も変わるだろう。此処にいるメンツは大陸でも有数の猛者なので兵もすぐに認める事になるだろう

璃人は一般兵扱いだと、勿体ないという事なので、遊撃として参加する事になった。遊撃と言っても補佐と言う訳ではなく、遠くから賊の頭らしきを狙って軍を乱す役割だ。

璃人の気配を絶つ技術は誰よりも優れているのでこの役割が充てら

れた。本人もこっちの方が性に合っていると云って了承してくれた。

二週間ほどしてそろそろ、賊討伐の軍議が開かれる諸侯たちの集合同場所に向かう事になった。調練の方は、上手く行ったらしい。まあ、もともと、桔梗や紫苑の部下なのでそれほど練度が低い訳でもなく、優秀な指揮官がついた事でさらに戦力が増したようだ。

璃人の方は基本的には璃々とほとんど毎日を過ごしていた。と言うより璃々が璃人から離れようとせず、常にベツタリだった。なので、璃人の鍛錬にもついてきてしまい、璃人が苦労したのは言うまでもない。璃々の周りを警戒しながら、鍛錬を続けるのは、なかなか気が苦労が溜まるものであった。璃人も断れば良いんだが

「お兄ちゃんは、璃々の事きらいなの？」と涙目で言う璃々を断ることなどできず、ずるずると鍛錬を続けて行った。妹には勝てない璃人がそこにはいた。

旅立ちの時も璃人に付いて行くこうとする璃々だが、さすがに今回は危ないので

「帰ってきたら、いっぱい遊んでやるからな」

「ちゃんと、帰ってくるの？また、いなくなったりしない？」

「帰ってくるよ。だから、良い子で待ってるんだぞ。帰ってきたら美味しもん食べさせてやるからな。」泣きそうな璃々の頭を撫でながら、優しく話しかける

「……うん、璃々、良い子にしてる。だから、約束だよ」不安そうな顔で、璃人を見つめる璃々

「ああ。……そうだ、じゃ約束を守るためにおまじないをしようか？」

「おまじない？」首をコテンと傾ける璃々

「そう、おまじない。璃々、小指出して」

「う、うん」言われた通り、小さな手の小指を出す

璃々が出した小指に自分の小指を絡ませある事をつぶやく

「ゆび切り拳万、嘘つくいたくら〜ハリセンボンの〜ます、指切った」そう言って、繋いでいた小指を話す

「は、はり、千本ものむの！？」璃々が泣きそうになりながら聞いてくる

「そうだぞ、嘘ついたら、大変だからな。だから、璃々は良い子にしてるんだぞ。それで、オレはここに帰ってくるからな。」

「う、うん」ちょっと不安そうだが納得してくれた

「じゃあな、璃々」

「じゃあじゃないよ！“またね”だよ、お兄ちゃん！」ちょっと怒ったように言う

「・・・そうだな。」

またな璃々」

「うん！またね、お兄ちゃん」

そう言っつて璃人達は出発し、璃々は璃人の姿が見えなくなるまで、手を振るのだった

第17話 璃人、赴く（後書き）

なぜか、紫苑が嫌な感じになってしまいました。が、紫苑は璃人の事が大好きです。なので、その点はご了承ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5136y/>

真・恋姫無双

二度目の人生も波瀾万丈

2011年12月29日03時39分発行